
神に力を与えられた少年

蒼緋

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

神に力を与えられた少年

【Nコード】

N0885J

【作者名】

蒼緋

【あらすじ】

これは成績優秀・スポーツ万能・喧嘩無敵でアニメ・マンガ・ゲームが大好きな主人公がFate・月姫・空の境界の世界でいろんなことをする物語です。

プロローグ・神に誘われる

俺の名は明神蒼緋 ミヨウジンソウヒ 年は18歳この風雲学園の生徒会長だ

そしてここは生徒会室、俺はここで三人の生徒会役人に勉強を教えていた

「ここらへんのテストでの重点点は……」

そこで俺の言葉は途切れ視線は教科書から一人の男に移った、その男は眠たいのかこっくりこっくりとしている、そこで俺は手元にあったまだ蓋を開けていない100円の缶ジュースを結構な力で投げた。

「俺の前で寝るとはいいい度胸だな？そんなに地獄が見たいか藤野？」
こいつは藤野衛 フジノマモル 18歳地毛が金髪で髪型は短髪見た目が馬鹿だと頭の中で説明していると投げた缶ジュースが痛かったのか藤野は怒って

「明神——っ！——！」

「ああ？追試がヤバイと泣きついて来たのはお前らだろうが」
「私は自主参加です！」

このゴムで髪を耳のちよつと上らへんで結んでいるのが役員の一人、平坂小雪 ヒラサカコユキ 17歳なかなか頭はいいそして天然で明るい性格の女子だ（天然過ぎて困っているが）、それに続いてもう一人

「僕、関係ないんですけど……」

と言ってくる山本猛 ヤマモトタケル こいつも18歳髪は長めで

眼鏡をしている見るからに勉強ができそうだが学力は以外にも平坂の方がちよつと高い、性格は暗くて真面目なやつだ。
という風に脳内説明していると藤野が

「俺やつぱもういいわ・・・ってぐふう!!」

いきなりこんなことを言うから、俺は藤野を立たせ

「すまん手が滑った」

綺麗に俺の右拳が藤野の鳩尾に入った

「生徒会役員の管理も生徒会長の仕事だ、こ^{オレ}うも勉強が出来ない役員がいると俺の品性が疑われるんだ分かったか藤野？」

「分かった分かったよ!!でも今日はもうお開きにしようぜ外も暗いし」

確かに外はもう暗い、男子の藤野と山本はともかく女子の平坂はあぶないな

「よし、じゃあもう終わるか平坂戸締りしてくれそれと藤野、山本はコーラを急いで4本買って来い」

「え・・・何?奢ってくれんの?」

「全部俺のに決まっているだろう」

「ただのパシリかよ」

「山本、金はお前に持たせる。コーラは藤野に持たせて来い」

「えゝなんで俺が・・・クツ、分かったよ成績優秀テストは全教科満点、そしてスポーツ万能おまけに喧嘩無敵の明神蒼緋生徒会長様に殺意を込めた目で睨まれたら断れる人間はおりません」

「なら早く買って来い」

「分かったよ!!」

「分かりました・・・」

戸締りを終えてずっと見ていたのか平坂はニコニコ笑っていた

「どうした?なんか面白かったか?」

「いや会長ってやっぱり会長なんですネ」

「?????」

何を言っているんだこいつは・・・まあ天然だから仕方ないか
すると走って買いに行ったのが藤野と山本が帰ってきた

「はぁ、はぁほら買ってきたぜ」

「はぁ、はぁキツイ」

「ご苦労だったな」

俺はコーラを受け取り蓋を開け、コーラを一気飲みした

「ほう・・・走ってきたのに全然炭酸が抜けてないな」

「まあ持ってたのが俺だからな」

「よし藤本はこれから俺のパシリな」

「ふざけんな!!」

「冗談だ、それより早く帰るぞ」

「明神がコーラ飲むから遅くなっただよ!!」

そんなことを言いながら学校を出る

まず女子の平坂を暗くて危険だから家まで送り、その後適当に男子
の藤野と山本を送った

そして一人になって帰っている途中何処からか声が聞こえた

『よう！！明神蒼緋君』

「誰だっ！！」

一応後ろを振り向いたが何もいないするとまた声が聞こえた

『君に害を与えるもんじゃないからあんまり警戒しないでくれよ』

「お前は誰だ、なぜ声が聞こえているのに何処にも姿が見えないそれに気配もない、どういうことだ」

『どういうことだってそりゃ、俺は神で姿が見えないのは魔法で頭に直接声を送っているからだよ』

「神？魔法？おれを馬鹿にしているのか？」

『馬鹿になんかしてないけど』

「じゃあその魔法で俺がみんなに知られてない秘密ってほどでもないがそれを当ててみる」

『分かったそれを当てれば信じてくれるんだな？』

「信じる信じないはその内容がどれだけあっているか次第だな」

『じゃあ言うよ・・・君はアニメ・マンガ・ゲームがすごく大好き・・・大雑把過ぎたかな』

「・・・信じよう」

『それだけでいいのか？』

「それだけで十分だそれに俺のことを調べようとしてもアニメ・マンガ・ゲームは地下でやってるから誰も知るはずが無いからな、で神が俺になんのようにだ？」

『単刀直入に言うとな君が今退屈してるみたいだから異世界にでも飛ばしてみようかな、と』

「ほう・・・異世界が面白いな確かにこの頃退屈で刺激が欲しいところだったんだ」

『じゃあ今からいく？それとも準備してからいく？』

「今すぐにいく」

『分かった』

神からの声が聞こえなくなり俺は待つこと数分、いきなり目の前の空間が揺らぎだしたそして揺らぎが広がり黒い孔が出来た

”俺は迷わずその孔に入った”

プロローグ・神に誘われる（後書き）

何気に主人公と投稿者の名前が一緒

第一話 飛ばされたさきは……

この黒い孔はいつまで続くんだ腕時計のライトをつけ黒い孔に入つた時の時間と今の時間を比べるとかれこれもう四時間は歩いている、それに神からの連絡も途絶えた……

考えるのはよそう、どうせ出口はもうすぐだろう……だが

「さすがにこの暗闇を四時間はきついぞ、そろそろ発狂しそうだ」

そういつつ歩いていると光が見えた、しかも四時間も暗闇の中を歩いていたら光を見ると目が痛い

「ふう、やっと出口か……ん？」

なんだか光がこっちに迫ってきてるような………まあどうせ俺に害は無いだろう

「さあ、どんな世界が俺を待っている」

言葉を言い終わったとたん俺は光に包まれた

「………な、
に？」

言葉に表せない、ここは俺が黒い孔に入るまでいたところとは違う……が

異世界に移動したとしてもここは俺のいた世界とほぼ一緒だ

「どういうことだ？」

そついうと突然頭の中に声が響いた

『おーい！！無事に着いたみたいだな』

「もうちよつと声を小さくして話してくれないか？頭の中に声が響いて痛くてしょうがない」

『はっはっはすまんすまん、今から気をつけよう』

「まあいい、でここは何処だ異世界に移動したとしても俺のいた世界と似ているが・・・」

『ちゃんと世界の移動には成功しているよ、その世界は君の好きなFateの世界なんだから』

「・・・・・・・・・・はあ！？」

と言うことはここは冬木か？頭の中では言いたいことが浮かんでくるのに声が出ない

『ははは、驚いて声も出ないみたいだね』

落ち着け落ち着け、状況を把握しろ俺はFateが好きだ、というよりTYPE-MOONが好きだその世界に俺は今いる・・・・よしこれぐらいしか情報は無いが大丈夫だろう分からないことは神にでも聞けばいい

「落ち着いてきた。何個か質問するがいいか？」

『いいよ何でも聞きなさい』

「今、冬木では聖杯戦争は起きているか？」

『始まってちよつとだね』

「じゃあ、第何回目の聖杯戦争だ？」

『どうやら五回目みたいだ』

「じゃあ俺はこのままなにをすればいい」

『えっ何をつて自由にすると良いよ、俺の能力と同じものを使えるようにしといたから』

「能力？俺には何も変わったところは無いが」

『あゝ俺の能力はね、”そうぞう”だよ』

「”そうぞう”とは創る”創造”と想う”想像”どっちだ？」

『どっちつて、どっちもだけど』

「なるほど、でも創るほうの”創造”は何とか分かるが想うほうの”想像”の能力はどういうものなんだ」

『簡単に言つと頭に浮かんだことを”実現”できる能力かな、たとえばマンガやアニメ・ゲームとかで出る技や魔法が使えるみたいな感じかな』

「便利な能力だな、ならもう聞くことはないな」

これぐらい聞けば十分だろう、そう思っていると神はいきなり

『本当にもう聞くことは無いの？これが最後までもう話すことは出来ないけど本当にいいの？』

ということを言ってきたのだ、そこで俺は一番気になっていたことを聞く

「なら俺には魔力があるか？」

『それはもうあるに決まってるじゃないか、てか無限にあるしね』

「無限か・・・セコイな、じゃあ最後に俺はサーヴァントを召還できるか？」

『無限に魔力があるんだし余裕だよ』

「わかったそれだけ聞ければ十分だ」

『本当にこれだけでいいのか？』

「ああこれだけ聞ければ十分だ、他に必要な情報は能力がセコイからすぐ集められるだろう」

『まっ君なら大丈夫かじゃあ頑張れよ』

「言われるまでも無い」

とうとう俺は一人？になり、これからどうするか考えた

「先ずは町を見て回るか」

そういつて俺は適当に冬木を歩き回った。

第二話 寢床探し 前

冬木を歩き回った後新都に行きある公園に来た、そこは昔大火災が起きた場所だった

俺は近くにあるベンチに座った

「ふう、遊具がない公園ってのは寂しいものだな」

つぶやきながらなんとなく時計を見るともう夜の十一時だった俺は寢床をどうするか考えたときなぜか教会が頭をよぎった

「教会に行けば今日の寢床は大丈夫だろう」

そう言つてすぐにベンチから立ち上がり教会へ向かった
それから数十分後俺は教会に続く坂を上っている途中で気づいた

「でも、あの神父がそう簡単に泊まらせてくれるか」

もう悩むのも面倒くさい玉碎覚悟で俺は坂を上り終え教会に行こうとしたが目の前に黄色い雨合羽を着た人がある、もちろん俺は気づいているそれは衛宮士郎のサーヴァント、セイバーだった。

だがなぜセイバーがここにいる、聖杯戦争の三日目にここに来るんじゃないかったのか？だが神は始まってちよつと言っていたな

俺はセイバーを見つめていた、セイバーが俺に気づき睨んでくる俺はなぜか呟いてしまった

「セイバーか……」

その言葉を聞いたとたんセイバーは俺を敵と認識したのか構えをと

り風王結界で透明になった聖剣を握っていた。

俺は落ち着いて余裕を持ってセイバーに警戒を解いてもらおうと

「俺は聖杯戦争に参加しているマスターじゃないから、ほら令呪もないし警戒しないでくれ」

「信用できませんね、貴方は他のマスター密偵かもしれません」

「なんで俺が他のマスターの密偵になるんだ？理由を言ってみろ」

「一つ目はこのような物を来て顔しか見えない私を見てセイバーと言った、二つ目はあなたがさっき聖杯戦争・マスターという言葉を発したからです、三つ目は貴方から魔力を感じます、しかもかなり魔力の放出を抑えているようですし、これだけで貴方が魔術師かどうかは分かります」

俺はセイバーのあまりの洞察力に驚いて拍手をしていた

「すごい洞察力だな、でも本当に俺はマスターでもないし密偵でもないから通してくれないか？」

「駄目です。今は私のマスターがこの教会の神父と話をしておりますから」

「ほうやっぱり衛宮士郎がここにいるのかこれは好都合だ、では俺を通してくれないか奴に用があるんだ」

「先ほども言っただでしょう駄目です。無理に通るといふのなら私を倒してください」

「なら力ずくでも通らせてもらおうか」

セイバーが切りかかってくる俺は今まで以上に集中力が高まり俺は・
・・・・・

俺はこの時初めて能力を使った

創る武器は長めの日本刀

想い描くは佐々木小次郎の戦闘技術

そのおかげで俺はセイバーの攻撃をよけてカウンターばりに刀を横に振った・・・がよけられた

「な、なぜ私の斬撃を、そして何処から武器を」

セイバーが驚いている、てか俺も驚いているこうも上手く能力が使えるなんてこれならいけると考えているときにセイバーが切りかかって来たすると突然声がした

「やめろ、セイバー」

「敵が目の前にいるのに引けません」

「そつだよ引いてくれよ、俺はそこにいる衛宮士郎と話があるんだ」

「へっ！？俺？」

「騙されてはいけませんマスター」

「別にだますつもりは無いけど・・・」

俺は一応抵抗しない意思表示として能力をオフにして剣を消した

「えっ！！剣が消えた！？」

「これなら話を聞いてくれるかな？」

「そのような手に乗りません！！」

「でも俺に話があるようだし別にいいんじゃないか？ほら武器も収めて？いや消してくれたし・・・」

「でも駄目です、あの者は剣を何も無いところから出します、いきなり近づいて不意打ちを狙っているかもしれません」

うーんこれでも駄目か・・・ここはあの赤い悪魔に出てきてもらったほうが話が進むだろう

「聞き耳立ててないで俺の話を聞いてくれよ遠坂凜」

そう言つて俺は教会の入り口に視線をやり遠坂凜が出てくるのを待った

すぐに扉が開き赤い悪魔こと遠坂凜が出てきた

「貴方、何者？よく私がいると分かつたわね？」

「勘がいい奴なら誰でも気づくぞ、多分その教会の中にいる神父でも気づくだらう」

「なっ！！」

それを聞いて遠坂凜は凍りついたどうせ言峰綺礼はともかく俺に気づかれたのがショックなのだろう

「綺礼はともかく、私より弱そうなあんたに気づかれるとは私も腕が鈍ったかな」

はあ、なんでこう話が續かないんだ

「そろそろ、俺の話を聞いてくれるか？」

「あ、ああそうだったなで俺になんか用か？」

「単刀直入に言わせてもらつとお前の家に泊まらせてくれないか」

「はあ！？」

「なっ！！」

「えっ！？」

この言葉を聞き三人は驚いていた俺は

「いやーここに来て聖杯戦争を見学（乱入）しに来ただけで金も無いし住む家も無くてさ、最初はこの教会に泊まらせてもらおうと来たけどちょうど、セイバーがいたしな」

この言葉を聞いて衛宮士郎は驚いていた、だが以外にも返ってきた言葉は

「……………別にいいぞ」

衛宮士郎の言葉を聞きセイバーと遠坂凜はさつき以上に驚いていた

「何を言うのですマスター!!」

「そうよ、彼は魔術師よ他のマスターの密偵かもしれないじゃない」
「でも困ってるみたいだし、そんな人を放っては置けないだろ」

衛宮士郎がそういうと二人はあきらめた様子で

「マスターの意思に従いましょう……………」

「はあ、どうなっても知らないわよ」

「これは俺泊まらせてもらっていいのか？」

「おう、いいぞさつきも言ったとおり困っている人を放って置けないからな」

「じゃあ早速衛宮邸に行こう俺二日近く寝てないんだ」

俺がこの世界に来る前の時間はもう夜だった、この世界はに来たのは昼ぐらいだった

「でも俺の家はここからだ結構時間が掛かるぞ」

「体力はある方だから気にするな」

俺たちは教会を背にして無言で坂を下り交差点で止まる

「私はここまで、せっかく新都に来たんだから探し物をしてくるわ

ね」

「探しものつてもしかしてサーヴァントか？」

「多分そうだろうな、どうせセイバーを倒せなかったから他のマスタ―のサーヴァントを殺すんだろ」

「へえー、よく分かったわね聖杯戦争の知識もあるし思ったより役に立ちそう」

「俺は衛宮士郎に味方するから気をつけることだな。」

「俺に味方してもいいことはないぞ」

「そんなこと無いって、気にすんな俺が味方についたら絶対勝てるから」

「それなら気をつけないとね、じゃあこれで失礼するわ」

くるり、と新都に向けて歩き出す遠坂凜

だがその直後彼女の足が止まった

俺はその原因が分かった

「どうした遠坂？」

衛宮士郎は気づいてないらしい

「ねえ、話は終わった？」

声が夜に響く。

声からして少女だろう、ということはいりやスフィールか

そして俺と衛宮士郎は視線を坂の上に移したというより吸い寄せられた感じだ

だがそこには……

いた今回呼び出されたサーヴァント中最強のサーヴァント、バーサーカー……

「こんばんわお兄ちゃん。こうして会うのは二度目だね」

衛宮士郎は思い出したのか

「君はあの時坂の上にいた・・・」

「そうよ、あの時はまだサーヴァントを召還していなかったから殺さなかったけど、もうサーヴァントを召還しているし、殺してもいいよね？」

イリヤスフィールは微笑みながら言った
すると遠坂凜が

「——バーサーカー」

遠坂凜はバーサーカーの能力を解析し始める

「驚いた。単純な能力だけならセイバー以上じゃない、アレ」

俺は分かっていたせいかな焦らなかった、だが遠坂凜は舌打ちを衛宮士郎は絶望に打ちひしがれている

「アーチャー、バーサーカーは力押しでは適わないわ。だから貴方の本来の戦い方に徹するべきね」

「了解した。だが守りはどうする凜ではバーサーカーの攻撃を防げまい」

「こっちは三人しかもセイバーもいるし凌ぐだけならどうにか出来るわ」

小声で遠坂凜は言ってきた

「衛宮君とえ」と・・・」

「そついえば名前を言つてなかったな俺の名前は蒼緋、明神蒼緋だ出来れば名前で呼んでくれ」

「じゃあ衛宮君と蒼緋君。逃げるか戦うかは貴方達の自由よ。けど出来れば逃げなさい」

遠坂が小声で俺達に指示を出している終わつたのを分かつたのかイリヤスフィールが

「相談は済んだ？なら始めちゃってもいい？」

軽やかな笑い声。

イリヤスフィールは行儀良くスカート裾を持ち上げて、この場で不釣合いなお辞儀をする

「はじめまして、リンとイレギュラーさん。わたしはイリヤ。

イリヤスフィール・フォン・アインツベルン言えば分かるでしょ？」

「ア、アインツベルン——」
「.....」

俺は一応何も言わなかったでも遠坂凜はその名前を聞いたことでもあるのかかすかに揺れている

遠坂凜の反応が気に入ったのか少女は嬉しそうに笑って

「じゃあ始めましょう、やっちゃんえバーサーカー」

第三話 寢床探し 後

「じゃあ始めましょう、やっちゃんバーサーカー」

歌うように、背後のバーサーカーに命令した

「逃げてもいいか？」

衛宮士郎に聞いてすぐにバーサーカーが飛ぶのに気づいた、坂の上からだからバーサーカーの力だとクレーターが出来るぞ

「二人とも下がって」

流星じみた弾丸が、バーサーカーをつるべ打ちにする

「――！！」

バーサーカーに八本近くの”矢”が中る

「うそ、効いてない！？」

だがバーサーカーには矢は効かなかった

激突する剣と剣

バーサーカーは矢が中りながらも空中でバランスを崩さずに落下したバーサーカーの大剣と

そのまま落下地点に走り寄ったセイバーの剣が火花を散らす

「ふっ、はあ！」

「
！」

ぶつかり合う剣と剣

バーサーカーの剣に圧されているが、セイバーはその剣を緩めない。

「さすがセイバー、魔力を使いバーサーカーの攻撃を凌いでいるな」
「なんでお前そんなにのんきにしてるんだよ」

なんでも言われても俺はFateの全ルートクリアしたからな
だけどこんなことは言えない

「まあ気にすんな、ほらセイバーが向こうの荒地にふっ飛ばされた、
追いかけるぞ」

「セイバー……!!」

「大丈夫、あんなことじゃ英霊が死ぬわけないだろ」

俺は衛宮士郎と一緒に荒地に飛び込んだ。
そこに待っていた光景は、俺はともかく衛宮士郎の予想を遥かに裏
切っていた

「派手にやったな」

「セイバーは!？」

墓石が空を舞っている

バーサーカーが咆哮を上げ大剣を一閃するたびに、かなり重い墓石
が吹っ飛び、両断されている。

その中でバーサーカーの攻撃やその攻撃で吹っ飛ばされた墓石を華
麗に避ける騎士がいた

感心していると後ろから声を掛けられた

「こつちに来なさい！とばっちりを受けるわよ」

「ぐっ！！」

「え、ちよっ！！」

「アンタ達！！何でここに来たのよ逃げろって言ったじゃない！！聞こえなかったワケ？」

「いや、ちゃんと聞いてたぞ衛宮士郎がセイバーが心配だからってここまで来たんだ」

「ちゃんと聞いていたけどセイバーが死ぬかと思って心配で来たんだ」

かなり怒ってるなこれは

「アンタ達馬鹿じゃないの！！戦う手段も無いのになんでここに来たの邪魔だつて分からない！？援護とかして死ぬのはしょうが無いけど、何もしないで死ぬなんて無駄死にでもんじゃない！！」

「それは・・・」

「俺は援護する能力使えるけど」

「衛宮君はともかくそれなら蒼緋君、貴方も援護に参加しなさい！！」

「残念ながら使わない・・・」

「なんでよ！！」

俺は小声で理由を言う

「キャスターに見られている」

「えっ！！」

「なに！！」

「セイバーと戦っているときに、俺は能力を使った、その後に気づいたんだ、出来れば二度目は避けたい」

「そう・・・」

「他に方法は無いのか」

「まあ待て、それと今の事はアーチャーにはまだ知らせるな」

「なんでよ!？」

「それは・・・教えられない・・・」

俺は少し真面目な顔で言った、そして二人を静かにさせると同時にセイバーがバーサーカーの隙を突こうと、止めを刺すために踏み込んでいた、だがその時遙か遠くからものすごい殺気が伝わってきた

「えっ!?アーチャー離れろってどういう事?」

そうして大量の魔力が注ぎ込まれた”矢”が放たれる

バーサーカーは”矢”放たれた後にそれに気づき動きを止めた、どうせ効かないなら無視すればいいものを、バーサーカーは”矢”を受け止めるつもりだろう

それを衛宮士郎も気づいたのかセイバーを助けるためにセイバーを連れ戻しに疾走し、衛宮士郎に気付いたセイバーが踏み込みを途中でやめた、そしてセイバーの腕を引っ張り、抱き寄せ、そのまま跳んだ。

迫り来る”矢”をバーサーカーは迎撃した、瞬間

——全ての音が失われた

ここにいる者は聴覚を麻痺し目も潰されただろう、俺は遠坂凜を抱き寄せて能力で創り、想像した人二人分の大きさの”熾天覆う七つの円環” ロー・アイアス で烈風により飛ばされた様々な破片を防いだ

「きゃっ!!」

「おいおい、やりすぎだろ」

俺は能力を使い視力と聴覚を正常にする

「これは・・・」

この場面はゲームで見たが現実で見ると声も出ないくらい周りが破壊されている・・・

俺は腕に力を入れた・・・だが良く思えば遠坂凜を抱き寄せているのを忘れていた。

「ちよつと!!そろそろ離してくれないかしら」

「おつと、すまんお前を抱き寄せていたのを忘れていたよ」

「全く!!守ってくれたのは有難いけど、絞め殺されたら守ってもらった意味が無いじゃない」

「・・・」

凄いなこの惨状を見ても何も思わないのか、さっきと何も変わらない口調で叱られた、しかも視力と聴力が戻るのが早い、さすが赤い悪魔だ

俺は感心しながら、炎上した墓地を見た、そこにはやはり奴が・・・バーサーカーが何事も無かったように立っていた

「おい、これで終わりだと思ふなよ奴はまだ死んでいない」
「えっ!!」

遠坂凜は俺の指差した方を見て驚いてた。
向こうにいるセイバーも驚いていた。

「ランクAに匹敵する攻撃を受けたっていうのに何でぴんぴんしてるのよ!？」

何処か分からないが、楽しげな少女の声が聞こえた。

「見直したわりん。やるじゃない貴方のアーチャー」

少女は、イリヤスフィールはバーサーカーに命令した

「戻りなさいバーサーカー。つまらない奴らから殺そうと思ってたけど少し予定が変わったわ」

それを聞いてバーサーカーは後退した。

遠坂凜が間髪いれずに挑発する

「何よ、ここまで派手にやっときながら逃げる気？」

「ええ、気が変わったのセイバーはもういらないけど、アナタのアーチャーに興味が湧いたわ。だからもうしばらく生かしておいて上げる。」

バーサーカーが消えた霊体化でもしたんだろう
イリヤスフィールは笑いながら

「それじゃあバイバイ。また遊ぼうね、お兄ちゃん」

そう言い残し、イリヤスフィールの気配が消えた

遠坂凜は挑発したにも関わらず、追いかける気は無いらしい
衛宮士郎はずっとセイバーを抱いていて、今セイバーに何か言われたのか手を離し、こちらに背を向けた

良く見ると衛宮士郎の背中になにかの破片が刺さっている、それをセイバーが気付き思いつき引き抜いた

「容赦ないなセイバー」

「確かにアレは痛そうね、ってそんなこと言ってる場合じゃない早く手当てをしないと」

彼女は衛宮士郎に走り寄った

だが俺は歩いて寄った、どうせ聖剣の鞘で傷が癒えるんだし急いが無くてよかった

「衛宮君、無事？」

衛宮士郎は大丈夫だと手を上げた

「そろそろ、逃げるぞこれだけ派手にやったんだ誰かが騒ぎに気付いて来るかも知れんぞ」

「そうね、じゃあ行きましょう」

「分かりました」

「分かった・・・ぐっ!!」

「シロウ!!」

「こんな時に!!セイバー、衛宮君を背負って」

「はい」

遠坂凜は坂の方まで掛けていった

「早く来なさいよ」

「言われるまでも無い」

そうして一時間近く歩き衛宮士郎の家に着いた、やっと寝られる、俺はこのことが嬉しかった

「俺適当に布団出して寝るから」

「のんきねアンタ」

「休めるときには休む、大事なことだ」

「そうですね、リンも休んでいてください」

「私が見張りをします」

「そうね、じゃあ頼んだわセイバー」

俺達は適当な部屋で布団を出して寝た

第四話 サークヴァント召還 前

俺は冬の寒さに苦戦していた

トイレに行きたいが布団から起きれない
でも起きないと

「洩れる、だから冬は嫌いなんだ」

俺は呟きながらどうするか考えた、考えた結果・・・

「こうなったら能力を使うしかないな」

俺は寒くて能力を使い体を暖かくすることにした

想い描くは防寒対策でかなり厚着している俺、その状態の体温を反映し体が温かくなる

「これで大丈夫だろう、俺は制服のまま寝ていたのか」

俺の学園の制服はブレザーではなくガクランだ

「なんか息苦しいと思ってたんだがこれが原因か」

俺はトイレが何処にあるか衛宮士郎に聞くため部屋を出て衛宮士郎の部屋の近くで止まった

「ん？なんだ殺気が」

すると中から遠坂凜の声が聞こえた

「ふふふ、面白いことを言うのね衛宮君」

殺気が膨れ上がった

「でも、女の子にそんな言動は控えたほうがいいわよ。軽率な行動は死ぬことになるから」

「――」

「とにかく、私の話はこれまで、他に聞きたいことがあれば蒼緋君かセイバーにでも聞くことね」

遠坂凜が立ったのだろう足音が聞こえる

「あら、もう起きてたのね」

「遠坂凜か、トイレの場所を聞こうとここまで来たんだが、先ほどこの部屋からもの凄い殺気が出てね入れなかったんだ、もしかしてお前か？」

「・・・・・・・・・・」

いきなり何も喋らなくなった、が話題を逸らそうと

「・・・・・・・・出来ればフルネームで呼ばないで下さらない？」

こんなことを言ってきた、しかもなんか怒ってる

「分かったじゃあ、遠坂と名字で呼ばせてもらう。話を逸らされた気がするが」

「そんなこと一々気にしない！！」

ふう、なにをしたんだ衛宮士郎、遠坂かなり怒ってるぞ

「わかった、この事にはもう触れないからそう怒るな」

「怒ってなんていない!!」

「ならいいが」

「じゃあ、私は帰るから」

遠坂はドスドスと足音を立てて去っていった

「ふう、なんなんだいったい、それよりおい衛宮士郎」

「俺は名前で呼んでくれ、でなんだ」

「トイレは何処にあるんだ？」

「トイレは居間の近くにあるぞ」

「分かった」

俺は居間に行き、廊下にてトイレを見つけた

「流石に長時間出していないときついな」

トイレの最中腹が鳴った

「腹が減った……」

確か今は道場でセイバーに話を聞いているところだろう

「邪魔しちゃ悪いな、部屋で能力の訓練でもするか」

俺は先ほどいたまで部屋に行き正座して能力の訓練をしていた
そして気付いたことは

一つ、能力の解除は自動

二つ、想像では何でも出来る

三つ、創造は何でも創ることが出来る（宝具を創った場合、能力も再現でき、形だけ作ることも出来る）

四つ、創造と想像を同時使用して、武器を創造し創った武器に想像で自由に能力を付与できること

四つ目を簡単に説明すると、小さな短剣を創造し、その短剣に想像でエクスカリバーを放つことが出来るというわけだ

「最強だなこの能力、魔法も使えるんじゃないか？」

だが、試す相手がいない

「セイバーにでも相手を頼むか」

そんなことを考えていると昼になった

「そろそろ昼飯か・・・」

俺は居間に向かった

「サーヴァントは魔力で実体化しているんだろう？セイバーは魔力の供給が無いんだから、戦うたびに弱っていくのか？」

居間から声が聞こえた、が俺は気にせず入った

「なに難しい話をしてるんだ？」

「あつ蒼緋、いやセイバーの魔力切れを防ぐにはどうするかセイバーと話していたんだ」

「はい、マスターと魔力のラインが繋がっていないので・・・」

「なんだそんなこと話していたのか」

「そんなこととは何だそんなこととは」

「そうです、私の魔力が無くなると誰が士郎を守るのですか」

「時期が来たらその心配は無くなるから気にするな」

「えっ!？」

「なぜそのようなことが分かるのですか？」

やばい思わず言ってしまった

「……………今言ったことは気にするなただの独り言だ」

「なんか気になるけどまあいいか。聞かれたくないことは無理に聞くもんじゃないしな……………」

「何か知ってるように見えましたが……………」

まずい士郎はともかくセイバーに疑われている

「士郎、腹が減ったんだなんか食わせてくれないか」

「分かったちようど昼飯を作る所だったんだ」

「……………」

話を逸らしたのにまだ疑われている

だがちようどいい、ここで俺の能力の練習相手になってくれとまた話を逸らそう

この話題ならきつと食いつくはずだ

「なあセイバー、俺の能力の練習相手になってくれないか？」

「なにをいきなり……………」

「士郎も一緒に練習すればいい、昨日みたいなことがあってもちよつとは対応できるだろう」

「俺も!？」

「確かにそれはいい提案だ士郎にサーヴァントがどういうものか教えませんと」

「さすがセイバー、話が分かるな」

「でもそれよりさっき言っていた……………」

延々とこんな会話が続けていると士郎がテーブルに出来上がった料理を並べだした

「これは……………!!」

「なんと神々しい」

「どうだ美味しそうだろう？今回は腕によりを掛けて作ったんだからな」

先ずセイバーが一口……………なんかコクコク頷きながら食っている

やっぱり見た目から美味しそうだからな

そして俺も一口

「美味しいな」

「はははそう言って貰えると作った甲斐があるってもんだ」

それから話が弾み食事が終わり食後のお茶を楽しんでいるときに電話のベルが鳴り出した

「……………日曜日のこの時間にうちにかかってくる電話……………」

士郎が取ろうか迷っている

「取れよ、後悔することになるかもしれんぞ」

「そ、そうだよな」

士郎が電話に出て

「はいもしもし衛宮ですけど……」

「はい、もしもし藤村です！！」

ここまで声が聞こえてくるとんだけ声が大きいんだ

「……………なんだよ。断っておくけど、俺は暇じゃないぞ藤ねえ」

こちらには最初の時以外声が聞こえなくなった、凄かったなさっきの声は……………と、感傷に浸っているうちに電話が終わった

「……………ったく。しょうがねえな、猛獣は腹が減ると暴れるって言うし」

「その様子からだと弁当でも要求されたか？」

「うっ 御名答」

「良く分かりましたね」

士郎は外したエプロンを付け直し、台所で何かを作っている

「よし出来た、セイバーと蒼緋、ちよつと学校まで弁当を届けに行くから留守番してくれ、すぐ戻るから」

俺とセイバーは無言で士郎に付いていき、無言で靴を履いた

「そのなんでお二方は……………」

「俺は学校を見学するだけだ」

「外出するなら同伴します。サーヴァントはマスターを守護するものですから。ソウヒがいれば大丈夫だとは思いますが念のために付いていきます」

俺はともかくセイバーは困ると言う顔をしている

「シロウはまだ魔術師として未熟ですから、四六時中共にいなければならないでしょう」

「なっーーーーー」

士郎はなにを想像しているのか、かなりキョドっている

「ば、ばばばか、そんなこと出来るわけ無いだろうー！だいたいな、ずっと一緒にいるってそれじゃあ寝るときはどうするんだよ」

「シロウは私を馬鹿にしているのですか、睡眠中は最も警護するべき対象です、当然、シロウの側で待機しますが」

「ばーーーーー！！」

士郎の頬が赤くなる、両手で頬を隠した、そして落ち着こうとしているのか深呼吸をし始めた

「どうしてそんなに驚いているのですか？昨夜リンが同じ事をしたでしょう」

「と、とにかく駄目だ、セイバーにはちゃんと部屋を用意するからそこを使ってくれ！！」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

セイバーが士郎を睨んでいる、面白いことになりそうだ

「シロウ、いいかげんにして欲しい。アナタの矛盾を我慢してきま

したがこれは譲れない、それにアナタはマスターとしての方針が間違いはかりだ。ちゃんとした理由を聞かなければ従えません」

「り、理由なんて無い昼間は大丈夫なんだし、セイバーは休んでいればいいだろう」

「ただ単に、精神衛生上良くないからだろ」

俺は誰にも聞こえないような小さな声で呟いた

「断ります、明確な理由が無ければ、私も引き下がれない」

「こ——ここまで言っただけからなのか。セイバーは女の子なんだから、同じ部屋で寝る訳無いだろう!!」

そついい士郎は俺を置いて走って玄関を出て行った

「置いて行かれたか、セイバー追うぞ」

「そのつもりです」

学校までは歩いて三十分ぐらいだろう。士郎は急がなくてもいいのに早足になっている

すると士郎がいきなり止まり

「セイバー。家で待っていてくれって言っただろう。マスターの言うことが聞けないのか」

「——さあ。先ほどの会話で私はマスターの言うことを聞かないと言っただけでしたが聞こえなかったのでしょうか」

セイバーは怒っているのか顔を背けた

士郎はセイバーを無視して坂道を下りきる。さすがに限界か、先ほどから士郎の後ろからセイバーが無言でプレッシャーを投げかけている

「いい加減に戻れって。これ以上付いて来られると迷惑なんだ」

「そこまで言う必要はないだろう、セイバーはもしもお前が学校で襲われても有利に立てるような場所を探すために来てるんだぞ」

「ソウヒの言うとおりです」

「うっ、そこまで言われると」

観念したのか諦めたらしい

「わかった。じゃあ好きにしろ」

士郎はそれから本気でセイバーを無視して坂を上る
なんでか士郎が振り返る

「セイバー……」

「何でしょうか。好きにしてい、と言われたのですが」

「……自分に都合がいいことは覚えてるんだな」

「当然です。私はマスターを守護するものですから、マスターを危険にさらす訳には行かない」

本当に諦めたのか士郎は

「はあ。わかった、俺の負けだ。諦めたから一緒に学校に行こう。

そうすればセイバーだって学校が安全なのが分かるだろうしき。それとさつきは怒鳴って悪かった。」

それを聞いてセイバーは驚きのあまり声が出ない

「よし。今から口裏を合わせようセイバーは親父の親戚でここに観光がてら遊びに来たということでもいいな？、それと蒼緋は……」

・・」

「俺も切嗣と会った事があるからそれでこちらまで会いに来たということにしてくれ」

「えっ!!」

切嗣に会った事があるという嘘をついた、それ聞き士郎が驚く
ここは俺が知る限りの情報を教えてやるとしよう

「どうした？」

「親父を知っているのか？」

「まあ。会ったというのは嘘だが色々な噂を聞いたことがある程度だな」

「何でもいい、教えてくれ!!」

「後からな、それとこれで理由は出来たんだし早く行こうぜ」

俺は学校に行くのを促した。セイバーと士郎が話している時俺はサーヴァントをどうするか考えていた

どうする、やっぱり士郎の家の土蔵で召還するしかないのか

「士郎さっき言った理由に俺のボディーガードも後から来ると付け加えてくれ」

「ん？そんなのがいるのか？」

「ああ、多分今日の深夜ぐらいに来るはずだ」

「分かった」

俺達は話しながら校門に着くと驚いた

「ほお、魔力の残滓か・・・凄いなこれは・・・遠坂のものか」

「アナタも、感じたようですね」

「??。何のことを言ってるんだ？」

「お前、初めて魔術を使ったのが昨日の俺が分かるのに何でお前は分からないんだ？」

「そ、それは」

そこでセイバーがキツパリと

「シロウが未熟だからでしょう」

ひどいな今のは絶対士郎の心はズタズタだな

「早く弁当私に行こう」

「そうだな、未熟な俺は弁当を届けるしか出来ないもんな……」

「すいませんシロウそこまで落ち込むとは思いませんでした」

俺とセイバーは頑張って士郎を慰めながら目的の場所まで着いた

「あれ？衛宮じゃんとしたの、もしかして食事番？」

「お疲れ。お察しのとおり弁当を届けに来たんだ、藤ねえは中に居るか？」

「いるいる。いやあ、助かった。藤村先生、空腹でテンションが上がりまくって手が付けられなくてさ、いまトヨエツまで買出しに行こうとしてたのさ」

「ちょうどよかった。じゃあこれを藤ねえに渡しといてくれ」

「お、豪華三段セット。いいね、久しぶりに見た。衛宮はこういう細かいの上手いのよね」

何が、面白いのか、にんまり笑うと笑う

「それより早くこれを藤ねえに渡してきてくれ、藤ねえが暴れて大変なんだろう？」

「そうね。そう思うんなら中に入って、藤村先生に手渡しするべきじゃない？ここで弁当をもらってアンタを帰したらもっとへそ曲げるに決まってるじゃない」

「そうだな、顔だけでも出しておくか」

そういうと美綴綾子が士郎の所に行き内緒話をしている
どうせ俺達のことだろう

「説明すると複雑なんだが、俺の知り合い、というふうに言い含めてもらうと恩に着る。あそこまで美人とイケ面が来たら騒ぐだろうし頼んだ」

「・・・オッケー事情は気になるけど、衛宮に貸しが作れるなんてあんまり無いからね任せな、それと後からチャラとか言うのは無しね」

話が済んだのか弓道場に入るように言われ入っていくとそこは、戦場だった

「先生っー！、ぎり粉がありませーん！手が、手が滑りますー！」

「あれ、ほんと？誰か、物置に行つて在庫を取ってきてー」

「先生、在庫切れです！原因は先日、先生が発注を忘れたことだと思いますが！」

「あー、じゃあ一年は野球部からロージンバッグちよっぱって来なさい」

「うわあ、めちゃくちゃだこの先生ー！！」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

士郎は呆れてか無言になり、俺とセイバーは教師のあまりの傍若無人ぶりに言葉が出ない

士郎におそろおそろ聞いてみた

「ここの、弓道部は大丈夫なのか？」

「多分大丈夫だと思うぞ、これくらいいつもの事だし」

「すごいな……」

この惨状を黙ってみてみると、士郎が誰かを呼んでいた

「おい、桜」

「え、先輩……！？」

桜……間桐桜のことだろう

やっぱりゲームでも思っていたがかなりの美人だ

「先輩……どうしたんですか今日はっ。あの、もしかして、その」

「ああ、藤ねえに弁当を届けに来たんだ。悪いんだけど、あそこで無茶苦茶言っている教師を連れてきてくれ」

「あ——はいそうですね。さっき電話してました」
「？」

間桐桜の表情が曇る、弓道部に戻ってきてくれたのか、と思っていたんだろう

俺は士郎達と離れ射場に向かい見学していた

「なんか簡単そうだな弓道」

小声で呟いていたのが聞こえたのか美綴綾子が話しかけてきた

「簡単そうに見えるなら、やってみる？」

「俺を疑わないのか？この格好だと何処かの学校の生徒が偵察に来たとか思われているだろうし・・・」

「ははは、そんなの気にしない気にしない。衛宮が連れて来たんだそんなことは無いだろう」

「ほう、ずいぶんと信頼してるんだな士郎を・・・」

「まあ、あの正確だしみんなには信頼されてるよ」

「では、俺にもやらせてもらおう」

「じゃ道具を・・・」

「必要ないからいいぞ」

道具も何も付けずに俺は弓と矢だけそこら辺にいた生徒に借りた

第五話 サークラント召還 後

道具も何も付けずに俺は弓と矢だけそこら辺にいた生徒に借りた
なぜだろう俺が射場に立つと静まり返り、みんなが俺を注目していた

集中しろ、俺なら出来る。能力を使わなくても出来る

そう心の中で唱えながら弓を構えた

周りが見えなくなった、見えるものは的だけ

俺は矢を放ち、弦と矢の風切り音が響き渡った

そして見事に矢は的の真ん中に中った

「君、本当に初心者？」

美綴綾子が尋ねてきた

「弓道は初めてだが……」

俺は平然と答える

「は、はははははまいったよ、まさか衛宮みたいな天才をまた見る
ことになるなんて」

「天才とは買いかぶりすぎだと思うが」

「君を天才と言わずになんていうのよ」

「そんなことより自己紹介がまだだったな、俺は明神蒼緋だ、蒼緋
と呼んでくれ」

「そんなことって……。まあいいかどうせこの学校の生徒じ
やないんだし、私は美綴綾子ってんだ、よろしく」

「こちらこそよろしく」

その日士郎達が帰るまで俺は弓道場で弓のちゃんとした構え方などを仲良くなった男子部員に教えてもらっていた

五時になりいつの間にかいなくなっていた士郎とセイバーがいた

「おい、蒼緋そろそろ帰るぞ」

「外で待っていてくれすぐに片づけを終わらせて行く」

「わかった、早く終わらせてくれよ」

弓道部の部員達と仲良く話しながら片づけを終わらせる

「では、俺はこれで」

急いで士郎達の元へ行く

「待ったか？」

「気にしてないよ、さ早く帰ろう」

坂を下る

俺とセイバーは士郎、藤村大河、間桐桜の後を距離を置いて付いていく

「——はてな？あの人達、なんで私たちに付いて来るの？」

今まで不思議に思わなかったのか、今更になって気付いたらしい

「ね、士郎。知り合い？」

「知り合いだよ。俺が連れてきたんだから当然だろう？」

「や、やっぱりそうですね。……それであの人達とはどういう関係なんですか？」

「そうよね男の子の方はともかく、士郎に外国人のお友達がいるなんて聞いて無かったわよ?」

「いや、友達じゃなくて親父の知り合いなんだ。そっちの女の子は親父が飛び回ってた頃知り合った人の娘さんだって。で、そっちの男の方は親父に昔会ったことがあってここまで来たみたいなんだ」

「切嗣さんの?じゃあ、あの子達は切嗣さんを訪ねてきたの?」

「そういうこと。今日からしばらくうちで暮らすから、よろしくやってくれ。あとその男のボディーガードが夜に来るからその人も一緒に暮らすから」

「——え?」

全く同じタイミングと同じ反応をする藤村大河と間桐桜

「ちょ——し、士郎、男の子とボディーガードさんなら分かるけど女の子は……あの子と同居するつもり!?」

「同居じゃない、セイバーと蒼緋が滞在するのはちよつとの間だけだ。宿として家を貸すだけなんだから、そこまで驚くことはないだろう」

「……あの。先輩あの人セイバーさんで、言うんですか?」

「そうだよ、それと男のほうは明神蒼緋って言うんだ。」

セイバーの方は変わった名前だけど、あんまり日本にも慣れてないし、変わったところあると思う。だけど根はイイヤツだから桜も仲良くしてやってくれ」

俺の紹介がおろそかになっているんだが気のせいか……ちよつと悲しくなってきた俺

「はい。それはいいですけど——。藤村先生。藤村先生はセイバーさんとえーと、蒼緋さんの滞在を許可するんですか?」

「うーん、教師としてはアウトなんだけど、切嗣さんを頼ってきた

子が無碍にできないし……二人ともしつかりしているようだし間違いは起きないかな。」

「と、当然だろ。親父の客は俺の客だ。失礼なことは出来ないし、なによりセイバーは妹みたいなものじゃないか」

「ふーん。それよりあの子何歳？桜ちゃんより年下に見えるけど……」

「え——と、まあそんな感じ」

来るぞこの沈黙の後にあの質問が来るぞ

「ねえ士郎、セイバーさんのこと好きなの？」

「つつつつ……！！そ、そんなの知るかつ！！俺だって会ったばかりなんだから、どうこう言えるわけ無いだろ！！」

「ふむ。嘘は無いけど脈はありか」

それから何も喋ることなく衛宮邸に付いた
結論として、二人の下宿は許可された。

「いいんじゃない、ここって無駄に広いし部屋もいっぱいあるもの」「そうですね、私が意見できることじゃありませんから」

という流れで夕食にである

静かだ、食事中に人が五人もいるのに何も喋らないのは以上だ
お、このかつおのたたき風サラダは美味い、と夢中になって食う俺であつた

食事が終わり俺は一応、藤村大河と間桐桜に挨拶に行った

「もう聞いたかも知れませんが、俺の名前は明神蒼緋です。」

「あら、しつかりしているのね。私は藤村大河でこつちの子は桜ち

やんって言うのよろしくね。」

「……よ、よろしく願います」

「じゃあこれからよろしく願います。ではこれで」

俺は簡単な挨拶が終わった後すぐに昨日使った部屋に行きこれからのために一応服を創った

これだけ有れば十分だろう服を創っているのに熱中してかなり時間が経っていた

「そろそろか……」

士郎の部屋に脚を進めた、途中で騒いでいる声が聞こえてきた

「ん？なんだ、この騒がしい声は……女、か？」

聞こえるのは主に大河さんの声

「そうか、今日は女性人だけで泊まることになっていたな」

でもそんなことより早く俺のサーヴァントを呼び出さないと
士郎の部屋の前まで行き何の迷いもなく障子を開けた

「起きてるか？」

「ビックリしたー、入って来るときは俺がいるか確認して開けてくれ」

「次からは気をつけるよ、それよりちょっといいものを見せてやる」

「いいもの？」

「いいから来い」

「てっおい！！引っ張るなよ」

士郎の腕を掴み土蔵まで引つ張っていく

「よし結界はちゃんと張れたな。これで魔力が外に洩れることは無いだろう」

「な、なあ、なにをする気なんだ」

「なにをって、サーヴァントを召還するに決まってるだろう？」

「え——！！ちょっと待て、サーヴァントは聖杯の魔力で召還できるはずだしかも、もう七人そろっているし。お前には令呪ないだろう？」

「令呪ならあるぞ」

想像しろ俺の右腕の手の甲に令呪がある姿を……………
右腕の手の甲に痛みが走った

「っ——！！令呪だ、これで俺もマスターの一人だな」

「なんで…………さっきまで無かったのに」

「後からお前の聞きたい質問に答えるからそれまで待て」

「……………わかった。後からちゃんと聞かせてもらうぞ」

よし令呪は手に刻まれた。後は英霊を召還するだけ……………
なにを召還するかはもう決めてある、太陽剣グラムの使い手シングル
ドを召還する

能力で太陽剣グラムを形だけ創る

「これを触媒にすれば成功するだろう」

「な、なあこれがお前の魔術なのか？」

「いやこれは魔術じゃない、異能と言ったほうがいいな」

「異能か、でも凄いなこの剣宝具としての能力だけ再現しないで構成材質も蓄積された年月は本物と一緒にだろ、これ？」

「よくわかったな、それは宝具だが魔力が籠ってなく真名開放も使えない、形だけのものだ」

「……本当に凄いなお前の能力」

サーヴァント召還の魔方陣が書かれているところに剣を置き、詠唱無しでサーヴァントを召還した
煙が上がる

「ん？今回のマスターはアンタか？」

「そうだ、お前のクラスはなんだ？」

「セイバーだけど？」

「いま何歳の頃の姿か分かるか？」

「この姿だと十九歳位だな」

「俺より一歳年上か」

「じゃあお前の真名は？」

「シグルドとジークフリードって呼ばれてたな」

「やっぱりな起源が同じなんだ、同一人物の可能性が高いと思っていたが合っててよかった、お前のことはシグルドと言わせてもらおう」

士郎が会話に入ってこない、いろんなことが立て続けに起きて驚いているんだろう

「確かお前は背中が弱点だったな」

「そうだけど……いいのかそこにいるのマスターなんだろ？」

「大丈夫俺の仲間だ気にするな、それよりほら、こっちに背中を向ける」

「あ、ああ分かった」

創造しろ奴の血を、能力を発動し創った血をシグルドの背中 of 服を

脱がせて掻けた

「あつつう、なにすんだこら」

「分からないかこの血の熱さを」

「血？ってまさかこれ！！」

「そう、その血は邪龍ファープニルの血だ、よかつたなこれで弱点がなくなったぞ」

「なんでお前がこの血を？奴の血は蒸発して無くなったんだぞ」

「ふ、俺の能力にかかればこんなもの朝前だ」

「く、くつくつくつく、あーっはっはっは面白い、気に入ったよアンタ、やっぱ自分の魔力だけで俺を召還しただけのことはあるな」

「え．．．．．じ、自分の魔力で．．．．．」

「何を驚いてるんだ？俺の魔力は”無限”なんだ。言わなかったか？」

「んなこと聞いた覚えはないぞ俺」

「まあそのことは追々話すとして、俺は今もの凄く眠い．．．．。

おいシグルド」

「なんだ？」

「俺を部屋まで連れて行ってくれ、魔力は無限だが体が耐え切れなかったようだ。かなり体に負担がかかって動くのが辛い」

「わっかたよ。もう休みなマスターは俺が部屋までちゃんと連れて行くから」

その言葉を聞いて俺は眠りに付いた

第六話 鍛錬とおしおき

もう七時くらいだろうか……..
能力で体を暖かくして布団から出る
シグルドの気配が無い

「あいつは何処に行ったんだ？」

シグルドの気配を探していると腹が鳴る

「士郎はこの時間まだ学校に行かないはず、飯を食わせてもらおう」
居間に行くところちょうど士郎が食器などの後片付けをしている

「おはよう、遅かったな蒼緋、シグルドとお前の分の飯はテーブルに置いてるから食つといてくれ。それと食い終わったら食器を洗っておいてくれ」

「分かった」

「それと昨日のことなんだけど……」

「昨日のことは学校から帰ってきてからだ、それより学校に行かなくてもいいのか？」

「む——。しょうがない学校から帰ってきたら話を聞かせてもらうからな」

「ちゃんと、話してやるから早く学校に行け」

「わかったよ、それじゃあ行ってくる」

士郎は後片付けを終わらせて居間を出て行った

「ふう、シグルドのやつ一体何処行っただよ」

ずずず——お、この味噌汁なかなか美味しいな。シグルドのことは諦めて朝飯を食っていた

「どうせ、ひょっこり帰ってくるだろう」

朝食を食べていると居間に困った顔をしたセイバーが入って来た

「どうしたセイバー、何か悩みでもあるのか？」

「いやそれが、士郎に付いて行こうとしたら来るなと言われまして」

「なるほど、士郎が一人じゃ危ないから付いていこうとしたわけか」

「その通りです」

「そこら辺は大丈夫だろう、俺のボディガードが帰ってきたら士郎の護衛を任せる言うから」

「ですが相手はサーヴァントです。生身の人間が勝てるわけが無い」

「生身の人間なら、な」

俺は右手の甲の包帯を取り、令呪をセイバーに見せた

「それは!？」

「そうだ俺は、昨日マスターになってサーヴァントを召還したんだ」

「ありえませんが、士郎が七人目のマスターのほず、アナタは一体・

・・・」

「俺の能力を使えばそんなこと朝飯前だ」

「能力ですか・・・。ではその能力について聞いてもいいでしょうか」

「なんなりと」

「アナタの能力は何ですか」

「”そうぞう”だ」

「”そうぞう”?どういふことですかそれは」

「さあな。後は自分で考えろ」

「……分かりました。ではもう一つ、アナタのサーヴァントのクラスを教えてくださいませんか」

「……セイバーだ」

「——私と同じクラスのサーヴァント……」

セイバーが何か悩んでいるが俺は気にせず味噌汁を啜る

「では、最後に……アナタは私たちの味方ですか？」

「ああ、俺はお前らに敵対するつもりは無いから安心しろ」

「アナタを味方と見てもよいですね」

「ああ、そう思ってくれても構わんぞ」

セイバーは安心したのか、ほっと胸を撫で下ろす

「でも、俺のサーヴァントは行方不明でな、帰ってくるのがいつになるか分からん」

「そうですね、でもこれで戦力が上がるのでいいでしょう。士郎も今日は早く帰ると言っていました」

「そうか、じゃあ昨日言ったとおり、セイバー、俺の鍛錬に付き合ってもらっぞ」

「鍛錬……？あっそういえば昨日そのようなことを言っていましたね」

「忘れてたのか……」

「はい大河達と話していたら忘れてました」

セイバーが頬を赤く染める。それほど恥ずかしいのか

「朝食が済んだら、始めよう」

「分かりました。私は先に道場で待っています」

俺は朝食を食い終わり、道場に行った

「待たせたな」

セイバーが正座して目を瞑りながら

「大丈夫です。それほど時間は経っていませんから」

壁に掛けられていた竹刀をセイバーに投げる

「じゃあ始めよう」

「はい」

「最初は能力を使わずに純粹な剣術で行かせてもらっ、俺の剣術がサーヴァント相手に何処まで通用するか試す」

「いいでしょう」

竹刀を構える、道場に静寂が走る

先に動いたのは俺

初撃は様子見で逆胴を斬りつける、がそれは空しくも空を切った

「そんな攻撃では私に一太刀も当たりませんよ」

「ふん、ただの様子見だ、はあ!!」

セイバーに体勢を崩された瞬間俺は無理な体勢で虚を付いて渾身の一撃を放った。

が、それをセイバーはまたもや紙一重で避けた

「なっ!!」

「ちつ。今のは入った思ったんだが」

「今のは驚きました、あの体勢から攻撃をしてくるとは。私でなければ避けなかったでしょう」

「褒めているのかそれは」

「はい、生身の人間がこのような攻撃してくるとは思いませんでしたから」

「じゃあ今度はサーヴァント並の攻撃をしてやる」

俺はそういい、セイバーに向かって全力で走りセイバーの死角に入る

「なっ消えた!？」

セイバーが驚いている、俺はこの隙を突いて攻撃したが、

「そこ!！」

気付かれた、セイバーがまた紙一重で避けカウンターをしてきた俺もカウンターを紙一重で避ける

「今の一撃は自信があつたのに」

「危なかった、今のは凄いですねどのように鍛錬したら今のような動きが出来るのでしょうか、やっぱり幼少から」

「言っておくが俺が剣術を覚えたのは一年前だ」

「な——」

セイバーが驚いてか声が出ないらしい

「何を驚いている」

「一年でそれほどとは……。サーヴァントになる前の私でした

ら負けてましたね」

「分からんぞ勝負に運はつき物だ。その運のおかげで格上のものにも勝てるときもある」

「それもそうですね。では続きをやりましょう。アナタの本当の力を見てみたくなってきました」

「そうだな、さっきまではちょっと手を抜いていたが、今度は本気で行かせてもらおう」

お互い距離を取り、竹刀を構えなおした。俺はすぐにセイバーに斬りにかかった

「ふっ！！はあ！！」

「はっ！！はあ！！」

お互い初撃を避けて、その反動を利用し最大の一撃を放つ
鏑迫り合いになりセイバーに圧されている。俺は剣を引いてセイバーの体勢を崩し、すかさず一撃を入れる

「取った！！」

「そうはいきません！！」

セイバーは体勢を崩した状態で俺の竹刀を止めた
さすがサーヴァントこんなことじゃ。一本取れないか
この機を逃したら一本取れない、俺は防がれても、攻撃を止めなかった

「くっ！！はっ！！はあっ！！」

「甘い！！」

俺の攻撃は体勢を崩した状態のセイバーにいとまたやすく防がれた。

俺は諦めた

「まいった。」

「えっ——」

「セイバーに本気を出しても一撃も攻撃が当たらないからな、これ以上やっても無意味だろう」

「そうですか？アナタはまだ何か隠しているように見えますが・・・」

セイバーが何か睨んでくる

「さっきはああ言ったが奥の手は最後に取っておくものだ。そうやすやすと使わない。というより刀じゃないと出来ないから使えないと言った方がいいか」

「そうですか・・・残念です」

セイバーが落ち込んでいる、俺の奥の手を見たかったのだろう

「まあ、それより次は昨日言ったとおり能力を使いながら戦わせてもらう」

「はい、分かりました」

「先に結界を張る」

シグルドを召還した時と同じ結界を張った

「これでいいだろう」

竹刀を構える

集中力を高め能力を使う

想い描けアーサー王の戦闘技術を

能力を発動し反映させる

「いくぞ」

セイバーに斬りかかったが簡単に避けられた

「今の太刀筋は私の……どうやって」

「流石だな。これが俺の能力の一つ”想像”だ、この能力は頭の中で思い描けばそれが現実に反映される」

「そうですか、ではあの時は能力を使っていたんですね」

「よく分かったな」

「ええ、さっきの戦い方と全く違っていましたから」

それからいろんなことを試した

「もう夕方か、鍛錬はこれぐらいにしよう。昼飯食ってなくて今にも餓死しそうだ」

「そうですね、すっかり忘れていました」

二人で道場から出てくると

「あれー？セイバーちゃんと、蒼緋くんじゃない道場で何してたの？」

「何もすることが無かったんで、セイバーに相手をしてもらってました。ボロ負けでしたけど」

「いや、私も危なかった一步間違えれば私が負けていたでしょう。」

「俺の攻撃まともに当たらなかつたくせによく言っな」

「ねー、そんなに強いセイバーちゃん」

「ものすごく強いですよ」

「物凄くではありませんが」

大河さんは何か閃いたのか

「セイバーちゃん、私と勝負しない？」

「——え？」

「はあ、いいですけど」

「大河さん止めといてほうがいいですよ」

「大丈夫、大丈夫ちよいと勝っちゃうんだから」

そして道場の中二人の戦いが・・・・・・一瞬で終わった

「あれれ？」

「勝負あります、大河」

「だから言ったのに」

「も、もう一回。今のは本気じゃなかったもん」

また道場の中で戦いが再開されまた一瞬で終わった

「ううもう一回!!」

「もう止めましょう大河、アナタほどの実力の持ち主なら分かるはずです」

「ううう。ま、負けたわ」

負けたのがそんなに悔しいのかorz状態になっている

「大河、シロウは帰ってきているのですか？」

「いや？ただだけど、どうしたの？」

「いや、シロウが日が暮れるまでに帰ってくるといっていましたが、で」

「女の子を待たせるなんて最低ね。セイバーちゃん、うちは体育会

系だから士郎が帰ってきたらボッコボコにしてあげなさい」

「分かりました。では私は寝ていまずのでシロウが帰ってきたら起こしてください」

「分かった」

「分かったわ、セイバーちゃん」

セイバーは道場を出て自分の部屋に戻っていった

「では、俺もさすがに疲れたので寝てます」

「蒼緋くんも士郎が帰ってきたら起こそうか？」

「そうしてくれると助かります。では」

そうして俺も部屋に戻った

「シグルドの奴まだ戻ってないのか」

と、呟いていたら廊下から足音が聞こえてくる

「蒼緋くん起きてる？」

「はい」

「士郎帰ってきたわよ」

「分かりました」

予め作っておいた服（全部黒）に着替えて居間に向かった

「遅かったな、セイバーが日が暮れる前に帰ってくると、言っていたが？」

「そうだよセイバーちゃん怒っていたわよ？」

「さ、桜セイバー怒ってなかったか？」

「セイバーさんですか？はい、なんかキリッとしていました」

「士郎、セイバーちゃんが道場に来てって言ってたわよ」

この言葉を聞き、士郎がおそろおそろ聞いてきた

「藤ねえ、セイバーになんか教えなかったか？」

「うん、うちは体育会系だからボツコボコにしてあげなさい、って言ったの」

「な———！！」

「士郎………」

「な、なんだよ蒼緋」

「健闘を祈る」

「セイバーちゃん、かなり強いわよ私もさっき勝負したら一瞬で負けちゃったもん。頑張ってね士郎」

士郎は諦めて道場に向かった

セイバーと士郎以外は居間で夕食を食べていた

「間桐の料理は本当に美味しいな」

「でしょ、桜ちゃんは洋食なら士郎より上だから」

「そ、そんなこと無いですよ」

と、いうふうにな会話をしていた

食事が終わり十時頃に道場から聞こえてきた竹刀の音が聞こえなくなった

「そろそろか………」

自室から出て道場に向かう

セイバーと士郎がなにやら話している。俺は気にせず中に入る

「セイバー、もう終わったのか？」
「はい、今士郎に聖杯に何を願うか聞かれて答えてたところです」
「すまなかつた話の途中に」
「いえ、言い終わった所ですので」
「ちょうどいい、二人に話がある」
「そうだ、昨日のことを教えてくれ」
「私もそのことが気になっていました」

俺は違う世界から来たこと以外を大まかに話した

「こんな感じに、俺は力を得た」
「こんな感じ、って凄いなその神様の言うことを疑わなかったのか？」

「いや、疑いはしたが、刺激が無くて退屈していたからな」
「でも、それなら辻褃が合います」
「辻褃？」

「俺の魔力と能力のことだろう」
「はい、神はこの世界の王ですから無限の魔力があるのは分かります。しかも能力もこの世界は神が創ったもの、あらゆる万物の”創造主”ですから辻褃が合います。アナタに力を与えたのは間違いなく神でしょう」

「そうか、俺と同じ考えを持つものが居てくれてよかった」
「ごめん、話についていけないんだけど・・・」

「シロウ、話を聞いていたんですか？」
「いや聞いていたけど、ちんぷんかんぷんだ」
「話を聞いて何処までは分かりましたか」

「えゝ、と神様から力を与えられたくらいしか・・・」
「はあ、じゃあ簡単に説明します。まず神は世界の王で魔力が無限にある。そしてこの世界を創った者だから”そうぞう”という能力を持っているのです」

「なるほど。ってそれって凄いことじゃないか」

「士郎、今更驚かれても困るんだが」

「仕方ありません、士郎ですから」

「そうだな士郎だから仕方ないか」

「ちよつと待て、何納得してんだ蒼緋」

セイバーと俺は途中から士郎をからかって遊んでいた

「もう寝るか」

「そうですね、このような時間まで喋るとは思いませんでしたから」

「じゃあ二人は寝てくれ、俺は土蔵で鍛錬してるから」

「・・・俺もそれに付き合おう」

「私は魔力の温存のためにもう寝ます、ソウヒ、士郎が無茶をするかもしれないのでその時は迷わず止めてください」

「分かった、じゃあ士郎土蔵に行こう」

「ああ分かった、セイバーお休み」

「はい、おやすみなさいシロウ、ソウヒ」

「ああ、おやすみ」

そついい俺と士郎はセイバーと道場の入り口で分かれた

「やっぱりいつ見てもガラクタだらけだな、ここ」

「しかた無いだろ。藤ねえが勝手に色んなの置いていくんだから」

「大河さんらしいな」

「じゃ、俺は鍛錬するから静かにしててくれよ」

「分かった」

土蔵の中に静寂がはしる

士郎が集中して強化をする

俺はサーヴァント召還の魔方陣の中に立っていた

「これを能力で細工して使えば、あいつを呼び戻せることが出来るか？」

召還してから何処に行ったのやら、そろそろ呼び戻さないと

「士郎この魔方陣使っていいか？」

「ああ、別にいいけど。何に使うんだ？」

「シグルドを呼び戻す。あいつ召還して俺が気を失った時からいないんだ」

「そういえば、他のサーヴァントに挨拶してくるって言ってたぞ」

「馬鹿かあいつは、不死身になったからって一人で敵地に向かうなんて」

「まあ、不死身ならいいんじゃないのか」

「別に挨拶に行くのは構わんが、俺に何も言わずに行っただ。呼び戻したら令呪で動けなくして、ボコボコにしてやる」

「確か攻撃は効かないはずだろどうやってボコボコにするんだ」

「それは呼び戻してからのお楽しみというやつだ」

そついい俺は魔方陣の前で能力を発動する

想い描くは魔方陣に現れるシグルドの姿

能力を反映し、魔方陣が輝く

「おいおい、何でここにいるんだ？俺確かランサーと……」

目の前にいる俺に気付いたのか、かなりキョドっている

「ほう、ランサーと何をしてたんだ？」

「い、いや。ベベベ別に何も！！。散歩してただけだぞ！！」

「散歩か。士郎から他のサーヴァントに挨拶してくると言っただろ」

じゃないか」

「こ、小僧あれほど蒼緋に言うなって言ったのに!!」

「あれ?そんなこと言ってたっけ?」

士郎は本当に忘れていたようだ。でもそれより

「ほう他のサーヴァントに挨拶に行ったのを認めるのだな」

「い、はい」

返事を聞き俺は右手をシグルドに向ける

「おい、蒼緋何する気だ!?俺はただ他のサーヴァントの偵察をしに……」

「そんな言い訳聞く耳もたん!!」

「ちよつ、まつ、」

「俺の気が済むまで動くな!!」

右手の令呪が一つ消える

「さあ、教育の時間だ」

「は、俺にはどんな攻撃も効かないぜ」

「士郎、限界まで沸騰した熱湯を大量に持ってきてくれ」

「わ、分かった」

シグルドは俺の考えが分かったのか士郎を説得している

「こ、小僧やめるんだ」

「すまん、逆らったら俺が危ない。それと俺の名前は衛宮士郎だ」

「分かった、士郎熱湯は持ってくるなよ!!」

「だから逆らったら俺が危ないんだって」

「士郎、早く熱湯を持ってきてくれ」

そのときの俺の顔は悪魔のような顔だったらしい

「シグルド。俺が何故怒っているのか分かるか？」

「えーと、何も言わずに他のサーヴァントと戦ったこと？」

「そうだ良く分かっているじゃないか」

「そんなことかよ」

「そんなこととはなんだ、そんなこととは！！。俺もな他のサーヴァントと戦いたかったんだ！！」

「えっ——」

シグルドは俺の発言に驚いて絶句している
そこにちょうど士郎が戻ってきた

「おい、持って来たぞ」

バケツにたっぷり入った熱湯からかなり湯気が出ている

「おい！！やめろ、やめてくれ」

シグルドは必死に叫んで助けを呼んでいる

「残念ながら助けは来ないぞ、ここには結界を張っているからどんなに叫んでも魔力を放出しても気付く奴はいないだろう」

「ちよっ、準備よすぎって、あつつうー！！」

「ははは、やっぱりな攻撃は効かなくても感覚を刺激するのは効くのか」

「ちよっ、あつつ、やめ、あついつー！！」

「な、なあちよっとひど過ぎやじゃないか？」

「大丈夫だろう。ファーブニルの血よりちょっと熱いだけだからな」
「ちよつとじゃねえよ!!」

「おつとすまない手が滑った」

能力で熱湯をそれ以上熱くして全部シグルドにぶっかけた

「ぎゃーーーーー!!!死ぬーーーーー!!!」

「ふう、今回はこれぐらいでいいだろう」

俺が満足したので令呪の効果が消え自由になったシグルドが

「ぜってえいつか仕返ししてやる」

「その時はまた令呪を使うまでだ」

能力を使い令呪を元の状態に戻し、シグルドに見せ付けた

「き、汚ねーぞ」

「何とでもいえ、それとこれからは勝手に動き回るなよ。今度は熱湯じゃ済まないからな」

「ぐ、わ、わかった」

「ならいい。士郎もう寝よう、明日きつくなるぞ」

「わ、分かった」

熱湯で苦しむシグルドを置いて自分の部屋に戻る俺と士郎であった

第七話 コーリング（前書き）

FFXIIIをやっているので、次回から更新が遅れるかもしれませんが

第七話 コーリング

朝、俺はいつも通り能力を使って布団から出てトイレに向かう

「——ん？」

士郎の部屋から呻き声が聞こえる

「大丈夫か士郎」

声をかけても反応が無い聞こえるのは呻き声だけ。

「士郎、入るぞ」

部屋に入って士郎の状況を確認する

「そういえば今日はアーチャーの夢を見る日だったな」

士郎が起きるまで部屋にすることにした

「.....」
「.....」
「.....」

十分ぐらい経って士郎が起きた

「う、ん」

「起きたか」

「あれ、どうして蒼緋が俺の部屋に？」

「お前の部屋の前を通つたら苦しそうな声が聞こえてな」

「そうなんだ、ありがとな看病してくれて」

「看病と言つほどでもないが」

「それでも俺を心配して起きるのを待ってたんだろ？それは一応俺の中では看病に入るんだ」

「そうか、じゃあ看病をした礼としてお前が見た夢を教えてくれ」
「俺が見た夢？」

「そうだ、お前が見た夢がどういうものだったかを教えてくれ」

「うーん、言葉じゃ表せないな」

「ならお前の頭の中を覗かせてもらおう」

「え——」

士郎の額に手を当てて能力を発動した
想い描け、他人の頭の中を覗く力を持つ俺を。
能力が発動し、頭に奴の記憶が入ってくる

「ふう、生で見ると堪えるな」

記憶を見るのは一瞬で終わった

「なんだったんだ今の一瞬意識がなくなっただけだ」

「さっきも言っただろう。お前の頭の中を覗かせてもらつと」

「え、でも一瞬だけだったぞ。そんなんじゃ俺が見た夢を全部見たのか？」

「ああ、そうだそのせいで今頭痛がする」

「見れたのか、で感想は」

「お前が見た夢に出てきた奴を俺は見たことがある」

「え——」

「お前も見たことがあるだろう？」

「いや、見た夢を思い出そうとしても出てきた奴の顔が思い出せない

いんだ。知っているなら教えてくれ、奴は一体誰なんだ」
「……………何れ気付くだろう。気にするなすぐに分かることだ」

士郎は無理に聞かず自分から身を引いてくれた

「分かったよ。すぐに分かるならそれまで待とう」

「それがいい、でもう六時回っているが朝飯作らなくてもいいのか？」

「まず——今日くらい朝飯作らないと」

「蒼緋、今日の見たことは誰にも言わないでくれ」

「分かった」

士郎は台所まで走っていった

朝飯を食い終わって大河さんと間桐を送り出して士郎、セイバー、シグルドと食後のお茶を飲む

「それじゃ行ってくる。留守番頼むぞ蒼緋、セイバー、シグルド」

「はい、気をつけて凜の助力があるからと、無茶しないように」

「学校では気をつけろよ」

「お前の飯は美味しいから死ぬんじゃないぞ」

「ああ、昨日で懲りてるよ。敵を追いかけるときはセイバーを呼ぶよ」

士郎はそう言って家を出て行った

「セイバー」

「はい」

「ん？なんだ？」

そういえばシグルドもセイバーのクラスだったな

「シグルドじゃない」

「あゝはいはい。そっちのセイバーね」

わざと返事をしたわけじゃなく、本気で返事をしたのかこいつ

「お前のことはシグルドとしか呼ばないからセイバーと言われて返事をするな」

「分かったよ」

「ではセイバー」

「はい、なんでしょう」

「鍛錬しないか？」

こちらの意図に気付いたのかセイバーは快く引き受けてくれた

「いいでしょう」

「俺はのけ者か……」

シグルドが構ってもらえず泣き真似をしている

「シグルド」

「ん？」

「釣りに行って来い」

数秒間シグルドの思考が止まった

「………はあ!？」

「どうせすること無いんだろ」

「釣りに行って夕食のおかずを用意しとけ」

「いいですね。シグルド、いい魚をお願いします」

セイバーがまたもや俺の意図を理解してくれて話を合わせてくれている

「ちょっと待て。何で俺が？それと道具は？」

「さっきも言っただろう。何もする事が無いだろうからお前に夕食のおかずを託すんだ」

「託すってどういう意味だよ！？」

シグルドがいたらまともな話が出来ないだろう、ここは嘘をつくしかない

「士郎には夕食のおかずは魚を釣ってくると言っておいた」

「まて、もし俺が釣ってこなかった場合どうなるんだ」

「どうなるって夕食が白ご飯だけになるな」

「なっ！！」

俺の言った嘘をセイバーが信じてしまい。かなり殺気を込めてシグルドを睨んでいる

「セ、セイバーそんなに殺気込めて睨まないでくれよ」

「そうだ、もし釣りに行かなかったもしくわ、一匹も釣れなかった場合、令呪使ってボコボコにするから肝に命じておけ」

「ぐっ、でも道具は？道具がないと釣りにも行けねーぞ」

まだ抵抗しようと頑張っている、ここで止めを刺すために能力を発動させる

「道具なら……ほらこれでどうだ」

能力を使い、釣り道具一式を創った
これを見てシグルドが呆れたように

「こんなことに能力使うなよ」

「ぐちぐち五月蠅い。そんなことを言う暇があったらさっさと来て来い」

またも能力発動、今度はランサーが釣りをしていた所を思い描いて

「ちょっと待てー……」

転移させた

「さてこれで邪魔者はいなくなった」

「そうですね。どうせ鍛錬より私に話があるのでしょ？」

「良く分かったな」

「確信は持てませんがシグルドを無理やり行かせようとして
ましたから、それで確信が이었습니다」

本当に勘がいいな

「シグルドと変わってくれないか」

「それは、無理です。私は士郎の剣ですから」

「そうだったな。じゃあ道場に行こう、話はそこでする」

「分かりました」

俺とセイバーは無言で道場に入った

「セイバー座ってくれ。立ったままじゃきついだろう？」

「そうですね」

セイバーは俺の目の前で綺麗に正座して俺を見つめている

「ソウヒ、さっき言っていた話とは何ですか？」

「単刀直入に言わせてもらう、お前の剣を見せてくれないか？」

「剣ですか？別にいいですけど・・・」

セイバーが戸惑っている。たぶん風王結界のことだろう

「大丈夫、風王結界は解除しなくていいぞ」

「なぜ、私の宝具の名前を——！！」

セイバーが驚いて立ち上がった

「まあ座れ、”アルトリア・ペンドラゴン” いやアーサー王か？」

「な——！！」

「何故私の名前を、か？」

自分の真名を気付かれていて、しかも自分の思考を読まれたのが聞いたのかセイバーは再び座り無言で睨みつけてくる

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「そう警戒するな、俺は聖剣を見せてくれと言っただけだろう」

セイバーが何かを思いついたように閉じた口を開いた

「・・・・・・いいでしょう。でも条件があります」

「なんだ？」

前に教えたことをまた聞かれた

「ソウヒ、アナタは一体何者ですか」

「なに者って、前にも言ったとおり神に力を与えてもらった人間だ」

「それは本当の事を言っているのですか？」

「本当だ。それにサーヴァントの正体など能力を使えばすぐに誰か分かる」

「そ、それもそうですが……」

「このまま正体を隠したままだと疑われそうだしな、教えてやろう誰にも言っなよ」

「分かりました」

俺は軽く深呼吸をして

「俺は”この世界の人間じゃない”」

「な——！！」

こつという反応をするから教えるのは控えてたんだが

「本当は聖杯戦争が終わったら教えてやるつもりだったんだが」

「そ、それは本当の事なのですか？」

「ああそつだ。よしちゃんと話したぞ、さあ聖剣を見せてくれ」

これ以上教えることは出来ないから、無理やり話を元に戻した

「そうですね、まだ信じきれませんが……」

セイバーが風王結界に包まれている聖剣を出し、俺に差し出し、それを俺は受け取る

能力を使い目で聖剣が見えるようにして

「なかなか、いい剣だな」

「風王結界を解いていないのに分かるのですか？」

「能力を使えばな」

セイバーが呆れたように

「本当に便利な能力ですね」

セイバーに何も言わずに聖剣に魔力を込める
するとどんどん黄金の輝きを放つ聖剣が見えてくる

「———！！」

「ほう、誰でもこの結界は解けるのか？」

「そんな馬鹿な、それは私の宝具です、私以外では風王結界は解けないはず」

「現に風王結界は無くなっているが」

聖剣・エクスカリバーが姿を現した

「な、なぜ」

「ひょっとして俺を新たな主と認めたか？」

冗談で言ってみた

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

セイバーが愕然としている
風王結界を解けた可能性の一つを言ってみた

「これも奴の力のおかげか」

「力？」

「奴は神だ。万物は神が創ったもの、そしてそれを基にしてこの剣は作られた」

「と言う事は……」

「この世の万物で作られた物を俺は使いこなすことが出来るということか……」

「なんと、卑怯な能力でしょう」

「確かにそうだな」

自分でもそう思う、確かに卑怯だなこの能力……

「でもその能力を使えば、相手の宝具を奪い、使いこなすことができ相手の奥の手を封じることが出来ます」

「それも考えていたが、もし相手が固有結界を宝具として使ってきたらこの力は無意味だ」

セイバーは知らないがアーチャーの事を言ってみる

「ですが、武器に関しては大丈夫でしょう」

「相手から宝具を奪えればの話だがな」

「アナタの能力を使えば大丈夫でしょう」

「そうだな、能力を使えば奪えないことは無いが……。そういえば返すのを忘れていたな」

風王結界を張り直しセイバーに聖剣を返す

「確かに返していただきました」

話をしていた気付かなかったが道場に入って話をし始めた時よりかなり時間が経っている

「結構話し込んだな、飯にでもするか」

「そうですね。確か士郎が作って行ってくれたはずです」

セイバーと居間で昼飯を食っていた

「飯も食ったし、鍛錬でもするか、今日こそは一本取らせてもらうぞセイバー」

「そう簡単には取られませんよ」

夕方まで鍛錬をしていると士郎が帰ってきて道場に来た

「ただいま、セイバー、蒼緋。今帰って来たぞー」

「今日は早かったな」

「お帰りなさいシロウ。その様子では大きな動きは無かったようですね」

「いやそれが……………」

士郎から話を聞いた

「…………なるほど。敵マスターとの戦いは明日ですか。では今夜は十分に睡眠をとり、力を蓄えねばなりませんね」

「……………そうだセイバー。ほらよ」

俺は能力で創った飴玉をセイバーに渡す

「これは飴玉、ですか？」

「そうだ、俺の鍛錬に付き合ってくれているからな。そんなもので

悪いけど礼だ」

「まあそういうなら仕方ないですが」

セイバーはちよつとうれしそうな顔をしていた

「セイバーそれは寝る前に口に入れる」

「何故です？」

「俺の言ったとおりになれば明日の朝嬉しいことが起きるぞ」

「そうですか。なら言つとおりにしましょう」

セイバーはそれを聞いてうれしそう？に返事をしてくれた
そこでふと疑問が頭によぎる

「なあ気になったんだが。士郎、お前飯作らなくてもいいのか？」

「そうです、私も少し気になっていました」

「ああ、それなら大丈夫。藤ねえが作っているから」

「大丈夫なのか」

確かあの人は料理が駄目なはずだが、お好み焼き丼というのには興味がある

「シロウ、本当に大河の手伝いをしなくてもよろしいのですか？」

「大丈夫だって。藤ねえも、もう大人なんだしかに玉の一つや二つ作れるはずさ」

「じゃあ大河ではなく”士郎”を信用します」

「俺もお前を信用しよう」

俺の口に合わなかった場合の士郎に八つ当たりをするためにセイバーに合わせる

「え、あ、ああ。信頼してくれて、いいけど」

二人で脅迫めいた迫力で念を押す

「セイバー、聞いたか今の言葉」

「はい、確かに聞きました。シロウ、その誓い決して忘れないように」

そう言つて俺とセイバーは肩の力を抜いて床に座り休む

そして待望の夕食になった

大河さん特製のかに玉どんが四人分テーブルに並んでいる

「んじゃ、いただきます」

「いただきます」

「いただきますーすー!!」

「いただきます」

全員集まつて合掌をする

俺はこの日始めてお好み焼きがご飯に合わないことを知った

「ば、ばかな——!?!事件発生、かに玉丼がたった1分で別の料理になつてるよおううう……!!!!!!!!」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

大河さん以外は誰も何も喋らない

「ねえ、何でこうなっちゃったの？ちゃんと聞いたとおりしたのに」
「・・・これってもしかして、これを教えたのは藤村組の若衆さん？」

「うん。おっきな玉子焼き作るって言ったら、小麦粉とかいろいろくれたの」

みんなが白い目で大河さんを見る

「・・・・・・・・・・・・・・・・」
「・・・・・・・・・・・・・・・・」
「・・・・・・・・・・・・・・・・」
「・・・・・・・・・・・・・・・・」

だれも喋らない

「おい、しろ・・・」

「シロウ」

「セイバー・・・！？」

「——シロウ。いくら私でもこれは食べにくい」

完璧に怒っているな

それから悪魔のような夕食を終えて、夜の作戦会議をすることになった。

が、俺はそれに行かず、土蔵に行った。

「さて、シグルド、今更だが釣ってきた魚を見せてみる」

「ははは、一匹も釣れなかった」

令呪を使うために右腕をシグルドに向ける

「さて、俺が満足するまで動くな!!!!!!!!!!」

「が、ま、またかよ」

「今回はドライアイスを使う」

能力で出した白い発砲スチロールの中にドライアイスが入っている

「や、やめろ。それで何をする気だ」

「何をつて。罰を与えるんだよ。」

「罰つてそれでか？お前も火傷するぞ」

「普通に触ったらな。だがこれはただの見せ掛け、本当の狙いは・・・」

能力発動

シグルドの首から下がドライアイスに包まれていく

「ぐ、あ、は、はあ、はあ、つ・め・てえゝ!!」

「その状態で一時間過ごせ」

ドライアイスで包まれたシグルドを置いて土蔵から出る

「さて、士郎がセイバーにやられてる所を見に行くか」

俺は道場に足を進めた

道場の中は地獄だった

なぜかと言うと士郎が何も出来ずにセイバーにボコボコにされているからだ

「俺より酷いな・・・」

「うおわああ

「!!!!!!!!!!」

「シロウ、まだまだ続きますよ!!」

やっぱりかなり怒っているな、戦闘時の鎧姿になってるし
それから道場の入り口で座って待つこと数時間、鍛錬という名の体
罰が終わった

「ぜえー、ぜえー、ぜえー」

「今日はこのぐらいでいいでしょう。今後はこのようなことが無い
ように」

食い物の恨みは恐ろしい、か

「いたのですかソウヒ」

「ああ、ずっと前からここにいたが、気付かなかったか？」

「はい、鍛錬に夢中で……」

それほど士郎に八つ当たりをしていたのか。
食い物の恨みは恐ろしいな……。

「まあいい、それより。おい士郎」

「な、なんだ？」

かなりキツイのかまだ息を切らしている

「ほら、これでも舐めてろ」

セイバーにやった飴玉と一緒に物を投げ渡す

「これは飴……だよな？」

「それ以外になんに見える」

「いや、なんか普通の飴玉に見えなくて」

流石だな、解析とか細かいことが得意なだけはあるな

「それは、俺の能力で作ったものだからだろう」

「そうか、でも……」

「いいから早く食べ」

「わ、分かったよ」

士郎は慎重に口の中に飴玉を入れた
そして一言

「お、おいしい」

「それは本当ですかシロウ!!」

セイバーがさつき俺のやった飴玉を食べようとしている

「セイバーはまだ食うな」

「え。何故ですか？」

「お前のは特別製でな、眠っている間じゃないと味がしないんだ」

「そうですか。では私は湯船に入ってすぐ寝ますので。おやすみなさい、シロウ、ソウヒ」

「ああ、おやすみ」

「おやすみ、セイバー」

セイバーは早く飴玉を食べたいのか早足で道場を出て行った

「士郎、体に何か変わった事は無いか？」

「いや、無いけど。それがどうした？」

やっぱり気付くわけ無いか

「何でもない、気にするな」

「む、そう言われたら余計気になる」

「起きてからのお楽しみ、と言っやつだ」

「セイバーにも同じこと言ってなかったか？」

「………説明が面倒くさい。さっさと寝ろ」

俺は強引に話を逸らし道場を出る

士郎にやった飴玉は数時間の間、抗魔力を上げ、疲労を回復する効果がある

「あれの制限時間が切れてから魔術にかけられたら終わりだな」

まあ、どうせアーチャーに助けられるんだから別に気にすることは無いか

俺は部屋に戻り眠りについた

さむい………なんだこの寒さは、俺は布団の中に入っているのに何故寒いんだ
目を開ける

「………こっ、は」

まさか士郎が無理だからって俺が呪われたのか？

「全く、冗談じゃないぞ」

俺が今いる場所は柳洞寺だ、しかも目の前にはキャスターがいる

「アナタね、坊やの抗魔力を上げたのは」

早くもバレたか

「そうだが、それがどうした。というか何故俺がここにいる」

「それはアナタが坊やより抗魔力が低いからよ。驚いたわ、私より魔力が桁違いに多いのになんで抗魔力が一般人並なのかしら」

やっぱりかここにいる時点で分かっていたがはつきり言われると・
・空しいな

「そうだったのか、俺はてっきりかなりの抗魔力を持っていると思
ったんだが」

「さすが”イレギュラー”ね」

”イレギュラー”か、バーサーカー戦の時イリヤスフィールに言わ
れたな。やはり正体がばれているのか

「それは褒めているのか」

「さあ？どっちでしょう」

「まあいいそれよりこの魔術を解いてくれないか」

「それは無理な話ね」

「そうか・・・」

交渉しても無駄かなら令呪でシグルドを呼び出すしかないか

「令呪は使わせないわよ」

声が出ない、魔術をかけられたか、これでは令呪が使えんな。だが、

俺には神の能力があるこんなものすぐに解くことが出来る

創造しろ聖剣の鞘を……

目の前に黄金に輝く鞘が現れた

俺にかけられていた魔術は解除され、この身を妖精卿に置く

「な、なぜ私の魔術がそんな鞘ごときに!!」

「これは彼の王が死後辿り着くとされる、彼の王が夢見た、はや辿り着けぬ理想郷だ、そうだ」

これだけ言えばキャスターも気付くだろう

「理想郷……!!まさかそれは」

「そう、これはアーサー王のもつ絶対の守り”全て遠き理想郷”>アヴァロンくだ」

「なぜアナタのような者がそれを」

「さあ何故だろうな」

右手を前に掲げ、令呪を使う

「来い、シグルド!!」

頭上の空間が歪む

「ヒーロー参上!!」

テレビでも見て覚えたのか変なポーズを取っている

「くっこのままでは」

俺にはアヴァロンがあり、しかもサーヴァントが出てきたことによりあせりを感じているのだろう

「この辺でいいだろう」

声は後ろから聞こえた

「アーチャーか、お前が助けないから令呪を使ってしまったぞ」

アーチャーに皮肉を言う

「ふん、私には好都合なことだな」

俺とアーチャーはお互いの顔を見ながら苦笑する。
俺の中ではちよつといい雰囲気だ

「おい、こいつとはまだ戦ってないぞ俺」

だがそいつはその雰囲気破壊した

「少しだまれ」

「へーい」

シグルドを黙らせてアーチャーに聞く

「そうだアーチャーお前キャスターに勝てるか？」

俺の質問にアーチャーが答えようとすると

「ふ、ふふふふふ。一体何を言っているのかしら坊や、アーチャーごときの攻撃が当たる訳無いじゃない」

「む——」

キャスターが豪語し、それを聞いたアーチャーは牆に障ったのか戦闘体制に入った

これで士郎を呼べばルートどおりになるな

「もう、俺は帰る。後は士郎と二人で頑張ってくれ」

「——はあ!？」

能力を使い士郎をこの場に転移させた

「ん？俺なんでこんな所に」

「では、俺たちはここいらで失礼する。いくぞシグルド」

「せっかく来たのにすぐ帰るなんて」

「なに、強そうなのは他にもいるだろう」

「でもさー……」

五月蠅いなこいつ

「お前に選択権など無い」

「へーい」

シグルドを黙らせて士郎とアーチャーに

「じゃ、後は任せたぞ二人とも」

「な!！」

「えっ、な、何だ？」

俺は能力を使い全速力でその場から去った
だが正門を通らずに出たのが駄目だった

「——っ！ー！やっぱり結界を内側から突き破るのはきついな」
「なあ蒼緋いー、あの二人を置いて来ていいのか？」

「別に構わないだろう。士郎にはいい経験だと思えば気が安らぐ」

シグルドは俺を見て一言

「……最悪だな」

「何とでもいえ。さ、帰るぞ」

柳洞寺の方向を向く

「すまないな士郎、こうでもしないとお前は強くなれない……」
「」

第七話 コーリング（後書き）

感想で注意されたのでかなり無理をして編集しました
変な所や駄目な所があったらどんどん言ってください

第八話 ライダー

朝、衛宮邸前

昨日はあんなことをしてしまったから衛宮邸には帰るのは厳しいな、
と思いながらも衛宮邸の玄関前にいる

「シグルド」

霊体になっていたシグルドが現れる

「ん？なんだ」

「このまま帰ったら面倒なことが起きるような気がするのは俺だけ
か」

「いや俺もそうなりそうな気がするよ」

これは少々まずい、何か言い訳を考えなければ
と、考えている最中、玄関から大河さんが出てきた、シグルドも同
時に霊体化する

「行つて来るね、士郎。一人だからって遅刻しちゃ駄目だぞ」

言い終わった後、前を向いて玄関を出てくる大河さんと玄関前で言
い訳を考えていた俺は目が合った

「あっ」

「あゝ！！」

驚いた大河さんに気付いて士郎が玄関から出てきた

「どうしたんだよ藤ねえ。弁当でも忘れたのか？・・・あ」

士郎とも目が合う

「おはようございます。大河さん、士郎」

「何処にいたのよ蒼緋君探したのよ」

「何処に行つてたんだよ蒼緋。かなり探したんだぞ」

大河さんはともかく士郎はなんか怒ってるな

「もう駄目だぞ、学生が夜出歩いたら」

「すみません」

俺が怒られているのを見て士郎が助け舟を出してくれた

「藤ねえ学校に行かなくてもいいのか？」

「あつ、早く学校に行かなくちゃ。蒼緋君これからは夜の外出は駄目だよ」

「分かりました。これからは気をつけます」

「分かればよろしい！！。じゃ、行つて来るね」

俺の説教が終わったら大河さんは物凄い速さで学校に行つた

俺も途中まで付いていこうと追いかけようとしたら後ろから服を掴まれて逃げる事が出来なくなった

「蒼緋、何処に行こうとしてるんだ？」

「買い物にでも行こうかと」

士郎は俺の嘘にすぐ気が付いた

「こんな早くには何処も開いてないぞ」
「ちっ」

もう諦めるしかないか

「分かった、昨日の事を説明すればいいんだろ。だから服を掴むのは止める」

俺の言ったことが信じられないのか士郎は聞いてきた

「本当か？」

「本当だ」

俺は士郎の目を見て言った

「朝飯食ったら道場に来いよ、セイバーが待ってるから」
「分かった」

覚悟を決めて朝飯を食い道場に行く
道場の中から竹刀の音が聞こえる

「鍛錬してるのか」

セイバーのことだ気付いてくれているといいが
俺は道場の玄関を開け中に入っていく

「来ましたか。士郎、休憩をしましょう」
「分かった」

セイバーの所まで行く

「ソウヒ、何か弁解はありませんか？」

セイバーはそこまで怒ってないな

「別に無いが」

いつもどおりに答える

「では昨日のことはどういふことですか？」

「士郎が弱いままだと後々面倒だからだ。セイバーは気付いていただろう、士郎が昨日よりかなり腕が上がっていることに」
「なっ！！」

士郎は驚いていた。だがセイバーは納得したように頷いている

「やはりそうでしたか、士郎と手合わせをしていて気付きましたが、でもなぜあのようなことを？」

「獅子はわが子を谷底に落とす、という言葉があるだろう。まさにそれを行っただけだ」

「谷底つてあそこはそんな生易しいところじゃなかったぞ」

「でも今日の鍛錬で調子がよかっただろう？」

「そ、それは」

図星を突かれてなにも言えなくなった士郎を置いてセイバーが起こった風に言ってきた

「士郎を強くすることとはいえ、このようなことはもうしないでください。これからはこのようなことが無いようにお願いします」

「分かった、約束しよう」

どうやら許してもらえたようだ。そういえば飴玉の効果聞いてみることにした

「セイバー、気付いてると思うが魔力の残量はどうか」

「魔力の残量、ですか？」

そついいセイバーが自信の魔力量を確認する

「——！！ま、魔力が回復している！？」

「ちゃんと嬉しいことが起きただろう」

「よかったじゃないかセイバー！！」

士郎は喜んでいるが実際、魔力が回復していると言っても、始めて召還された時と同じくらいの魔力しか回復していないだろう

「士郎、回復したといっても、セイバーの宝具を使ったら直ぐなくなるから気をつけろよ」

「え、そうなのか？てつきり魔力が全快したのかと・・・」

「でも、これで今までよりはマシな戦いが出来るでしょう」

セイバーが安心した顔をする。

そこで気付いたことが一つ

「・・・士郎、学校はどうした」

何時も登校する時間から二十分近く遅れていた

「あ・・・あ——！！」

今更気付いたのか大慌てで道場を出て行く

「全く、騒がしい奴だな」

「そうですね」

セイバーがこつちを睨んで、何か言いたそうな顔をしている。どうせ飴玉のことだろう

「なんだ、セイバー俺に何か用か？」

「頼みがあるのですが・・・」

「拒否する」

「え・・・・・・・・」

セイバーが即答されて固まっている

「どうせ、昨日くれた飴玉をもっとください、とか言つつもりだったんだろう？」

「そ、それは・・・」

図星か、それもそうだろうセイバーにとって魔力供給の手段が無いに等しいのだからな。

まあでも、魔術師の精液を体内に取り入れれば魔力が回復するはずだ。

何れ遠坂と再契約するし、ここで甘やかすのは良くないな

「残念だがあの飴玉はもう創らない」

「何故です！！アレがあれば魔力を直ぐにとは言いませんが回復できます」

「回復は出来ると言っても宝具もまともに使えないのでは無意味だろう」

「ですが、現在宝具は二回まで使えます」

結構抵抗してくるな。説明するのが面倒だ、ここはハッキリ言っておくか

「単刀直入に言わせてもらうがお前は魔力を回復する必要は無い」「どつという意味ですか？」

「前にも言っただろう。時期が来たら魔力の心配は無くなる、と」「確かに言いましたが……。でもそれがいつか分からない以上、今のうちに魔力を蓄えておかないと」

まだ粘るか仕方が無い

想い掛け穂群原学園の校門前を……

「俺は疲れた出かけてくる」

「え、ちょっと、まって……………」

能力発動

セイバーが止めようとしていたが無視して転移した

穂群原学園前

時間は多分5時限目が終わるころ

もう少しで結界が発動する

念のためにシグルドを呼ぶ

「おい、シグルド」

シーン……………

返事が無い、また何処かに行ったのか？
気配を探してみる

「・・・・・・・・」

やはりシグルドはいない
右手を掲げ令呪を使う

「こい、シグルド」

令呪が発動し、目の前の空間が歪む
シグルドは何食わぬ顔で

「ん？なんか用か？」

こいつは・・・・・・・・

「何時の間にいなくなっていたんだ」

「いやゝ虎のねえちゃんが出てきて、お前の気がそれてそのまま霊
体になってふらふらしてた」

「・・・・・・・・これから俺が許可を出さない限り俺から離れるな」
「へーい」

納得がいかない顔でシグルドがこっちを見ている

「どうした？」

「いやなんで怒らないのかなーって思ってた」

「今日はそれどころじゃない」

「ん？今日ってなんかあったっけ？」

こいつ、話を聞いていなかったのか

「今日は学校にいるマスターと戦うと士郎が言っていただろう」
「・・・・・・・・あゝそんなこと言ってたな」

呆れた

やっぱりセイバーと代わって欲しい

「まあ今日は俺たちは何もしない」
「へ？何でだよそろそろ本気で戦いたくてうずうずしてたのに」
「まあ待て、何れお前の出番は来る」
「・・・・・・・・」

シグルドは俺の顔を見て呆れている

「前から言いたかったんだが、お前の笑った顔ってかなり怖いんだよ」

「そうか？普通だと思うが」

「全然普通じゃねーぞ」

「では次から気をつけよう」

俺は笑った顔をいつもの無神経な顔に戻した

「そろそろだな、行くぞシグルド」

「????今日は何もしないって言わなかったっけ？」

「今日はある者を助けてやろうと思ってな」

「お前が人助けてって珍しいな」

「お前には言われたくないな」

くだらない会話をしながら学校に入ると入った瞬間結界が起動した

「ほう、結界の中にとこうなるのか」

ちよつと体がだるいぐらいか、これなら大丈夫だろう

「えらく余裕だなマスター」

「なに今日はいい日だからな」

確か結界の起点は一階のはず、急がなければ奴が……

「行くぞシグルド場所は一階の結界の起点だ」

「了解」

俺は想像で足の速さをランサー並にして一年四組の近くまで走って行く、そして俺とシグルドの気配を消す結界を張る

「ここか」

「その能力せこいぞ俺より脚が早くなるなんて」

「五月蠅いちよつと黙っている」

ライダーがキャスターにやられて直ぐに入る準備をしていた

「シグルド、ライダー以外のサーヴァントの気配は」

「四階にいるな。……来たぞ!!」

来たか……

「うわあああーーーーー」

間桐慎二の悲鳴が聞こえる今か

結界を解き中にガラスを割って入る

「おおお、お前らなんだよ」

「俺か？俺はそこに転がっている奴に用があるんだ」

その言葉を聞き間桐慎二があわてる

「違う違う、僕じゃない殺したのは僕じゃない」

間桐慎二は発狂している

俺は間桐慎二を無視してライダーの元に向かう、首を引きちぎられても英霊はちよつとの間生きていられる。

急いでアヴァロンを創りライダーの首をつなげる。

首を繋げた方がいいが、ライダーは意識を失っている

「よし、これでいい。シグルド、ライダーを抱える逃げるぞ」

「了解！！」

シグルドはライダーを抱えて窓から出て行つた

「ちよつと待てそいつは僕のサーヴァントだぞ返せよ！！」

五月蠅いな、想像を使い時間を止める。士郎が来たら何か言われるしな、こいつが余計なことを喋らないように記憶をいじって逃げるか慎二だけは動けるようにしている。記憶を消すために近寄る。

「止める来るな！！」

「五月蠅い、害虫風情が調子に乗るなよ」

俺は慎二から令呪の付いた本を奪い取る

「その本は僕のだ返せよ！！」

そろそろ限界ださつさと記憶を消すか
想像で慎二の記憶を消す

「じゃあな、これからは大人しくしとくんだぞ」

俺は記憶を消して意識が朦朧としている慎二に聞こえていないだろうが注意をして、時間を動かして窓から出る。

念のために創造でライダーの死体を創り元の位置に置く
直ぐに想像を使い衛宮邸に転移して戻る

シグルドが衛宮邸の縁側に座っていた

「よ、蒼緋早かったな」

「お前も早かったなシグルド」

「それほどでも」

「で、ライダーは」

シグルドが人差し指で土蔵を指した

「分かったご苦労だったな」

「運ぶだけだからな楽だったよ」

俺は土蔵に向かう

土蔵の中にはライダーが意識を失った状態で横たわっている

「さつさと契約解除済ませるか」

創造でキャスターの“破戒すべき全ての符”>ルールブレイカー<
を創り、術者が使った魔術を解除する能力を付け加え、ライダーに

刺す

これでマスターとの繋がりを絶ち、一緒に結界を消す

「これで結界は無くなったはずだ」

それでライダーが一週間生存できるくらいの魔力をライダーに注ぐ

「よし、寝るとするか」

昨日はまともに寝ていないからだだった。

一応シグルドに奇襲されないように警戒してもらい自室に戻り寝た

「明日、ライダーが目覚めたら――」

第八話 ライダー（後書き）

間違っている所

おかしい所

駄目な所

など何でもいいので言ってください

アドバイスも（・・・）ノヨロシク

第九話　ギルガメツシュに屈辱を・・・（前）

朝の五時三十分頃目が覚めた

「昨日は昼の三時くらいに寝てしまったから仕方が無いか」
「起きるの早いな」

後ろから声が聞こえた

「昨日、アレだけ早く寝ればこんな時間に起きるだろう」
「そうなのか？俺なら、あんだだけ早く寝ていればもうちょっと早く起きるぞ」

「お前と一緒にするな。それとシグルド、昨日、士郎達が帰ってき
てから何か聞かなかったか？」
「いや？別に何も聞いてないけど」
「ならいいか」

俺は部屋から出て庭に出た
外はまだ暗い

昨日、土蔵に寝かせたライダーが気になり土蔵のほうに向かう

「蒼緋いゝ、どうせ逃げられてるって」
「なめるな俺はヘマはしない」

俺は昨日予め張っておいた結界を解くと
シグルドが呆れたように

「いつの間に結界なんて張ったんだよ」
「それは昨日ここから出て直ぐだ」

土蔵の扉を開ける。

瞬間、短剣が俺の心臓めがけて飛んできた
だが俺は避けようとしないう、なぜなら

シグルドが何事も無かったように俺の心臓めがけて飛んできた短剣
をパシッと取った

「ひゅー、怖いねーいきなりこんなもん心臓に投げつけてくるな
んて。マスターが死んだらサーヴァントの俺が現界出来ないだろう
が」

「・・・・・・・・・・」

シグルドは陽気に喋り、ライダーは無言を通している

「俺はお前に危害を加える気はない」

この言葉を聞き始めてライダーが口を開いた

「なら、ここから出してください」

「ほう、気付いたのか」

俺は土蔵に入るなり直ぐに結界を張りなおしていた

「私に何もする気が無いのでしょうか？さっきも言ったとおりここか
ら出してください」

「まあ待て、お前を生き返らせたのは俺だ、普通恩返しをするべき
だろう」

「おいおい、マスター何企んでんだ？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

ライダーがどうするか判断している。さてどう出るか

「では聞きますが恩返しとは何をすればいいのでしょうか」

先ずは質問が来たか、まあこれに答えなければ考えてくれないだろうな

「俺のサーヴァントになれ、そしたらお前の本当の主の元へ返してやろう」

「アナタのサーヴァントに!？」

「そうだ、あの娘の体ではお前を現界させると通常の倍負担がかかるはずだ。だから俺のサーヴァントになり、必要な時だけ呼び出しに答えるだけでいい。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・分かりました。では訊きますがアナタは、私の本当のマスターを知っているのですか？」

「お前の本当のマスターは間桐“桜”だろう？」

「っ————!!」

やはり驚いているな、これぐらい言えば俺と契約してくれるだろう

「で、俺のサーヴァントになってくれるか？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

まただんまりか、と思っていたらシグルドが

「おいおいライダー結構良い条件だと思うぜ？断る気は無いよな？」

余計なことを言ったせいでライダーが睨んでくる

俺は呆れ口調で

「こいつのことは気にするな」
「そうします」

シグルドは拗ねて土蔵を出て行く

「俺は外ぶらついとくから」

そう言つてシグルドは土蔵から出る。あいつには結界が働かないようにようにしてある

仕切りなおして俺はライダーにもう一度尋ねた

「もう一度言うが俺のサーヴァントにならないか？」
「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

沈黙すること数分。ライダーが口を開いた

「良いでしょう。サクラに迷惑が掛からないなら」

ライダーは了承してくれた

「一つ良い忘れていたが。お前、死んだことになってるからな」
「・・・・・・・・え、死んだことに？」

ライダーがまたもや驚いている

「そうだ、だから自分から目立つた行動は慎め」

ライダーは戸惑いながら返事をする

「分かりました」

「じゃあ再契約をするぞ」

今回は能力を使わずにちゃんと詠唱をする

「告げる。」

汝の見は我の下に、我が命運は汝の剣に。

聖杯のよるべに従い、この意、この理に従うのなら我に従え。
ならばこの命運、汝が剣に預けよう」

「ライダーの名に懸け誓いを受けましょう
貴方を我がマスターに認めましょう……」

そういえば名前を言ってなかったな

「俺の名前は蒼緋、明神蒼緋だ」

名前を教えるとライダーは再度言い直した

「ライダーの名に懸け誓いを受けましょう
貴方を我がマスターに認めましょう、蒼緋」

瞬間、ライダーの体が魔力で満たされていく、しかも身長も今までより高くなっている

「これは!？」

「驚くのも無理はないな、俺は無限の魔力を持っているからな」

「無限の魔力!？人間が無限の魔力を持っているなど聞いたことはありません。しかも貴方からは魔力が普通の人間程度にしか感知できません」

「そうらしいな、だが俺の魔力は無限なんだ、そこら辺は覚えといてくれ」

ライダーの口が開いている

「イレギュラーですね貴方は・・・」

「そんなこと言われたのはお前で三人目だよ」

「ふふ、本当の事なんですから仕方が無いでしょう」

• • • • •

「どうしました？」

目隠しをしているがライダーは笑ったら美人だな

「いや、お前が笑ったのを見たのは初めてなのでな。見惚れていた」

俺に言われてライダーは直ぐに冷静な顔に戻した

「コホン、では蒼緋私は何をすれば良いのでしょうか？」

「そうだな・・・」

何も考えていなかった

ライダーをここで普通に生活させるか、もしくは間桐桜の元へ返すか、だが間桐桜の元へ返してもあの爺がいるしな、どうする……

•

•

•

・ ・ ・ ・ ・ 仕方が無い、士郎に頼んで住まわせても

らうか

「お前は一時の間ここで暮らせ」

「ですがここにはセイバーのマスターがいます」

「気にするな士郎に言えばどうにかしてくれるだろう」

「……ではそうします」

これで決まった。

「では士郎の所へ報告に行くか、行くぞライダー」
「・・・・・・・・分かりました」

結界を解いてライダーと土蔵を出ると、結界を解いて直ぐ、いきなり士郎の部屋の隣の障子が勢い良く開きセイバーが武装した状態で出てきた

「なに者です!!・・・・・・・・?」
「どうしたセイバー?」

セイバーは俺の後ろを付いてくるライダーを見て驚愕の顔をする

「いや、なぜライダーがここに?ライダーは死んだはずでは?」
「俺がギリギリで傷を癒して生き返らせたんだ」
「そうですか、でもなぜ貴方とライダーが一緒にいるのですか?」
「蒼緋が私のマスターですから」
「な・・・・・・・・」

今の発言はおかしいぞ、まるで前から俺がお前のマスターみたいな
と言っことになるぞ

「ソウヒ、貴方が・・・・・・・・」
「おーい、どうしたーなんかあったのか?」

ちょうど士郎がセイバーの言葉を遮って居間から出てきた
この状況に気付いていないのか状況確認をしている

「な——！！」

ライダーのことに気付いたらしい。士郎はライダーの姿を確認し、直ぐに戦闘準備に入った

このままだと危ないな士郎とセイバーを説得しなければ

「待て士郎、セイバー、こいつは俺のサーヴァントだ手を出すな」

「蒼緋の？でもそいつは慎二のサーヴァントだったはずだ。それに昨日ライダーは死んだはずだ」

このままだと話を信じてもらえないな

「士郎、飯は作り終わっているよな？」

「あ、ああ終わっているけど」

「じゃあ道場で説明するから来い」

「わ、分かった」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

セイバーはかなり疑っている

道場に入り俺は士郎たちに座るように勧める

「では、何か聞きたいことは？」

士郎

「なんでライダーが生きているんだ？」

「死ぬ前に傷を治したからだ」

セイバー

「なぜライダーがここに？」

「傷を治した後ここに運んだからだ」

士郎

「じゃあライダーのマスターは慎二だったのに何で蒼緋がマスターになってるんだ」

「残念ながらライダーは慎二のサーヴァントじゃない」

「な———！！」

士郎

「し、慎二のサーヴァントじゃない？　どういうことだ？」

「元は違う奴がマスターだったんだが、そいつが慎二にマスター権を譲渡していたんだ」

セイバー

「ではライダーの本当のマスターは貴方なのですか？」

「違う、ライダーとはさっき再契約したばかりだ」

士郎

「再契約！？　って言うことはお前、ライダーの本当のマスターを殺したのか」

「殺した、と言ったらどうする？」

俺は微笑しながら言った

「俺はお前を許さない」

怒っているな、戦闘は面倒くさいからちゃんと置いておくか

「許さなくてけっこう。それと俺はライダーのマスターを殺してなんかない」

士郎は安心したのか、ほっと息を吐く

「他に質問は無いか？」

士郎

「じゃあどうやってライダーと契約したんだ？」

「ライダーとライダーのマスターとの繋がりを切ったからだ」

セイバー

「ではどうやってサーヴァントとマスターの繋がりを切ったのですか？」

「それはまだ教えない」

「……………」

「そう睨むな、どうせ士郎と契約を一時破棄して士郎と契約してパスをつなげ直して魔力供給出来るようにするとか思っていたんだろっ？」

「な———！！」

図星か、まあこの問題は時期が来たら大丈夫だろう

「で、他に質問は？」

士郎

「さっきも聞いたけど何でライダーは生きているんだ？確かに俺はライダーが消える所を見たぞ」

「それは俺が能力で創った偽者のライダーだ」

セイバー

「なぜライダーを自分のサーヴァントにしようとする？」

「ライダーは殺すには惜しいからだ」

この質問の嵐はきついな自分で聞いておきながら面倒になってきたな、ここで終わるか

「これ以上のことはまだ言えない、その時が来たら俺から言っ」

「他にも聞きたいことがあったのですが」

「む——。まだ聞きたいことがあったのに……。ま、本人が後から言っって言ってるんだそれまで待とう」

「そうですねシロウの言うとおりアナタが教えてくれるまで待ちましょう」

これで質問攻めされずに済む

「すまないな」

「いいって、いつか話してくれるんだろ？それならいいさ」
「時が来たら必ず話してください」

士郎とセイバーと一緒に道場を出て居間に向かう

ライダーには大河さんが学校に行くまで道場にいてもらうことにした朝食中は殆ど大河さんの愚痴を聞いて終わった

「じゃあ行つて来るよ」

士郎が学校に行こうとするのを俺は止めた

「待て士郎」

「ん？何だよ蒼緋」

「どんなことがあっても、深追いはするなよ」

俺が何時もより真剣な顔で言つたのを気付いたのか

「分かった、気をつけるよ。忠告ありがとうな蒼緋」

そういつて士郎は家を出て行つた

さてセイバーと鍛錬でもする・・・ちょっと待て

「シグルド」

「へーい」

霊体化していたシグルドが具現化する

「そういえば俺はお前が戦っている所を見たことが無いんだが」

呆れたようにシグルドが

「そりゃ、マスターが戦わせてくれないからだろ」

そういえば、戦場に行つても戦うことは何もしなかったな
これは丁度良い

「シグルド。お前今日、俺の鍛錬に付き合え」

「はあ！？鍛錬ならセイバーに頼めよ」

「残念ながらセイバーは魔力回復中だ、それに俺はお前が戦っている所を見たことが無いからな、丁度いいだろう」

「でもさ」

令呪発動

「俺の気の済むまで鍛錬に付き合え」

令呪が効いたのかシグルドは呆れた声で

「てめえ、令呪が何回も使えるからってせこいだろ」

「何とでも言え、それと言っておくが俺はセイバーと稽古してそれなりに腕が上がったと感じている、せいぜい俺に負けないように頑張るんだな」

シグルドは俺が言ったことに怒ったのか

「上等だよ、やってやらあ。俺が一本でも取られれば令呪を使わなくてもどんな命令にも従う、その代わり俺が勝ったら。俺に自由を約束しろ」

「くくくく、いいだろう」

シグルドと俺は道場に向かった

道場に入ってライダーに声をかける

「ライダー、間桐邸に、あるサーヴァントが来る、戦闘はしないで気付かれない用に監視をしてくれ」

「分かりました」

ライダーは直ぐに間桐邸に向かった
これで準備は整った、後は戦闘に差し支えることが無い程度に鍛錬
するか

「お前、竹刀は使えるのか？」

「俺の剣もそれぐらいの大きさだから使えるけど」
「ほらよ」

シグルドに竹刀を投げ渡す

「くつくつく、これで今までの恨み晴らさせてもらっぞ」

「貴様ごときが俺に勝てると思うなよ」

「蒼緋、サーヴァントをなめんなよお」

構えを取る二人

「いくぞ」

「いいぜどつからでもかかってこいよ」

シグルドがいい終わったとたん。

俺は目にも止まらぬ速さでシグルドの死角に入り、竹刀を横に横薙
ぎする

パン

綺麗に入ったか、と思っていたらシグルドは詰まらなさそうに俺の
竹刀を自分の竹刀で止めていた

「……………ほう。なかなかやるな」

「そうだろ？ やっぱり止めたほうが良いんじゃない？」

「それは無理な答えだ」

言葉を言い終わる瞬間、今度はさっき以上、いや、本気のスピードで死角に入り背後から縦に両断する

ブウン

「———な、に？」

今は俺の最高の攻撃だ、それを奴は紙一重で余裕でかわしていた

「ひゅー、あぶねーなんだ今の？ 全く姿が見えなかったぞ」

こいつ、俺の攻撃をあつさり避けたのになんで余裕なんだ
セイバーよりかなり強いな

「お前、セイバーより強いな」

「だろ？ あいつは自分の魔力と武器に頼って戦っていたからな。この俺みたいは何の能力も使わずに龍種を倒した俺に言わせればまだまだなんだよあいつは」

シグルドはそう言っているが実はこいつは武器のおかげでファールヴニルに勝った筈だ

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

シグルドを疑いの目で見る

「な、なんだよ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

まだ疑いの目で見る

「——っ！あーもうすみませんでした、俺は実際武器のおかげでファーヴニルに勝てました」

俺の視線が痛かったのか土下座している

「分かっているのならいいだろう」

でもこいつはかなり強い

しょうがない、こいつから一本取るには能力を使っしかないな、俺の奥の手は今の身体能力じゃ簡単に避けられるだろう

「おい、今からは能力を使って行くからな」

「おう何でも使って来いよ」

想像しろ

ドラゴンを倒し、ドラゴンの最強の力を得た知られざる天才剣士を俺の体にその剣士の身体能力、戦闘経験を上乘せする

「いくぞ」

俺の身体能力は上がったはずだこれなら——。
今度は死角に入らず正面から打ち合う。

「お、やっと正面から来たか」

「えらく余裕そうだな、だがそれもここまでだ」

シグルドが牽制しようと竹刀を横に振ってくる、そこを――。俺は目に見えないほどの速さで竹刀を下から上に切り上げる。

パン

「・・・・・・・・・・ああ？」

シグルドの竹刀が空を舞う、そして直ぐにシグルドの喉に竹刀を突きつけた

「どうだ、一本取ったぞ」

俺の言葉が聞こえていないのかずっと竹刀を持っていた右手を見つめて呆けている

「く、くくくくく、あーっはっはっは」

何だ？こいつ、いきなり笑い出すとはなぜかむかついてきた

「何故笑う」

俺が怒っているのを気付いたのか、シグルドが笑いを抑えながら言ってきた

「い、いや、だってよ。いきなり身体能力が倍に上がって、今まで俺に一太刀も与えることが出来なかった奴が俺が持っていた竹刀を弾き飛ばすんだぜ？これが笑わずにいられるか」

「何が言いたい」

さつきまで笑っていた顔が真剣になる

「お前の能力を使えば勝てる奴はいないってことだよ」

そんなことは分かっている。でも一応理由を聞いてみた

「なぜそう思う」

「何でも想えば現実に反映されるんだろう。例えば地球を壊すと思えば地球がぶっ壊れる、その能力を使えばそんなことも出来るだろう。それなら誰もかなわねーよ」

確かにそうだな、俺が能力を使えば地球を破壊することも出来ないことも無いのか

でもそんな考えを頭の中で考えているとシグルドは思いつめたように

「でもよ、そんだけ強大な力なんだ、リスクは無いのか？」

「リスク、だと？」

いままで考えたことも無かった

「強大な力はそれなりのリスクを伴うはずなんだ。お前はそういうのは無いのか？」

「考えたことも無かったな」

呆れた声でシグルドが言ってくる

「はあ！？考えたことも無い！？ばかじゃねーの、そんだけ強大な力なんだリスクとして寿命を削るとか、記憶を無くすとか、そういう類の物が必要なはずだ」

「なるほどな、お前は俺に能力を極力使わないようにしろと言いた

いのか？」

「当たり前だ、いいか？絶対とまでは言わないけど、どのようなリスクが伴うか分からない以上むやみに能力は使うな」

「・・・分かった。これから使わないようにするために今から必要なものを永久に俺の体に反映する」

シグルドはどうするが悩んでいるが俺は無視して必要な能力を選び出した

創造の能力はあるな、これは魔力を使って使えるようにするか（なんか投影みたいだな）

相手の魔術や特異な能力を見ただけで使えるようにする能力相手に触れることで記憶の改竄、知識、能力のコピーなどをする

など、さっき俺の体に反映した天才剣士の知識、戦闘経験、身体能力、アンチマジックフィールドを俺に反映させる

そして天才剣士の魔法の師匠の知識や魔法の技能も追加する

これらの能力は必要な時だけ使うようにいつでもオン・オフできるようにする

これだけやれば十分か、俺のリスクがどんなものであるか分かるまでこの能力はここぞと言う時にしか使わないようにするか

「これでいいだろう」

「・・・・・・・・・・」

かなりシグルドが変な目で見ている

「どうした？」

「いや、なんか強そうなものばかり反映してそうだなと思ってな」

「当たり前だろう、実際サーヴァントとはこの能力が使えないと勝てないしな」

「まあ人間がサーヴァントに勝てたら凄いな」

「実際俺に負けただろう」

「――っ」

おいおいかなり悔しそうな顔してるなこいつ唇から血が出てるぞ

「お前はずるして勝ったも同然じゃないか、だから今日のは無効ね」

こいつ……まあいいかこいつが言わなければ能力を使い過ぎてしまつとこだったし、これでチャラにしてやるか

「そうだな、お前が言わなければ能力の使いすぎで俺の身になにかが起こるかも知れなかったしな。まあ、リスクは分からないままだが」

「出来るだけ早くリスクを見つけるよ。じゃないと俺が面白くない」

面白くないと、来たか

「まあ何れ分かるだろう」

「俺はお前の能力が面白いから契約してるんだぞ？早くリスクなしで能力を使えるようになってもらわないとな」

腹が鳴った、そろそろ昼飯か

「この話は後にして昼飯を食うぞ、夕方に、あるサーヴァントと戦闘するかもしれないからな」

俺の能力について考えていた時より顔がかなり輝いている

「マ、マジ？」

シグルドの顔の輝きがだんだん強くなっている。
それほど戦いたいのかこいつは

「ああ、そうだ。でも敵を殺すなよ。」

「へ？なんでだよ」

俺は笑いながら答えた

「今回喧嘩を売るサーヴァントはプライドが高いからな、一度ボコボコにして逃がしてやるんだ。そして二度目があったらその時の戦闘も同じことをするぞ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

俺の笑った顔を見てシグルドは絶句している

「ん？どうした？何か言いたいことがあるならはつきり言え」

「えーと、なんかお前の笑い顔がかなり怖い」

そうか？普通に笑っているつもりなのなんだが

「これから面白い事をするんだ、笑わずにはいられんだろう」

クックククと笑いながら俺は言う

「・・・・・・・・ちよつと俺、戦闘するまで休んでるから」

シグルドは霊体化し衛宮邸を出て行った

「さて、俺も休んでおくか」

夕方まで自室で仮眠を取る

夕方、目が覚めて布団から出る

「シグルド」

「へーい」

ちゃんと戻ってきたみたいだな

「行くぞ」

「りょうかい」

シグルドと俺は間桐邸に向かった

と、間桐邸付近の物陰に隠れている士郎と遠坂がいた
俺は二人を観察しながら間桐邸の坂をちよつと下った道の真ん中に
いる

丁度、間桐邸の前にいた奴が坂を下りて来る

俺もそれに合わせて坂を上る

奴と目が会う

目が合って俺と奴、ギルガメッシュは止まる

「よお、英雄王」

第九話 ギルガメッシュに屈辱を・・・（前）（後書き）

駄目な所などがあつたら教えてください

あとアドバイスも（・・・）ノヨロシク

第十話 ギルガメツシュに屈辱を・・・（後）

「よお、英雄王」

「誰だ貴様、王の前に立ちはだかるなど無礼にほどがあるぞ雑種」

「なに、お前がここにいたからな景気づけにぶっ殺そうかと思つてな」

「ほう、我を殺す？クククク、ハハハハハ。侮るなよ小僧、人間ごときが我を殺そうなど無理に決まつておろつ、さあ道を明ける」

「無理な事を言つな」

俺とギルガメツシュは睨みあっている

「しょうがない、貴様の連れているサーヴァントもろとも殺してくれるわ」

ギルガメツシュの背後の空間が歪み百近くの宝具が出現する、奴はそれを全て打ち出してきた

「シグルド！！」

「任せろ！！」

具現化したシグルドが打ち出された宝具を悉く全て叩き落した

「貴様！？」

ギルガメツシュが百近く放った宝具を難なく叩き落したシグルドを睨んでいる
でもシグルドは・・・

「おゝ流石人類最古の王、俺の剣もちゃんと持ってたじゃん」

とシグルドは自分が持っている剣、グラムと同じものを叩き落した剣の中から取った

「同じ宝具がこの世に二つあるなんて珍しいから、これは俺がもらうな」

「貴様、私の財宝を盗むとは良い度胸だな」

「え？だってお前この剣使いこなせて無いじゃん。なら使いこなせてかつ担い手の俺が持っておくほうが良いだろ？そんなこともわかんねーの？」

「貴様、あまり調子に乗るなよ」

ギルガメッシュは見るからに怒っている

「あんまり怒らないほうが良いぜ、ストレスの溜まりすぎで禿げるぞお前」

笑いを堪えながらシグルドは挑発しまくる

「もういいだろう、そろそろアレを使ってくるぞ」

まだ挑発を続けたかったのかちょっと拗ねた顔をする

「分かったよ」

「シグルド、お前の本当の力見せてもらっぞ」

シグルドは一瞬だけ驚いた顔でこっちを見て何かを呟くと直ぐにギルガメッシュの方を向いた

「行くぜ、英雄王！！」

愛剣グラムを両手に持ち二刀流でギルガメッシュに突っ込んだ

「ふっ、侮るなよ雑種ううう！！」

さっきの倍の剣が放たれる

「“栄光と破滅の魔剣” グラム ！！」

多分真名開放をしたのだろっ、剣を膨大な魔力が包み虹色に輝いている

ギルガメッシュが放った宝具を二本の最強の魔剣で叩き落さず切り落とした

かなり切れ味が上がっているな、これなら……

「な——！！」

ギルガメッシュが放った宝具を切り裂いた二本の魔剣を驚きの目で見ていた

するとシグルドはいきなり笑い出し

「く、くくくくくくくく、あーっはっはっはっは。最高だ、今までは魔力が少なくて出来なかったけど、無限の魔力のおかげで俺はまた最強に一步近づいた」

シグルドが笑っているのが気に入らないのか、またさっきの倍の宝具を放ってきた

「死ぬが良い、雑種ううう！！」

「死んでたまるかこの野郎」

ギルガメツシュの宝具をまた切り落とす。

無限の魔力のおかげで宝具が宝具を切ることが出来るのか？

「どうした、どうした？これで武器の貯蔵が無くなったのか英雄王」
「くっ侮るなよ雑種！！」

するとギルガメツシュは背後から乖離剣を取り出した

「シグルド！！」

「わーってるよ」

俺はかなりの魔力を使い結界を張る

シグルドはさらに魔剣に魔力を注ぐ

ここに来る前一応計画を立てていた。だがそれはグラムが一本の場合だ、今はグラムが二本ある。

一本なら乖離剣を“切る”ことが難しいが二本なら“切る”ことが出来る。

だがその計画が成功するかどうかまだ分からない、何故かと言うと失敗すれば手元にあるグラムが壊れて“壊れた幻想”ブローケンファンタズム が起きてしまう

が、ギルガメツシュに屈辱を与えるがこれは実験も入っている

「こっちは準備できたぞ」

「こっちもOK！！」

この結界内ならば周りに乖離剣の被害は出ないはずだと、間髪いれずにギルガメツシュが乖離剣を振る

「天地乖離す、開闢の星！！ エヌマ・エリシュ」

魔力が許容量以上込められたせいか、二本の虹色に輝く魔剣は先ほどまでより輝きが増している

「うおおおお！！」

シングルが二本の魔剣を交差するように斜めに一閃する

ヒュン

乖離剣から放たれた魔力の渦がグラムから放たれた魔力の刃に四等分に切り裂かれ、真っ直ぐだった軌跡が様々な方向に散り結界に当たる

「——っ！！」

エヌマ・エリシュが四等分にされたとは言え全て結界に当たったんだ、腕に無数の傷がつくぐらい、直撃するよりまだ

「流石じゃねーかギルガメッシュ。俺、冷や汗出まくりだったぞ」
「貴様等」

自慢の剣の一撃が格下の宝具に切り裂かれたんだ、さぞかし屈辱的だろうな

「それぐらいでいいだろうシングル」

「え？これからじゃねーか」

「これぐらいで“見逃してやれ”」

“見逃してやれ”の部分強調する

「――貴様等あ！！」

俺の言葉に怒ったのかギルガメッシュが先ほど以上に怒っている

「まだ、すんのかよ、負けを認めたらどうだ？」

「跡形も無く消し去ってくれるわ」

「まだそんなことを言うのか、しょうがない…………ライダー」

腕を上げ指を鳴らす、と同時に上空から声が聞こえた

「騎英の手綱　ベルレフォーン　！！」

この不意打ちにギルガメッシュは対応し切れていない

「この、雑種どもがああ！！」

「おお～すげ～」

そう叫ぶとギルガメッシュはベルレフォーンの光に包まれた

ちゃんと手加減してたよなライダー、見るからにかなり手加減何し
見えただが

ライダーが此方に戻って直ぐに訊いてみた

「ライダー」

「何でしょう」

「ちゃんと手加減したか？」

「はい、しましたが」

とベルレフォーンで出来たクレーターの中からギルガメッシュがボ

ロボロの状態で出てきた

「ぐ、き、貴様等あ」

これぐらいで十分か、もう奴は動くことは出来ないだろう。
結界を解く、戦いで破壊されたところが結界が解除されたと同時に
修復される

「ライダー、シグルド」

「なんだ？」

「はい」

「帰るぞ」

俺はギルガメツシュに哀れみの目で見てその場を立ち去った

一応士郎と遠坂も結界内に入れ、二人を結界で包み怪我をしないようにしておいたから大丈夫だろう、それと一応ギルガメツシュに八つ当たりされないように衛宮邸に転移させるか。

魔法を使い、士郎と遠坂は玄関前

俺たちは縁側に転移した

「ったくよ。もうちょつとあいつと戦いたかったな」

「そういう俺のおかげで宝具の活用法が一つ増えただろ」

「でも・・・」

「蒼緋」

シグルドの言葉を遮りライダーが俺の名前を呼ぶ

「何だ？」

「先ほどの男、見たことがありますあの男は一体何者ですか」

「前回の聖杯戦争の生き残りだ」

「――！！」
「へえー」

ライダーは驚き、シグルドは興味が無いらしい

「前回の生き残りとは、やるねーギルガメッシュ」
「・・・・・・・・・・・・・・・・」

シグルドはギルガメッシュに興味を持ったのか目が輝いている
と玄関の方から士郎と遠坂が近づいてきた

「よお、士郎と遠坂の嬢ちゃん、俺の活躍どうだった？」
「・・・・・・・・・・・・・・・・」
「え、あ、いや凄かったぞ」
「・・・・・・・・・・・・・・・・」

士郎はシグルドの返事をしたが遠坂とライダーは睨みあいをしている

「ちょっと、蒼緋君」
「どうした？」

遠坂は怒った顔で俺を睨んでいる

「何でライダーがここにいるのよ」
「・・・・・・・・士郎には話をしたんだがな。聞いていないのか？」
「聞いてない！！」
「えっ！？言つてなかったっけ？」
「だから聞いてないわよ！！」

遠坂が凄い剣幕で叫ぶ

「ちゃんと話してやるから、まずは落ち着け。確か遠坂家の家訓には“常に優雅たれ”みたいなものがなかったか？」

遠坂はそれを思い出したのかいきなり落ち着きを取り戻し、再度訊ねてくる

「じゃあもう一度聞くな。ライダーが何で生きてここに居るのかしら？」

よしこれぐらい落ち着いたら話を静かに聞いてくれそうだが、話の途中で怒ったら面倒だな

「だが教えるには条件がある」

「・・・いいわよ、教えてくれるんなら。で、条件ってなに？」

「俺が話し終わるまで怒って暴れたりするな。それが条件だ」

遠坂がプルプルと震えている

「私はそんなに短気じゃないわよ!!」

・・・怒ってるじゃないか、話すのが面倒になってきた

「じゃあ話してやるから道場に来い」

「え？居間で話せばいいじゃない」

分かってないなこいつは

「何時大河さんが帰ってくるか分からないからな、話を聞かれれば何かとまずいだろっ？」

「……………それもそうね」

遠坂の同意も得たし道場に行くか

「おい、士郎」

「ん？なんだ蒼緋？」

「お前も一応来い」

「いや、俺は晩飯作らないと……」

「お前は道場が跡形も無く消えても良いのか？」

この言葉を聞き士郎が唾を飲む、俺が言った言葉の本当の意味を分かってくれたのだろう

「了解、遠坂がもし暴れたら本当にそうなりかねないからな」

と、道場の玄関前にはいつの間にか遠坂が居る

「何してるの？早く入りましょう」

遠坂に促されて道場に入った

「じゃあ、話してもらいましょうか」

それから俺は簡単に説明をした

——二十分後

「はあ、本当にありえないわねアナタって」

「そうか？普通だと思っが」

「いや、普通じゃないだろ」

士郎のすばやいツツコミが俺を襲う

「俺が普通じゃない、と？」

「うん、確かに普通じゃないわね。だってその能力絶対何かリスクか代償が必要でしょ？」

ライダーのことは無視して俺の能力の異常性に気付き早速質問してきたか

「まあ、それが分かれば俺も苦労がしないんだが」

遠坂が呆れたように言うてくる

「それが普通じゃないのよ。だってそんな能力を使ったら体のどこかに異変が起きて直ぐに分かるはずなのよ、それなのに蒼緋は体の何処にも異変がない。これを普通だなんて言えないわよ」

ちよつとまで今の言葉の内容に違和感を感じたぞ

「遠坂」

「ん？なに？」

「お前は何時の間に俺を呼び捨てで呼ぶようになったんだ」

「あー、なんか自然にそうなったみたいね。だって呼び捨てでも違和感無いもの」

士郎なら居候させてもらってるから良いとして年下から呼び捨てとは……

「俺は一応お前より歳上なんだが」

「え！？そうなのか？俺そんなこと初めて聞いたぞ」

「え！？同じ年かと思ってた」

ちよつと待て二人して最初がハモツてたぞ、遠坂は良いとして、士郎、お前は確か召還の日に知ったと思うんだが

「まあ、その話は置いて、そろそろ大河さんが帰ってくる。遠坂はもう帰ったほうが良いぞ」

「そうね、じゃあ私は帰るわ。またね衛宮君、蒼緋」

「じゃあな」

「おう、またな」

遠坂が道場を出た瞬間、魔法で転移させた

「さて、晩飯が出来るまでシグルドと鍛錬するから、出来たら呼んでくれ」

「了解」

士郎は道場を出て行き晩飯を作りに行つた

さて、晩飯が出来るまで三十分ぐらいか、それぐらいで十分だな

「シグルド」

「あいよ」

よく思えばこいつは俺が気付かないうちに霊体化してるな……まあそんなことはどうでも良いか、今は一秒でも時間が惜しい

「鍛錬するから付き合え」

「えっ、またかよ」

シグルドが面倒くさそうに言うてくる

「お前に選択権などない」

「ひでえ」

竹刀をシグルドに投げ渡す

「今日は俺の奥の手の一つを使わせてもらっぞ」

ちょっと興味が出てきたのかシグルドのやる気が上がった

「よし、じゃあ始めようぜ」

道場の真ん中に行き、竹刀を構える

シグルドに殺気と剣気を放ち牽制する

「ん、心地よい殺気と剣気だ」

こいつ、本気は出していないが普通の人間ならもう失神しているのにな、英霊はいいな

「いくぞ」

「どーんと来い」

俺は奇襲は使わずに真正面から打ち合う

「おいおい、珍しいな真正面から来るなんて」

「たまには良いだろ」

俺の竹刀は全て受け止める、避けられ、弾かれたりした

「お前、意外とサーヴァント中最強なんじゃないか？」

「いや、それほどでも。でも俺より強い奴なんて他にも結構いるだろ」

「居るとしても十人も居ないだろうな」

「なんで？」

「俺が能力を使わずに戦ってもセイバーには何とか一太刀は当たるだろうが、お前には一太刀も当たる気がしない」

シグルドが驚いた顔をしてこちらを見ている

「なんだ？」

「いや、お前本気出してないのに、俺に一太刀も当たる気がしないってどういうことだよ」

本気を出していない？まさか俺はいつも本気だ

「何でって武器が竹刀じゃなくて刀なら俺に一太刀あびせることが出来るだろうに」

こいつ何時もは馬鹿なのに戦いにおいては天才だな

「何故俺が使う武器が刀だと？理由を言え」

「何故ってそれは足運びや太刀筋、戦い方を見て刀だと思ったからだよ」

本当に戦いは天才だな

俺たちは喋りながら竹刀を振るう

「そろそろ、さっき言ってた奥の手を見せてくれよ。もうまでねー」

ぞ」

あと五分ぐらいで晩飯が出来るか、じゃあそろそろ
正眼の構えを取り、シグルドから三メートル近く離れている
これぐらいの距離なら丁度いいな

「いくぞ」

「おう、こいこい」

俺はシグルドに『るる剣』の九つの斬撃放つ突進術を仕掛ける

「九頭龍閃!!」

「おわ!!」

全ての斬撃、突きをかわされた……
でも今の感触は

「あぶねー、かすったぞ今」

シグルドの来ているＴシャツが破れている
多分最後の突きが当たったんだろう、だが信じられないから一度訊
いてみる

「当たったのか？」

嬉しかった今まで自分の力だけでこいつにかすることも出来なかつ
たのに

「今のはやばかったな、お前能力使っただろ？」
「使ってないぞ」

「はあ！？嘘だろ？警戒してたのに反応が遅れたぞ」
「反応が遅れた？」

どういうことだ能力を使ってもかすりもしなかったのに何故最後の突きが当たった？

「シグルド、お前手加減なんてしてないよな？」
「するか！！俺は鍛錬でも本気は出すほうなんだ」

ということは……こいつはただ単に「突き」を使ってくる敵とあまり戦ったことが無いから慣れていないのか

「お前、突きを使ってくる奴と戦ったことはあるか？」
「うゝん……あつ！！」

シグルドは何かを思い出した用に

「ない！！」
「やはりな」

これで合点はいった、だから俺の突きが当たったのか

「これからは突き主体で行くかぞ」
「それはいい俺の鍛錬にもなるからな」

道場に士郎が入ってくる

「おい蒼緋。飯出来たぞ」
「分かった、今行く」
「それじゃあ、俺は後から食いに行くから」

シグルドは道場の真ん中で胡坐を掻き精神集中する

俺は士郎と道場を出て居間に向かった

――― 食事が終わり食後のお茶を飲んでいる

「ねえねえ、セイバーちゃん、なんか士郎セイバーちゃんに師事してもらってからかなり腕上げたよね？もしかして向こうではかなりの達人？」

「いえ、シロウは私とは違う者から師事を受けているのでそのおかげで腕が上がっているのでしょう」

「えゝ士郎二股はいけないよ？」

「本人には自覚がないようですが。まあ結果が良いので黙認する事にしました。しかもシロウは体が出来上がっているので、体を巧く動かす思考と戦法があれば直ぐに強くなります」

「あ、セイバーちゃんわかってるじゃない。そうそう、士郎はずっと鍛えてきたんだから、体はしっかりしてるのよ。今まではね、本人にやる気が無かったただけなんだからから」

セイバーが感心している

「体を鍛える、確かにあのような道場があつたのなら、鍛錬にも身が入りましょう。それに大河と言う良い対戦相手がいたのですから、素質が無い筈がない」

感慨深く頷きつつ、湯飲みを口に運ぶセイバー

だが大河さんは思い出したように

「でもね、あの道場で士郎が剣道するのは久し振りだよ。セイバー

ちゃんが来るまであそこは剣道場じゃ無かったんだから」

パリン、と煎餅を食べながら、呑気に大河さんは訂正する

「あそこが剣道場じゃなかった？」

士郎をセイバーが意外そうに見つめている

「え？まあ、親父が死んでからは使わなかったからな」

それからはセイバーが士郎の昔の事を大河さんに聞いている
士郎の性格が昔から変わらないことなど結構聞いた

話の途中セイバーは何を思ったのか士郎に訊ねた

「シロウは何故正義の味方なのですか？」

士郎はいきなりの質問に普通に答える

「——いや。何故って訊かれても困る。単に憧れてるからじゃないか」

「憧れている・・・その、正義の味方に？」

「・・・ん・・・まあ、そうだけど」

士郎は照れながら答えていた
そこをセイバーが追い討ちをかける

「それは、どうして？」

「どうしてって、それは」

士郎は答えようとしたがいきなり、無口になった

「・・・シロウ？」

士郎はセイバーに名前を呼ばれて気が付き

「わるい、先に部屋に戻るよ」

逃げるように居間を出て行った

俺は士郎を追う

「俺も先に部屋に戻る」

二人は一瞬こちらを見たが直ぐに会話を続けた

「士郎」

「ん？どうした？」

「お前、逃げただろ」

「な・・・」

図星なのか驚いている。

「ち、違う俺は！！」

「セイバーに見つめられると何かが剥がれ落ちそうで怖かったんじゃないのか？」

士郎は先ほどよりかなり驚いている

まあ、無理もない俺はFateの全ルートをクリアしてるからな、考えていることは大体分かる

「なんで、それを？俺そんなこと口にしたか？」

「いや？ただそう思ったただけだ」

俺はそう言い、自室に戻った

「明日は葛木に仕掛ける日か、先回りして俺が葛木と戦おう」

明日は楽しみだ、だが葛木は殺さないようにしなければ、殺さなければキャスターが傷を癒してくれるだろうし、ギルガメッシュも魔力を使えば体の傷を直ぐに癒せるだろう。

出来るだけ本編に沿って聖杯戦争を進めないとな、まあ本編からもし外れたら、それで頑張るしかないだろう

俺は布団に入りそんなことを考えながら寝た

第十一話 朽ち果てた殺人鬼

朝。

いつもと同じように、朝飯を食べ、士郎を見送る。

今日は葛木と戦うために、シグルドと素手で訓練するか。
玄関から居間に向かう。

寝転がりながら、朝のニュース番組をシグルドが見ている。

「シグルド」

「なんだ？また鍛錬でもするのか？」

「ああ、でも今日は素手での鍛錬だ」

「素手！？」

驚くのも無理はない、シグルドのクラスはセイバーだ、素手での戦いなど経験は少ないだろう。

でもサーヴァントの身体能力なら葛木と同等、までは行かないだろうが、それに近い速さの拳を繰り出してくるはずだ。

「今日は俺が、ある男と戦うんでな。しかもそいつは素手なんだ、此方も素手で行くのが礼儀と言うものだ」

「・・・・・・・・」

シグルドがなぜかジト目で見てくる。

「どうせ、相手の得意なもので負かして自信喪失させる気だろう？」

こいつ、俺をどう思ってるんだ？

「残念ながら今回は、俺の見たことが無い武術を見ることが出来るのだからな、そんなことは考えてはいない」

クックククと笑いがこぼれる

それをまだシグルドがジト目で見ている

「時間が惜しい、早く道場に行くぞ」

シグルドは呆れ口調で返事をする。

「へいへい」

葛木の“蛇”はかなり早く、死角から拳が来る、これに耐えるためにサーヴァントの化け物じみた身体能力から出される拳をひたすら避ける訓練をしなければ、俺など数秒で倒されるだろう。

それに今回は、永久に反映される能力をオフにして戦うからなおさらだ。

シグルドと居間を出て道場に向かう。

道場の中に入ると道場の隅に、セイバーが正座をしていた。

俺たちが入ってくるのに気付いたのか、セイバーは目を開ける

「今日も鍛錬のですか、蒼緋」

「ああ、だが今回は素手での鍛錬だな」

「素手、ですか？」

セイバーも先ほどのシグルド同様に驚いている

「俺もこの頃、剣術ばかりやっているのにな、そろそろ、体術も鍛錬しなければ鈍ってしまう」

「そうですね、どんな事も鍛錬を怠れば鈍るでしょう」
「・・・・・・・・・・・・・・・・」

セイバーは感心しているがもう一人・・・・シグルドは何か言いたそうに、こちらを見ているいる
俺は邪悪な笑みで尋ねた。

「どうしたシグルド？なにか不満でもあるのか？」

シグルドは危険を察知したのか、言おうとした言葉を出さずに・・・

「今回も、気の済むまま相手をさせていただきます」

綺麗なお辞儀をしながら言ってきた。

「ふむ、分かってるならよろしい」

俺は偉そうに返事をする。

「前座はここまでだ、そろそろ始めるぞ」

綺麗なお辞儀をしているシグルドを無視して、道場の真ん中に行く。
それに続いて、お辞儀を止めて愚痴りながら此方にシグルドがくる。

「セイバー」

「はい、何でしょう？」

いつの間にか正座しているセイバーに開始の合図を頼んだ

「開始の合図を頼む」

「分かりました」

道場に、静寂が走る。

セイバーの手が上がり、一気に下に下げる

俺とシグルドは始まりと同時に右ストレートを相手の顔面に向けて放つ

ヒュッ

二人とも紙一重で拳を避ける。

でも、俺の頬には一筋の赤い線が刻まれている。

「おい、もうちょっと力出していいぞ」

「りょーかい」

さっき俺がシグルドのパンチを避けることが出来たのは、あいつが、本気を出していないからである。

本気で相手をしてもらってれば、俺は数秒で気を失っているだろうと、いきなり右側頭部に蹴りが放たれた

ブウン

豪快な風切音と、ともに俺の髪が床に落ちる

シグルドは呆れたのか、それとも、感心しているのか分からない口調で言ってくる

「これ避けんのかよ」

シグルドの攻撃は早い、だが大振りだ。

さっきの蹴りなんて、サッカーボールをダイレクトボレーするみたいに繰り出してきたからな、もうちょっとコンパクトにすれば、避けることは先ず無理だろう

「動きが大きいんだよ、やるならこういう風に……」

シグルドの右側頭部にノーモーションで筋肉をフルに使った蹴りを放つ

「コンパクトにするんだ!!」

ビュッ

俺の蹴りは見事にかわされた、だが俺と同様髪の毛を少し切られている。

「何だ、今の!?この俺が反応が遅れた?」

「お前のはさっきも言った通り、動作が大きいんだ」

「動作が大きい、か。なら、これでどうだ!!」

さっき俺が放った蹴りを真似たのか、ノーモーションで筋肉をフルに使った蹴りを放ってくる。

やばい、想像以上に……

何時の間に気絶していたのか、道場の隅で寝ていた俺は目を覚まし

た。

「お、やっと起きたか」

「ふう、心配しましたよ。蒼緋」

頭が上手く働かない、しかも平衡感覚も麻痺している

「俺は、いつたい・・・？」

上手く働かない頭で目が覚める前の記憶を思い出す

先ず、葛木と対等に戦うために、素手で戦う鍛錬をシグルドとやっていた。

そしてシグルドの攻撃を防いだり、避けたり、防戦一方の状態だった。

それでシグルドの止めと言わんばかりの、右側頭部に大振りの蹴りを放たれて、それを紙一重でかわし、俺がコンパクトにお返しと言わんばかりにシグルドの右側頭部に蹴りを放つ、が、避けられて、俺の蹴り方を真似したシグルドの蹴りを・・・

「そうか、俺はお前の蹴りで・・・」

「すまん、手加減はしたつもりなんだけど、ちょっと楽しくなってきた力を入れすぎたみたいだ」

「はあ、シグルドには呆れて何も言うことがありません」

セイバーは呆れたように肩をすくませる

「——っ！！」

俺は起き上がろうとしたが、激しい頭痛がする

「大丈夫ですか蒼緋！！」

「あちゃー、まじで力入れすぎたみたいだな」

俺は何とか立ち上がり、壁に凭れる

「これは、激しいな」

立ち上がった後も、平衡感覚がまだ麻痺しているせいか、まともに歩けない

「そういえば、俺はどれくらい気絶してたんだ？」

「二時間ほどです」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

シグルドは申し訳なさそうに無言で正座している

「気にするなシグルド、さっきのは俺の不注意だ」

その言葉を聞き、一気に顔が明るくなった

「いや、流石蒼緋！！その心の広さが半端じゃない！！」

「・・・・・・・・やっぱり許すのは止めよう、直ぐにいつもの調子の戻られては、流石に俺でもキレル」

「だが今夜、俺の用事が終わったらどうなるか覚悟しておけ」

さっきまで明るかった顔が一気に青ざめていく

「そ、そんなあゝ」

と、こんなことをする暇は無い。

俺は直ぐに魔法の知識をオンにして、治療系の魔法を使う。
流石魔法だな首の痛みと、麻痺していた平衡感覚が一瞬にして治る

「よし、これでいいか」

シングルとセイバーの二人は口を開けて、此方を見ている

「どうした？何処か変な所でもあるか？」

「い、いや。変な所なんてないんだが……」

「今の、魔力の流れ、魔術回路無しで、魔術を使いましたね？」

そういえばそうだな、この魔法の知識を持つ人？は魔術回路なんて
持って無いからな、というより、そいつがいた世界は、魔術回路じ
たい存在し無い

「それがどうした？セイバーには言ったと思うが、俺はこの世界の
人間じゃないから、魔術回路は無いはずだから、魔術は使えないと
思う。

それに今使ったのは、魔術ではなく、魔法だ」

俺の言った最後の言葉で、二人がまた口を開けて固まっている

「でも、神の能力を与えられたのだから、それぐらい出来てもおか
しくは無いでしょう」

「そうだよな。それぐらいで驚いていたら、お前のサーヴァントは
勤まらねえな」

固まっていた二人はいつもの調子を取り戻し、納得していた

「まあ、それは置いといて。シグルド、続きだ」

「わぁーっ たよ」

それから俺たちは、昼飯を食わずにぶっ通しで、夕方まで鍛錬をしていた

「ぜえ、はあ、はあ、はあ、はあ」

「これぐらいにしようぜ、戦いに支障が出る」

「はあ、はあ、そうだな、飯でも、はあ、食うか」

ここまで疲れるとは思いつかなかった

やはり、休み無しの鍛錬はかなりきついな

俺はシグルドに居間まで背負ってもらった

「ど、どうしたんだよ蒼緋！？体に痣が大量に出来てるぞ」

居間には帰ってきたばかりの士郎が居た

「シグルドと、素手で鍛錬をしていたら夢中になってな、朝から今まで休み無しでやっていた」

「や、休み無しでって、凄いな」

士郎は驚いているのか、感心しているのか、どっちか分からない顔をしていた

「士郎、悪いんだが、晩飯を作ってくれないか？昼飯を食ってないんで腹が減った」

「え！？俺ちゃんと昼飯作ってたはずなんだけどな？」

「シロウ・・・・・・・・」

セイバーが申し訳なさそうに士郎に声を掛けた

「どうしたセイバー？」

「いえ、その、あのですね」

「俺の食欲が無くなってセイバーに食ってもらってたんだ」

実際、食う暇が無いからセイバーに食ってもらったんだがな

「それより傷を治さなければ、俺は部屋に居るから飯が出来たら呼んでくれ」

「ん？ああ、わかった」

居間を出て自室に戻る。

部屋に入って直ぐに胡坐を掻き、魔法で傷を癒す

「ふう、これでいいか。魔法のおかげで体力も回復したし、これなら多分葛木に勝てるかもしれん」

だが実際、付け焼刃の訓練じゃ、直ぐに俺は負けるだろう。

その時は、身体能力を上げるだけだ、この能力をオンにしたら英霊でも勝てないだろう。

それから俺は何も考えず、飯が出来るまで座禅をする

気付いたら、いつの間にか晩飯を食い終わっていた。

士郎は晩飯を食った後、セイバーと一緒に直ぐに木刀を持って家を出て行った

俺は聞かなかったが、どうせ葛木がマスターかどうか仕掛ける気なんだろう

「さて俺も出かけるか」

居間には俺とシグルドしか居ない

「俺も戦いてーよー」

「だだを捏ねるな、今日の相手は只者じゃない、お前はその体のおかげでダメージは無いだろうが、これが普通のサーヴァントなら死ぬかも知れないってぐらい、強いな」

「へえー、やるじゃんそいつ」

こいつにファークヴニルの血の恩恵が無ければやられているだろうな

「行くぞ」

「りょーかい」

衛宮邸を出て直ぐライダーが目の前に現れた

「葛木は？」

「はい、先ほど学校から出ました」

「分かった。それとライダー、お前はこの間のように、俺の指示が出たら直ぐに動けるようにしとけ」

「分かりました。では監視に戻ります」

そう言つて、ライダーは霊体化していなくなった

「何時の間に、ライダーに指示してたんだよ」

「今日の、朝に頼んでおいた」

「でも、あのキャスターだぜ？直ぐに気配に気付くぞ」

「大丈夫だ、この前からライダーには令呪で、監視のさいは気配を完全に断て、と命じているから見つかることは先ず無いだろう」

「用意周到だな、おい」

シグルドは、呆れながらも感心している

「さあ、もうそろそろだ、先回りして仕掛けるぞ」

「りょーかい」

俺は身体能力向上をオンにして跳躍する

「おゝ、俺も負けらんねーな」

俺に続いてシグルドも跳躍する

「居た」

「お、早いな」

早速、士郎たちと戦闘しているな

「おいおい、マスターここは助けたほうが良くないか？」

「大丈夫だ、葛木がこの場から去るときに結界を張り、逃げられないようにする」

「なんで、んな面倒な事すんだよ」

「それは、教えられない」

出来るだけ本編に沿って進めないとな

「ほら見てろ、士郎が面白いことするぞ」

「士郎が？」

シグルドは興味が無くてずっと夜空を見上げていたが、俺の言葉を聞き士郎を見ている

丁度、士郎が投影をする所だ

「おおー！！あれってお前の“創造”と似てるな」

「似てはいるが、アレは所詮複製だ」

「アレが複製か、宝具をあそこまで複製するなんて、普通は無理だろ」

「そうだな、士郎が“普通”ならな・・・」

「その言い方、士郎が普通じゃないってことか？」

シグルドと話している内に、キャスターはマントを翻そうとしていた。

「話は後だ・・・」

急いで結界を張り、出入り不可能にする。

「これは一体!？」

キャスターは空間転移しようとしたが、この結界のせいで逃げられなかった

俺は今居る場所から、士郎たちの目の前まで跳躍する

「久し振りだな、キャスター」

キャスターは突然の乱入者の驚きつつも、冷静さを装っている

「そう、この結界はアナタの仕業ね？」

「ほう、良く分かつているじゃないか」

この会話の最中セイバーが、葛木を殺そうと動く

「シグルド、セイバーを止めろ」

「あいよ」

シグルドはセイバーを羽交い絞めにする

「はいはーい、大人しくしようね」

「く、何故邪魔をするのです！！今ならキャスターを倒せていたのに！！」

「俺はキャスターを倒すために来たわけじゃない」

俺は視線をセイバーから葛木に向ける

「ん？私に何か用か？」

「ああ、そうだ葛木宗一郎、俺はお前の“蛇”に興味がある」

葛木の表情が、ほんの少し変わった

「……………何故、貴様が“蛇”を知っている？」

「それは、俺が“組織”の人間だからだ」

この嘘で葛木の表情がまた少し変わった

「くくくく。そんなもの嘘に決まっているだろう」
「・・・・・・・・・・・・・・・・」

葛木は俺を無言で睨んでくる

「だが、お前ら“工場”で作られた“道具”は暗殺に成功したら自害する筈だろ？だがお前は生きている。暗殺するターゲットを事故の様な形で殺害してしまい、唐突な出来事に自害も出来ず目的を失い、この町にきた、なんと無様なことだ」
「お黙り！！！！」

俺が葛木の事を喋っている時、キャスターはキレて俺に、かなり魔力を込めた魔術を放ってきた。

ドオン

キャスターの魔術が直撃する、が俺にはアンチ・マジック・フィールドがある。

その魔術はフィールドに吸収され、俺の魔力に還元される

「な！？」

「え！？」

「なんと！？」

「く！？」

「・・・・・・・・・・」

上から遠坂、士郎、セイバー、キャスター、葛木。

葛木以外は、驚きの余り固まっている、だがそれには例外も居る

「うひょー、すっげーな今の」

シグルド一人だけ気楽に感心している
まあそんなことは置いといて

「話を戻そう、葛木宗一郎、さっきも言ったとおり、お前の“蛇”
には興味がある、俺と手合わせしてくれないか？」

俺の突然の提案に、またも葛木以外は驚いている

「……………いいだろう、キャスター、手を出すなよ」

「……………はいマスターのご命令ならば」

キャスターは葛木の後ろに下がる

「では、始めようか。っとその前に、俺も魔術と武器は使わないで
戦うから、拳の強化は解除しろ」

「……………キャスター」

「分かりました」

葛木の拳の強化が解除される

「それじゃ、始めるか」

「……………」

俺は近くに落ちていた小石を広い上空に投げる。

「……………」

「……………」

小石が落ちるまで、俺と葛木は相手に殺気を放つ

カッン

葛木の体がぶれる

ヒュ、ヒュン

襲い掛かってくる“蛇”を紙一重で避ける。
避けても直ぐに、それは急所を的確に狙ってくる

「チィ!!」

こんなものを避けるセイバーは化け物か!!
シグルドの時と同様、防戦一方になる

このままだと、何も出来ずに終わってしまう。
なら……

俺は頭をガードし、胴体のガードを諦める
すると、葛木は頭を狙っても無意味だと悟り、胴体の急所ばかりを
攻めてきた

「ぐう!!」

胴体はきついな、もう三本は逝ってる
だが、何度も同じ所を殴られれば、嫌でも攻撃が何処に来るのか分
かるようになる

ガシッ

葛木の左手を掴む

「捕まえたぞ」

「む、やるな。だが」

葛木の右腕が動く

俺は葛木の左腕を掴む腕に力を入れる

——瞬間、閃光の如き右腕は、見事に俺の胸の真ん中を射抜く

ドスン

「ぐふっ」

時間が止まる……

が、それも数秒だけしか効果が無い

それに普通なら吹っ飛ぶのを、葛木の左腕をかなり力を入れて掴むことにより、吹っ飛ぶことは無かった

ガシッ

葛木の右腕を掴む

「貴様!!」

「その通り、これが俺の狙いだ」

葛木の顔面に頭突きをする

「ぐっ」

「まだだ」

葛木の脚を払い、掴んでいた両手を離し。

バキッ

「ぐうあ」

バキッ

「がああ」

両腕の手を思い切り踏み、骨を砕く。
そして、とどめに顔に一発

ドゴッ

「・・・・・・・・俺の勝ちだな、葛木」

気絶している葛木に言う

「宗一郎様!!」

キャスターが気絶した葛木に駆け寄る

俺は結界を解く

「さあ、俺の用は終わった、そいつを連れて柳洞寺に戻れ」
「この復讐は、いつか必ず返すわ」

キャスターはマントを翻し、葛木を抱え、転移する

「ゴフ」

大量の吐血をする

肋骨が肺にでも刺さったんだろう

「やっぱり、無理が、あった、か」

倒れる体を誰かが支えてくれた

「全く、無茶しすぎだぜ」

支えてくれたのはシグルドだったのか。

「ちょっと、蒼緋大丈夫!？」

「大丈夫か蒼緋!？」

「無事ですか、蒼緋!？」

シグルドの後に、三人が駆けつけてくれた。

でも、どうするこの状態じゃ、知識はあっても未熟者の俺じゃ魔法を使い、傷を治すことは無理だ。

ここは

「遠、坂……」

「な、なに？」

気力を振り絞り一番使い慣れた能力、創造を魔力を使い行っ、そして特大の宝石を作る

創った宝石を遠坂が見て驚いていた

「これで、俺の傷、を」
「わ、分かったわ」

遠坂に宝石を渡し、俺の意識はそこで途絶えた

第十一話 朽ち果てた殺人鬼（後書き）

誤字脱字、駄目な所を教えてください
それと、アドバイスも（、・・・）ノヨロシク

第十二話 アーチャーとのちょっとした会話

目を覚まし、状況を確認する

「こっ、は」

天井に見覚えがある、ここは衛宮邸の俺の部屋だ

「やっと起きましたね」

と、不意に声を掛けられた。
声の主はライダーだ

「ライダーか、俺はどのくらい意識を失っていた？」
「約八時間、といった所ですね」

八時間か、何時もと変わらない睡眠時間だな

「シグルドは？」
「すいません、気付いたら居ませんでした」

またか、でもそろそろ慣れてきた、後から令呪で呼び戻せば良いだけだ
と、それより腹が減った、今は昼ごろか、士郎が昼飯を作っている筈だろう

俺は布団から起き上がろうとする

「ぐっ！！」

まだ怪我が治っていないのか、肋骨らへんがかなり痛い

「まだ怪我が癒えていけませんので、動かないでください」

「やはり、あの宝石ではこれが限界か……」

俺は全ての能力をオンにする

「ライダー、誰か来ないか見張っててくれ」

「分かりました」

何でか、魔法を使うところを見られるとまずい、と俺の勘が言っている。

俺は、治療魔法を使う

「ふう」

これで、怪我は完全に治った

「ライダー、もういいぞ」

部屋の外に居たライダーを呼ぶ

「分かりました」

そういうと、ライダーは障子を開け、俺を見て驚いている

「どうした？何処が変か？」

「い、いえ。アレほどの傷を負いながら、先ほどは起き上がることも出来なかったのに、もう動けるとは……流石ですね」

「まあな、俺にかかればこんな傷、治す事など簡単だ」

「ふう、本当にイレギュラーですね」

「その言葉は褒めているのか？」

「その様に言ったつもりですが？」

俺とライダーは苦笑する。

「腹が減った、居間に行くぞ」

「はい」

ライダーと居間に向かう。

と、居間にはセイバーしか居ない

「ん？士郎は何処だ」

「おはようございます蒼緋。シロウなら今来客が来たようなので、玄關に行きました」

「そうか」

と、セイバーとライダーが目を合わせ睨み合う

「やめろライダー」

令呪を使う素振りを見せる

「……………分かりました」

なんでこの二人は、会ったら睨み合うんだ？絶対後から戦いが始まるぞ

そんなことを考えていると襖が開き士郎……………ではなく遠坂が入ってきた

「・・・・・・・・・・」

遠坂は俺を見るなり、何かまずいものでも見たかの様な顔をする

「昨晚の傷の手当てに感謝する」

我を取り戻したのか、何時もの遠坂に戻る

「お礼を言われる程では無いわ、アレはアナタの宝石のおかげだもの。でも、なんで動けるの？アナタの怪我は後一日ぐらい寝てないと動けない状態だったのに」

「なに、魔術で直しただけだ」

「はぁ、私でも全身の打撲と臓器を何とか治せたぐらいなのに、何でそんなに簡単に骨が繋がるのよ」

「まだ完全に繋がっていないんだがな。まともに戦闘できるのは後一日経たなければ無理だ」

遠坂は溜息を吐く

「まあ、そんなことより士郎」

居間の襖の入り口で拳動不審の士郎を呼ぶ

「な、なんだ？」

「腹が、減った早急に飯を作ってくれ」
「わ、分かった」

士郎に昼飯を作るように促す

それから昼食を取った後、今後の方針を話し合った。
もう夕方の六時になり、士郎が料理を作っていると……

大河さんが帰ってきた、ライダーはいつの間にか霊体化している

「お邪魔してます、藤村先生」

「あ、遠坂さんだー。どうしたの士郎んちで合うなんて珍しいね」

これから数分、いや数秒後に虎が吼えるだろう

俺は魔力式創造で耳栓を創り、耳に付ける

「ってなんで、遠坂さんが士郎んところにいるのよー!!」

それからちよつとの間騒がしくなった。

結果は遠坂の勝利で終わり、夕飯を仲良く？食べた

夕食後、俺は部屋に戻り、胡坐を掻いて瞑想する

と、瞑想して約十五分したら庭のほうから遠坂の声が聞こえた

「これは、怒っているな顔を出すのはやめておくか」

俺は再度瞑想をする

それから数時間後、土蔵から魔力が感じられる、どうせ士郎が強化の鍛錬でもするんだろう。

俺は部屋から出て部屋の前から土蔵を見続ける

と、土蔵にセイバーが歩み寄っていく

そして直ぐにアーチャーが土蔵の入り口に現れた。

「行くか」

俺も土蔵に向かう。

土蔵からアーチャーの声が聞こえる。

「――――放棄されていた回路はこれで現役に戻ったという所か」

俺は気配を殺して土蔵の扉の前に立つ

「――――む!!」

最初にアーチャーが気付いた

「久し振りだな、アーチャー」

「貴様……」

アーチャーは俺に殺気を放ってくる

「そう警戒するな、警戒を解かなければ、お前の正体が士郎にバレることになるぞ？」

「貴様、俺の正体を知っているのか!？」

「ああ知っているとも」

俺は視線をアーチャーから士郎に変えた

「？」

「？」

「……………」

「アーチャー、士郎との話が終わったら屋根の上に来い」

士郎とセイバーは俺の言っていることが分かっているのか首を傾

ける

「承知した、じっくり話を聞こうじゃないか」

俺は土蔵を出て屋根の上に跳躍し、一応のため防音結界を張る
それから数分後、アーチャーが土蔵から出て、俺のいる所まで跳躍
し、俺の隣に着地する

「随分と早かったな」

「ああ、衛宮士郎の事より、貴様の事が大事だからな」
「そうか、では話をしようじゃないか」

俺は結界がちゃんと作動しているか調べる

「ほう、防音結界か」

「流石だな、アーチャー、いやエミヤシロウ」

アーチャーは驚いてはいない、先ほどの会話で俺がアーチャーの正
体を知っていると云って、士郎に視線を向けて事で本当なのだと気
付いたのだろう

「何故、俺の名を知っている」

「何でだろうな」

「正直に答えろ」

「俺がイレギュラーだからじゃ駄目か？」

「貴様！！」

「まあ、そんなことは後から教えてやる、俺の言いたい事はだな」

ここで言葉を区切り、息を吸い込み

「聖杯戦争が終わったなら、俺のサーヴァントになってはくれないか？まあ俺が生きていたらの話だが」

「…………断る」

予想通りの答えが返ってきた

「くつくつくつく」

「何故笑う？」

アーチャーが真剣な顔で此方を見ている

「いや、予想通りの答えが返ってきたんでな。何でか笑ってしまった」

「ふう、此方の考えも分かっているのか」

これ以上話しても無理か埒があかないな、今日はこれぐらいにするか

「この話はやめよう、俺はそろそろ眠くなってきた」

「そうだな、では私は遠坂邸に戻らせてもらおう」

そう言うとアーチャーは俺に背を向け、霊体化しようとした時、俺はアーチャーを呼び止めた。

「アーチャー」

アーチャーは俺に背を向けたまま返事をした

「なんだ？まだ話すことがあるのかね」

俺は背を向けたアーチャーに――

「俺は諦めないからな」

アーチャーには見えなだろうが、不敵な笑みを浮かべながら言う。
すると、アーチャーは俺に背を向けたまま笑う

「く、くくくくく。面白い男だなお前は、だがな、私をサヴァ
ントにするのは簡単にはいかんぞ？」

「そんなこと百も承知だ」

俺の返事を聞くとアーチャーは何も言わず、霊体化して去っていった

「さて、寝るか」

結界を解き、地面に飛び降りて、自室に向かう

今日は大して面白いことは特に無かったな

布団に入り、俺は眠った

第十二話 アーチャーとのちょっとした会話（後書き）

誰か俺にアドバイスをしてくれゝ

駄目な所も誤字脱字も教えてくれゝ

えゝ感想に下手くそとか書かないでください

正直、かなり傷つきます（´Д`、

第十三話 城に攻め込む？（前書き）

タイトルが思い浮かばないので適当にしました

キャスターは俺に勝てないのに余裕そうだ。

ま、俺は今戦う気は無いがな。

なぜなら・・・今起きてだるいからだ。

何時もはライダーが側に居るんだが、今日に限ってなぜか居ない。
シグルドが朝に俺の側に居ることが滅多に無い。

「今、何時か分かるか？」

「・・・え？」

キャスターは俺の質問に、目を見開き驚いている。

だがそれも一瞬、キャスターは何時もの冷静さを取り戻し。

「午後の三時くらいでしてよ」

「な・・・!!」

なんだと、この俺がこのような時間まで寝ているとは・・・。

俺はひざをつきorz状態に入る。

「・・・」

「????」

両者とも声を発しない。

と、近くに士郎たちの気配がした。

俺は直ぐに立ち上がり。

「キャスター、俺は何もしないから後は好きにしろ」

俺は何時もの調子に無理やり戻り、自室に戻る。

多分、キャスターは驚いているだろうな。

俺がキャスターの邪魔をしたら、本編の通りに進まなくなるかもしれないから仕方が無いんだ、すまない士郎。
と、心の中で謝る。

「だが、そんなことより」

そう、そんなことより俺には大きな失敗があった。

「何故俺はこんなに長く寝たんだ」

それが異様に気になる、しかも、少し貧血気味だ。
自室に戻るなり布団に入る。

「寝なおすか……」

自身に睡眠の魔法をかけ、夜の十二時まで寝ることにした。

——十二時

布団から出て背伸びをする。

「さて、気配からして、もう帰ってきてるな」

士郎の部屋に向かう。

障子を開け、部屋に入る、とそこには肩に傷を負い、呻きながら寝ている士郎がいた。

「これは、酷いな……」

流石の俺でもここまで酷い怪我を見たことが無い。

「う、うう、あ、うつ!!」

これはいかな。

「しょうがない、痛みを和らげるぐらいはいいだろう」

士郎の肩の怪我の痛みを魔法で和らげる。

「はあ、はあ、はあ………」

だんだん呼吸が整ってきた

「これぐらいでいいか」

俺は士郎の部屋を出て、縁側に座る。

「良い月だな、そう思わないか？」

「ああ、そうだな」

そこには昼に居なかった、シグルドが居た。

シグルドは俺の隣に座り、どちらも一言も喋らない

「シグルド」

「ん？なんだ」

「明日の朝、直ぐにこの家を出る、お前も付いて来い」

「了解。でも、ライダーはどうすんだ？」

「ライダーには、この家を守ってもらう。頼んだぞ」

「分かりました」

返事と同時に、霊体化していたライダーが実体化して、俺の後ろに現れる。

「指示するのはこれだけだ、俺はもう寝る」

「あ？今日一日寝ていたのにまだ寝るのか？」

「ああ、起きてから少し貧血気味なんだ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

なぜか無言になるシグルドとライダー。

この二人、何か知っているのか？

そう思い、聞いてみる。

「俺のこの貧血気味のことを何か知っているのか？」

「いや、知っているような知っていないような」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

シグルドは横目でライダーを見る。

と、ライダーがシグルドの視線に気付いて申し訳なさそうに。

「すみません、私が少し血を・・・・・・・・」

なるほど、だから貧血気味だったのか、無限の魔力を持つ俺の血はライダーの魔力がかなり回復するからな、仕方ないか。

「これから血を吸うときは、俺に許可を得て飲め」

「すみませんでした」

ライダーは頭を下げる。

まあ、別に怒ってないから、頭を下げられてもな。
俺は腰を上げる。

「俺は寝る、お前らも朝まで自由にしている」

「りょーかい」

「分かりました」

返事をするなり二人は直ぐに霊体化してこの場を去っていった。
俺も自室に戻り、また眠りについた。

――翌日、朝5：00

俺は着替えを済まして、衛宮邸を出る。

服は黒、ズボンも黒、靴も黒、全身黒装備だ（何時も黒しか着ないんだが）。

坂を歩いていると、交差点の所で腹が鳴った。
昨日は朝昼晩の飯を食っていなかったからな。
この時間、開いている店はまず無い、どうする……。

「なぐに、悩んでんだ？」

シグルドから声を掛けられる

「腹が減ったんだが、この時間に関いている店などまず無いだろう？
店が開くまで待つのは面倒だしな、どうしようか迷っていた」

「あゝそうだったな、お前昨日、飯食って無かったもんな」

「シグルド、何かいい案は無いか？腹が減ってまともに頭が働かん」
「うゝゝゝん」

シグルドは顎に手を当てながら考えている

「・・・・・・・・・・あ」

何か閃いたのか顔がにやけている

「いい案でも浮かんだか？」

「ああ、結構言いたいと思うぜこれは」

「ほう、じゃあ言ってみろ」

自信満々の顔でシグルドは

「遠坂の穰ちゃんに飯食わせてもらえばいいんだよ」

「却下」

「即答かよ！？」

遠坂は家には居ないだろう、探すのも面倒くさい

「他には？」

「知り合いの家に行く」

この世界に知り合いは・・・・・・・・居たな一人、敵だが。

「よし、行くぞ」

「何処に？」

「郊外の森だ」

シグルドはこの町の地理に詳しくなく、首を傾けている

「早く行くぞ」

「ちょ、ま、ぐええ」

シグルドの着ている服の襟を掴み、足に魔力を込めて一気に飛翔する

——数十分後

「ふう、ここだ」

「……………」

シグルドは具合が悪そうな顔をしている

「どうした？」

「どうしたじゃねえ！！お前のせいで酔ってるんだよ」

「情け無い、貴様本当にサーヴァントか？」

シグルドを軽蔑の目で見る

「てめえ……………いつかぶつ殺す！！」

「ふっ、やってみろ」

俺はシグルドの罵詈雑言を聞き流しながら、郊外の森に入っていく

——数時間後

目の前にかなりの大きさの城が見えてきた

「遠すぎだろ、これ」

シグルドは悪態をつきながらもちゃんと歩いている

城の扉の前に行き、扉を開ける

「おいおい、こんな普通に入って良いのか？」

シグルドが心配そうな声で訊ねてきた

「気にするな、この森は結界で覆われていてな、森に入った時点で俺らが来ている事に気付いているだろう……そら、来たぞ」
「はあ!？」

階段の上には、ロビーの真ん中にいる俺らを見下ろしている少女、イリヤスフィールがいた

「こんにちは、イレギュラーさん、今日は何の用でここに来たの？」
「飯でも食わせてもらおうと思って来たんだが」
「え!？」

イリヤスフィールは目を見開きながら驚いている。
と、いきなり笑い出した。

「ふ、ふふふふふふ」

「何故笑う？」

「いや、そりゃ笑うだろ!！」

真面目に聞いたらシグルドからツッコミをいれられた。
今の何処が面白かったんだ？

「ふふふ、良いでしょう、貴方達をお客様として持て成しましょう」
「感謝する」

「さあ、こっちょ」

イリヤスフィールは踵を返し、廊下に消えた。
まあロビーから見たら消えるように見えるんだが。

「行くか……」

「絶対無理だと思ってたのに……」

そう言いながら階段の上まで俺たちは跳躍してイリヤスフィールに追いつく

「イリヤスフィール、聞きたいことがあるんだが」

「私の事はイリヤって呼んで」

イリヤか、そのほうが短くて呼びやすいな。

確か俺はイリヤに名前を教えて無かったはずだ。

「そういえば俺は名乗ってなかったな、俺の名は明神蒼緋だ、蒼緋と名前で呼んでくれ」

「分かった」

「ではイリヤ、聞きたいことがあるんだが良いか？」

「私に答えられる物なら何でもいいわよ？」

「何故俺らを持て成す、俺はお前の敵だし、持て成しても利益なんて無いだろう？」

「えーとね、面白そうだったから？」

イリヤは笑いながら答え、どんどん進んでいく。

「聞く必要は無かったな、すまない」

「え？別に謝らなくても良いのに」

と、ある部屋の扉の前で止まる。

「さあ、ここよ」

扉を開ける。

そこには、八人でも使える大きなテーブル一つと、椅子が八つ、テーブルの上には、豪華な朝食が置かれていた。
イリヤは先に椅子に座る。

「早く座りなさいよ、ご飯冷めちゃうでしょ」

「分かった」

「俺も食べて良いか？」

シグルドが涎を垂らしそうになりながらイリヤに訊ねる。

「ええ、いいわよ」

「やふうー!!」

俺より先に椅子に座る、それに続いて俺も椅子に座り、朝食を食べる

——数十分後

「ふう、食った食った!!」

シグルドは満腹なのか腹を叩いている
俺は合掌し軽く頭を下げた

「さあ、食事も終わったんだし、お話でもしましょう」

イリヤが不敵な笑みで此方を見据えている

「話をするなら、今日ここに泊まらせて貰うがいいか？」

「ええ、部屋はいっぱいあるから何処でも好きな所を使っても良いわよ」

「感謝する、では何か聞きたいことはあるか？俺が答えることが出来る程度の物なら答えよう」

イリヤは腕を組み、目を瞑って何かを考えている

「ソウヒは何で聖杯戦争に参加したの？」

「・・・面白そうだからだ」

「ふうーん、じゃ、次は、えーとね」

また考え始めた

こうしてみると年端も行かぬ少女に見えるのに、俺より年上だから、確か十八、十九だっただろう車にも乗ってるとか聞いたことがあるしな

「じゃあ聖杯に何を望むの？」

「望むものは無い、そして聖杯は破壊する」

「・・・そう」

聖杯の破壊、それはイリヤを殺すかもしれない、ということだ、いや、結局は聖杯になれば死ぬんだ。

だが凜ルートではイリヤがギルガメッシュに心臓を抉り取られて死ぬ。

そして俺はイリヤを助けることが出来る、でもそれには遠坂の力が必要だ、ライダーの時みたいに想像でアヴァロンの回復能力の底上げが出来ないからな。

魔法でも、流石に心臓を再生させるのは無理だろう、だが魔術は違

う、遠坂は士郎の心臓を再生させたんだからな、イリヤを助けることが出来るだろう。

「ちょっとソウヒ、聞ってるの？」

不意にイリヤから声を掛けられる

「すまない、考え事をしていた」

「……………まあいいわ、許してあげる」

イリヤは真剣な顔になり――

「じゃあ、もう一回言うね、蒼緋は何で聖杯を壊すの？」

「……………気付いているんだろう、聖杯の中には“この世すべての悪” アンリ・マユ がいると、アインツベルンがルールを犯してまで召還した第三次聖杯戦争時の英霊だ」

「……………」

イリヤは俯き何も喋らない

「そのアンリ・マユが垂れ流しにでもなってみろ、この町、いや、この国は焼け野原になるだろうな、第四次の時は衛宮切嗣が、イリヤ、お前の母、聖杯をアイリスフィールごと壊して被害を最小限に食い止めるしか出来なかった、だがその時すでに切嗣は気付いたんだろう“この聖杯は危険”だと、だから今の士郎のサーヴァント、セイバーに令呪を二つ使い、宝具で聖杯の破壊を命じた、そして聖杯の中身が飛び散ったか何かで、冬木の大火災が起きたんだ」

「……………」

イリヤはまだ俯いたままだ、俺は気にせず話す

「お前は切嗣を殺したいんだろう？なら何故士郎を切嗣の代わりに殺そうとする？それとな、お前は勘違いをしている、切嗣はお前を見捨ててなどいない。知らないと思うが、第三次聖杯戦争が終わって、切嗣がお前に会いに行けなかったのは、確かアハト翁の仕業だ」

「おじい様の・・・？」

俯いた顔を上げイリヤ聞いてくる。

俺は頷き、そのまま話を続ける。

「そうだアハト翁は切嗣がお前を助けに行っても城の結界を開かなかった、土壇場で裏切った切嗣に制裁をするべきだったのにしなかった、そしてイリヤ、お前に合わせないことが切嗣にとって一番の罰だと考えたらしい、でもな切嗣は『魔術師殺し』の異名を持つほどだ、結界を突破してお前を助けることが出来たかもしれない、でもそれが出来なかった、何故だか分かるか？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

分からないか、今は頭が混乱しているのだろう、仕方ないヒントでも教えてやるか

「切嗣はな、聖杯の近くである男と戦闘していてな、その上の階には聖杯、アイリスフィールの死体があり、徐々に臓器が聖杯としての携帯を取り戻し、その器がアーチャーが戦っていたサーヴァントを汲み上げ、聖杯は起動し、そして毛筋ほどの罅から零れ落ち、それから罅は大きくなり大量の泥、アンリ・マユが床を突き破った。さあ、その下の階にいた人間はどうなったか分かるか？」

これならば分かるだろう。

イリヤは目を見開き呟く。

「もしかして、キリツグはアンリ・マユに……」

「真下にいた切嗣はアンリ・マユを満身に浴び、体を蝕まれ、死病のように切嗣の肉体を衰弱させ、手足は萎え、魔術回路も八割方の機能を失い、そのせいで城の結界の起点探すことも出来ず、ただ吹雪の中を凍死寸前まで彷徨い歩くことしか出来なかったんだ」

「そんな、キリツグは私を見捨てて無かったんだ……」

またイリヤは俯いた、さつきとは違い、今は涙を流している

「ま、ちょっとでも浴びるとこういうことになる。すまないな、話がかかり逸れてしまった、これが俺の理由ということにしといてくれ」

「……分かった」

「まだ聞きたいことはあるだろうが、落ち着いたら話の続きをしよう」

「……うん」

「行くぞ、シグルド」

シグルドの方を見てみると感動したのか、涙を流している
俺はシグルドの服の首元を引っ張り、部屋を出た

「う、う、何て良い人なんだ切嗣って言う人は、その人は男の中の男だ、生きていれば弟子入りしたかった……」

本気で感動しているのかこいつ

城の最上階の普通よりちょっと広い部屋を使うことにした

「な、なあ蒼緋」

「ん？なんだ？」

「その人の墓はこの近くにあるのか？」

近いといえば近いのかあそこは？

「あるが、それがどうした？」

「今から行こう！！」

左手で握り拳をして、右手は窓の外を窓の外を指差しながら促す馬鹿かこいつは？もし行ってる最中に遠坂や士郎に会ったらどうするんだ面倒くさいことになるぞ

「・・・・・・・・・・・・・・・・駄目だ」

「何で！！？」

窓の外を見つめていたシグルドが勢い良く、振り向く

「切嗣の墓はな、柳洞寺の裏にあるんだ」

俺の言った言葉の意味を理解したのか

「チツ、あの女狐の所かそれじゃあ迂闊にいけないな」

「お前ならば大丈夫だろう、ファールヴニルの血のおかげで物理防御、対魔力がかなり上がっているし、それにセイバー以上の対魔力だからキヤスターの魔術なんぞ効かないだろう」

「でも、あの寺はあいつの神殿だぞ？しかもあいつは神殿内だと魔法の真似事もできるし、この前行ったときは神代魔術も使っていたからな、多分無理だろ」

「・・・・・・・・・・そうか、お前がそういうのなら無理なんだろう」

さて、何もすることが無いな、ロビーで鍛錬でもするか・・・

「暇だから、外で鍛錬がお前も来るか？」

「あゝ、うん、暇だし付き合ってやるよ」

それから俺とシグルトは、夜まで休み無しで鍛錬をした。

「はあ、はあ、はあ」

「良い運動したな」

俺とシグルトは、城の扉の前に座って休憩している

「やつぱ広いと良いなあ、衛宮邸の道場は狭くてやりづらかったんだよな」

そう言っつてシグルトは起き上がり、走り回る

こいつ、なんて体力だ、汗は掻いてるのに息を切らしていない、そして俺は、汗は大量に掻いていて息をかなり切らしている、これが俺とシグルトの実力の差か、まあ相手は英雄だから勝てるはず無いか・・・

「ソウヒ、お夕飯できたよ、それとも先にお風呂？」

声を掛けてきた人物はリスだった、鍛錬に行く前に廊下で会い、ちよっと話をして仲良くなった

「先に風呂に入ろう、こんな汗だくでは、飯を食う気がしないからな、イリヤにはちよっと遅れると伝えておいてくれ」

俺は立ち上がり風呂場に行く

「で、でかい、何だこの風呂のでかさは……わっふーい」

シグルドが競泳選手並の飛び込みで湯船に入ろうとする。

俺はすかさず湯船を結界で包む。

ゴシヤ

「ッてーな、何結界張ってんだよ！！風呂に入れねーじゃねーか！
！」

「先に体を洗って入れ、湯船が汚くなる」

「あ、そうじゃんいっけね、でっかいもんでつい調子に乗っちゃまったよ」

シグルドはすぐに神速の如き速さで体を洗い終り、また飛び込もうとしていた

「ひゃっほーい！！」

しまった、まだ結界を……

ゴシヤ

「すまない結界を解くのを忘れていた」

シグルドは立ち上がったが顔は俯き、拳が震えている

「ぶ……」

何かを呟いているな、声が小さくて聞こえん

「なんと言っているんだ、ハッキリ言え」

シグルドの拳の震えが止まり・・・・・・・・・・

「ぶっ殺す!!」

かなりの速さで俺に向かって走ってきた

「ふん、馬鹿が」

俺は白い物をシグルドの足元に投げる

ツルツ、ゴン!!

見事に白い物、石鹼でシグルドは滑り後頭部を打ち気絶した

「あつけない、これがサーヴァントなのか？」

俺は体を洗い終わり、湯船に浸かりながら、自分のサーヴァントが本物の馬鹿なのだと気付き、セイバーと交代して欲しいと強く願う再三願う俺だった

その後シグルドを背負って風呂を出たら、目を覚ました

「ん？俺あどうしてこんな所に？」

さっきまでの記憶が無いのか、シグルドは首を傾げている

「風呂に入ってた、逆上せて気を失ったんだ」

もちろんブラフだ

「ああ、そうなのかそんなに風呂に浸かってたのか……でもさつきまでの記憶が飛んでて思い出せねー」

拙いな、このままだと俺がした事を思い出したまた襲われるかもしれん

「もう飯が出来上がっているんだ、早く行くぞ」

「あゝ別に思い出せなくてもいつか、早く飯食いに行こうぜ」

シグルドは霊体化して先に食堂に向かった、俺は遅れて食堂に着く

「もう、遅いわよソウヒ、レディーを待たせるなんて、男失格ね」

「手厳しいな、次は気をつけよう」

良かった、いつものイリヤに戻ったな、でも目の所が赤いのは今まで泣いていたのだろう、まだ知らなくても言い事を知ったんだからな、仕方が無いか、まあ元気になってくれたんだから別に良いか。俺は安心して椅子に座り、合掌して軽く頭を下げて、夕飯を食い始めた。

「ごっちそうさーん!!」

膨れ上がった腹を叩きシグルドは満足げな顔をしている。

俺も合掌し軽く頭を下げて、箸を置いた、そしてイリヤと目が合う

「ソウヒ、後から私の部屋に来て」

「……分かった。シグルド、お前は客室に戻って休んでいろ」

「りょうかい」

上手いものを食って満腹になったことでシグルドは直ぐに部屋に戻っていった。

イリヤはいつの間にか、この部屋を出ていたようだ、俺も部屋を出て、イリヤの部屋へと足を進めた。

イリヤの部屋といっても何処に在るか分からない、リズかセラに訊ねるにも何処に居るか分からんしな。

「仕方ない風潰しに探すしか・・・」
「ソウヒ？」

後ろから声を掛けられる、この声は・・・リズか

「リズか、丁度良いイリヤに部屋に来いと言われたんだが、場所が分からなくてな、イリヤの部屋が何処にあるか教えてくれないか」
「うん、いいよ、私に付いて来て」

リズは俺の前を進み、道案内をしてくれた

「ここだよ」
「ここだったのか」

イリヤの部屋の場合は、俺の居る場所から直ぐの所だった、情け無い。

「助かった」
「どういたしまして」

俺は扉を開き部屋に入る。
そこには、椅子に座ったちよつと怒っているイリヤが居た。

「遅くなった」

「遅い！！またレディーを待たせるなんてほんとに男失格ね」

面目ない、次から気をつけると言った直ぐにこの始末か……
本当に情けない

「じゃあ、朝の続きをするか、何を聞きたい？」

イリヤは真剣な顔つきになり

「なんで、お母様やキリツグの事を知ってるの？」

まあ、聞かれても当然だな、でもこれをまともに答えたら拙いだろ
う。

「それは、言えないな。別の質問は？」

俺はさらっと流して質問を促す

イリヤが負けじと、質問をしてくる

「教えて、何でお母様と……」

「言えないと、言っただろう」

キツパリと最初より言葉を強めて断った

「なんで、なんでアナタが知っていて、私が知らないお母様やキリ
ツグを知ってるのよ！！」

「……………」

イリヤは俯きながら泣いて叫ぶように言ってきた

知ってるって言うか、俺小説の最終巻をしかまともに見て無いんだ

「イリヤ」

「何？」

「俺はな、この世界の人間じゃないんだ」

「そう、何となく気付いてたわ」

イリヤは涙を拭いながら答える

「て言うことはな、俺の世界で俺は切嗣と一緒に聖杯戦争を戦っていたかも知れない、と言うことだ」

「え・・・・・・・・」

イリヤは感づいたのだろう

「そう、この世界の第四次には俺は参加していなかった、だが俺の世界では第四次に俺は切嗣と一緒に参加して戦っていたということだ」

「ということはアナタは平行世界の人間なのね」

「さあな」

ふう、咄嗟に思いついた嘘で何とかなつたな、すまないイリヤ

「さっきも、言ったがお前の両親のことは何も言えないからな、それ以外の質問しか受け付けんぞ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

最初からそれしか聞くことが無かったのか、何かを考えている

「ない」

「ない？」

「うん、ない」

「なんでだ？他にも聞くことはあるだろう？」

「お母様たちのこと聞くことしか考えて無かったから」

そうか、そつだよな誰でも何年も前に死んだ両親の本当の事を知りたがるだろうな。

「まあ無いなら別に良いが、俺は鍛錬のせいできつい、もう寝るから」

「うん、おやすみ」

俺はイリヤの部屋を後にした

なんか逃げてしまったな、なんで俺はイリヤに教えなかったんだ意味がわからんな

客室、俺とシグルドが使わせてもらっている部屋につき扉を開けると、シグルドがベッドではなく床で寝ている、しかもシグルドの周りには大量の酒の空き瓶が……

「一人で酒飲んで、俺の分は残してあるのか？」

シグルドを起こさないように、まだ入っている酒瓶を探す

「これは美味そうだな」

俺が拾い上げたのはかなりの年代もののワインだ、寝る前に一杯飲んでおくか。

酒を飲むためにグラスを探すがこの部屋には無いようだあるといえ

ば、ティーカップなのだが、まあ飲めればいいしな、これでいいだろう。

ティーカップにワインを注ぎ、それを飲む。

「なかなかの物だな」

実際かなり美味い、後もう一杯……。。

と気付く頃には酒瓶は空になっていた。

「美味かった、寝るか」

酒が回ってきて眠くなっていたので、ベッドに入り瞼を閉じ、一日を終える

第十三話 城に攻め込む？（後書き）

誤字脱字気付いたら教えてください

それとアドバイスも（、・・・）ノヨロシク

てか、十三話自分で書いたは良いけど良くわかんね

第十四話 冬の少女

巨大な気配に気付き、目を覚ます。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「よお、起きたか」

窓の側で椅子に座っている、シグルドが楽しそうに声を掛けてきた。

「状況は？」

「気配からして、この前の王様がお一人・・・・・・・・いや二人か、一人は魔術師ではないザコだ、でも、まだここに来るには三十分ぐらいかかる距離だな」

ギルガメッシュと慎二か、バーサーカーとの勝負は観戦するとしよう。

「そうか、まだそんなに掛かるか」

腹も減ったし朝食でも食いに行くか。

俺はシグルドと部屋を出て食堂に足を進めた。
食堂の扉を開けると良い匂いがした。

「おはようソウヒ、シグルド」

敵が来ているのに、イリヤは昨日と全く変わらない調子で挨拶をしてきた。

「・・・・・・・・ああ、おはよう」

「おはようさん」

俺とシグルドは挨拶を返し、椅子に座って食事を食べ始める。
飯の途中、イリヤにどうするか聞いてみる。

「イリヤ、食事中に悪いが」

「大丈夫よ、私のバーサーカーは無敵なんだから」

俺が言うことは分かっていたか……。

「すまん、野暮だったな、では俺は協力しなくてもいいんだな？」

「ええ、私のバーサーカーに勝てるサーヴァントはいないわ、アナタは観戦でもしていれば？」

「そうさせてもらおう」

俺はいつも通り、合掌し、軽く頭を下げて部屋を出た。
廊下に出て、客室に戻る。

「さて、準備を始めるか……」

準備といっても魔力式創造で、魔力がかなり込められている宝石を
九つ創る

「これぐらいでいいか」

後は、戦いが終わるだけか。

一息つくために紅茶を飲もうと椅子に座りテーブルに置いてあるテ
ィーポットを手に取り、カップに紅茶を注ぐ。

「冷たいな」

冷たいと紅茶は余り美味しくない。

カップの中に入っている紅茶を、魔法で丁度良い温度まで暖めて口に運ぶ。

と紅茶を飲んで直ぐに――

ドズン

「……………まだ一口しか飲んでいないんだがな」

椅子から立ち、部屋を出る。

と、廊下に出て直ぐにシグルドが、実体化して話しかけてきた。

「ソウヒ」

「なんだ？」

「気付いたと思うけど、来たぞ」

「分かっている、今から行こうとしていたんだ」

「じゃ、俺は先に見に行くから」

「見に行くのは良いが、気配を悟られないように、“令呪を持って命じるギルガメッシュに気配を悟らせるな”」

令呪の一画が消える、残り二つか、想像が無いときついな……………

「おお、サンキュー。よし、じゃお先に」

霊体化してシグルドは先に戦闘を観戦しに行った。

俺は二階の廊下を歩いていると、突然窓が――

ガッシャーン

窓から飛び込んできた赤い弾丸もとい、遠坂と目が合う。

「よお」

「・・・・・・・・あ!!」

それから直ぐに士郎が窓から飛び込んできた。

「よお」

「あ、よう」

自然に士郎が挨拶を返した。

と、いきなり遠坂に胸倉を掴まれる。

「ちよつと、あんた今まで何処ほつつき歩いていたのよ、探してたのよ!!」

「そうだぞ、お前が居ないからここまで来て、イリヤって子と共闘するつもりだったのに」

「ほう、そうか。なら丁度いい、俺もイリヤの所へ行く所だったんだ、行くぞ」

「え・・・・・・・・ちよつ」

「え・・・・・・・・おい!!」

俺は二人を無視してロビーに向かう。

歩きながら士郎たちに指示をする。

「遠坂、お前は反対側のテラスに行ってくれ、こっちは士郎に行かせる」

「ちよつと待って、一体何が起こってるのよ!!」

「そつだよ、今どうなっているか教えてくれ」

ちっ、話すのが面倒だな。

「良いから行け、そうすれば分かる」

「ちよつとま・・・・・・・・・・」

「おい・・・・・・・・・・」

二人とも何か言おうとしていたようだが、強制的にテラスに移された

「さて俺は一階に降りて慎二の近くの入り口で気配を消して隠れているか・・・・・・・・」

歩くのが面倒になってきたなので、遠坂側の一階廊下に転移する

「さてどうなっている・・・・・・・・」

俺は廊下からロビーの様子を伺う。

三メートル先には慎二がいる、そしてギルガメッシュはエルキドゥでバーサーカーが束縛されている。

「もうそろそろか」

もう少しでイリヤの心臓が挟まれる、そして直ぐに慎二を人質にして、撤退させる。

多分それで、引いてくれるだろう、実際本編通りだと時間が危ない。

「止める、テメエーーーーー！！」

士郎の渾身の叫びがロビーに響き渡る。
ギルガメッシュが士郎に振り向く。

だが、直ぐにバーサーカーの元へ行くイリヤの両目に一閃しイリヤは光を奪った。

その後、肺を一突き。

本編をクリアして知っているにしても、現実で見たらかなり……

……腹が立つ。

怒りを抑えようと深呼吸し、目を閉じる。

体勢を整えいつでも動けるようにする、そして一本の短刀を創造する。

士郎がまた叫ぼうとするが――

「待、……………」

ドシュツ

イリヤの体を抉った右手を引き抜く。

その右手には、今イリヤから抉り取った心臓があった。

「観客が居たか。私の勇姿を見たいという気持ちは分かるが――

――」

ギルガメツシュは、右手にイリヤの心臓を握ったまま

「身の程を弁える。王に命じるとは何事か、雑種!」

無数の宝具を放つ瞬間……………

「動くな!」

「ひっ!」

慎二に近づき首に短刀を当てる。

「貴様は……………」

ギルガメツシュは士郎の事を無視して、此方を凝視している。

「久し振りだな、ギルガメツシュ」

「こんな所に居たのか随分と探したぞ、先日の無礼決して許さぬぞ！！殺してくれよう、雑種！！」

ギルガメツシュは乖離剣を取り出す。

「そんなもの使う暇があるなら、さっさとその心臓持って帰るんだな。そろそろ腐るぞ、それとこいつを殺して欲しくなければ、とつとと消えろ」

「ギ、ギルガメツシュ、こいつの言うことを聞け！！早く剣を収めるよ僕が死んじゃうだろ！！」

慎二がかなり焦ってギルガメツシュを説得している。
観念したのかギルガメツシュはエアを収める。

「仕方が無い、撤退するぞシンジ」

俺は慎二を放してやる。

と、直ぐにギルガメツシュが無数の宝具を展開し放とうとする。

「バカめ、貴様はここで死んでおけ！！」

「ちよつと待った！！」

テラスの上から声が聞こえる。

「む」

「マスターを殺されたくなければ早く行きなさい。こっちはいつでも慎二を殺せるんだから」

遠坂は魔術刻印を発動させながらガンドを慎二に向けている。

「ギルガメツシュ、早く殺せよ！！遠坂なんてお前に掛かれれば速攻だろ？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

ギルガメツシュは遠坂を品定めでもするかのように凝視している

「ギルガメツシュ??」

「状況が変わったぞ、シンジ。彼女ならば器としては文句なしだ」

「――！！」

先ほどまで苛立ちに染まっていた顔は、唐突に、嫌らしい顔に変わっていた。

「そうか――いや、嬉しいよ遠坂。君が生きていてくれて」

「こっちは見逃してあげるって言ってるんだから早く行きなさい、殺すわよ」

「ふふん、せっかく僕達と手を組まないかって言おうとしていたのに、残念だよ遠坂。じゃあ僕は帰るとするよ」

慎二とギルガメツシュは城から出て行った。

思った以上に時間が掛かってしまった、早くしなければ。

俺はイリヤの駆け寄り、脈を取る。

かすかにまだ脈がある、これならまだ・・・・・・

「遠坂、早く来てくれ!!」

「え!? わ、分かった」

遠坂は階段を使わずに飛び降りて直ぐに来た

「今からイリヤを生き返らせる」

「はあ!? 心臓を抉り取られているのよ無理に決まってんじゃない!!」

「まだかすかに脈がある、これを使って仮の心臓のにしろ!!」

そう行つて心臓ほどの大きさで、かなりの魔力が籠った宝石を渡す

「でも……」

「でもない、早くやれ!!」

「——ッ!! 分かったわよ、失敗しても知らないわよ!!」

そう言つて遠坂はイリヤの心臓があつた所に、宝石を置き、呪文を唱え始める。

すると直ぐに士郎が駆け寄つて来た。

「蒼緋!! イリヤは助かるのか!!」

「まだ、分かん、遠坂を信じろ」

「……分かった」

それから数分後

「出来たわ、会心の出来よ!!」

「分かった、次は俺に任せろ」

直ぐに遠坂と交代で創造でアヴァロンを創り、その治癒能力と俺の

治癒魔法の二重治癒で体の怪我を全て治す。
どんだん体の傷が塞がり、完全に傷を治した
脈を取ってみる――

トクン

「……成功だ」

「本当か！？本当なのか蒼緋！？」

知ろうから肩をかなり揺さぶられる。

「ああ、成功だ」

士郎は泣きながらイリヤに駆け寄り、手を握る

「よかった……」

「さて、俺は久々にかなり集中したんでな、そこらで一服してくる」

「分かったわ、少し休憩しましょ、十分な休憩が出来たらここで落ち合いましょ」

「分かった」

「ああ、俺はイリヤを見てるから、ずっとここにいるよ」

俺は城を探索している時に見つけた、煙管を取りに俺とシグルドが
寝ていた部屋に転移する。

そしてテーブルの上に置いていた煙管を手に取り、火をつけて吸い
はじめた。

「禁煙していたんだが……今日は仕方ないと言っことにする
か」

というより、吸うつもりで持ってきたんだがな……。人間誰しも、欲には勝てないと言ったことか。

「なあ……。」

不意に後ろから声を掛けられる。

声の主はいつも話をしているから直ぐに分かった。

「シグルドか、なんだ？」

「俺の出番は？」

なんだ、そんなことか。

そんなものもちろん――

「無い」

「ギルガメッシュと戦えると思って、準備していたのに……。」

シグルドはorz状態に入り落ち込んでいる。

「まあ、そう気にするな、いつかちゃんと出番を与えてやるから」

ガバツとシグルドは顔を上げ、俺ににじり寄ってくる

「その言葉、ちゃんと覚えてるよ？忘れてたら承知しねーからな」

「ああ、分かった」

「ヨッシャー！！じゃ、今回の気晴らしに此処に向かって来ているサヴァントを倒してくるは」

こっちに向かって来ている、サヴァント、ランサーのことか。今日はお預けを食らったんだ、ちよっと位なら戦わせてやるか。

「俺は観戦させてもらうとするか」

「はっはー、速攻で倒してやるよ。じゃ、俺は先に行っとくぜ、あ、そうそう戦闘は外の玄関前でするから」

そう言い残し、シグルドは霊体化してこの部屋から出て行った。俺も続いて外の玄関前に転移する。

「お、早かったな？歩いてくるかと思ったのに」

「面白そうだからな、転移してきた」

「へ、誰であろうと俺に勝てるやつあいねーよ」

「ほー、この俺が相手でもか？」

「・・・・・・・・・・」

「お、来た来た！！」

声がするほうを向く。

やはりランサーか、シグルドは突きが苦手だから、苦戦するだろうな。

「うわぁ、ランサーかよ、やりづれーなあ・・・・・・・・」

「俺で悪かったな、でもこの前のやり直した、血が騒ぐぜ」

二人はお互いの間合いに入るなり直ぐに睨みあいを始めた。

「・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・」

両者手を出さないか、詰まらん、戦闘開始の合図でも出するか。そして、そこら辺に落ちている石を拾い、真上に投げる。

地面に石が落ちた瞬間、戦闘が始まる。

「はあああああああ！！」

「うおおおおおお！！」

ギギン、ギン、ギン

一本の槍と、二本の剣が接触し、火花を散らす。

「ちっ、どっかの弓兵みたいな戦い方をしやがって、虫唾が走るんだよ！！」

「それは、どう、も！！」

シグルドは防御に専念し、ライダーは懐に入らせないように素早い突きを何回も放つ。

「これじゃあ拉致があかん、決めさせてもらう！！」

ランサーが攻撃を止めゲイ・ボルクを構えなおす。

シグルドはランサーから距離を置き、魔剣に魔力を注ぎ始める。

「その心臓、貰い受ける！！」

ランサーの方が早かった、赤い槍の軌跡は点となりシグルドの心臓を狙っている。

シグルドは、剣に魔力を注ぎ終えたのか直ぐにシグルドが二本の魔剣を心臓を守るように前で交差させ真名を開放する

「刺し穿つ死棘の槍”ゲイ・ボルク!!”」

「間に合え!! “栄光と破滅の魔剣”グラム!!”」

両者の宝具の真名開放がぶつかり、辺りを光が覆う。

すると、城の中から士郎と遠坂が息を切らしながら出てきた。

「何? 一体どうなってんのよこれ!!”」

「何があつたんだ蒼緋!!”」

「まあ、静かに見ている」

するとどんどん光が弱くなり、二人の姿が見えて来た。

「——貴様!!”」

「いつてー、この二本の真名開放で軌道をずらすのが精一杯だったぜ」

シグルドは脇腹を挟られており、ランサーは軌道をずらされたのに驚いているのか、顔が何時になく真剣だ。

「これで、終わりだ!!”」

「ちい!!”」

シグルドはゲイ・ボルクを脇で挟み、右手の剣でランサーに切りかかる

パキイン

「なんだと!?”」

「な!?”」

「うそっ!?”」

「マジかよー!!」

俺は驚きの余り立ち上がる。

そしてシグルドはランサーに蹴りを食らわされて吹っ飛ぶ。

「はっはー!!どうやら戦いの女神は俺に勝って欲しいようだな」

ランサーは構えを解き、槍を肩に担ぐ。

「油断大敵!!」

シグルドは一気に間合いを詰めてランサーを残った左手の魔剣で斬りつける。

だがランサーは微動だにしない。

パキイン

折れた、シグルドの魔剣が二本とも折れた。

何故だ、何故シグルドの魔剣が折れる……。

魔剣が折れた原因を考える……までも無い、理由はギルガメツシュとの戦いの時だ。

やはりグラムにかなりの負担が掛かっていたか……………

「俺の負けだ…………殺れよ、ランサー」

シグルドは地面に胡坐を掻き、俯く。

ランサーもそれに答えるかの様に、担いでいた槍、ゲイ・ボルクを構える。

「……………止めだ、止め。今のお前何ぞ殺しても、勝った

感じがしねーよ」

「今の、俺を……？」

シグルドは俯いた顔を上げ、呟く。

「ああ、お前、こうなることぐらい予想ついていただろう？なのに戦って宝具が壊れた、何でそれを先に言わなかった？」

「お前との勝負が終わってなかったからだ……」

「シグルド、俺あそんなことよりな、万全のお前との勝負がしたかったんだよ」

そう言つて、ランサーはシグルドに背を向けて俺の方へ歩み寄ってくる。

やがてランサーが俺の目の前に立ち、口を開く。

「シグルドのマスターはお前だろ？」

「ああ、そうだ」

ランサーは不服そうな顔をしている。

「あいつの宝具をどうにかしてくんねーか？」

このまま宝具を創造して、また戦いが始まって、もしもシグルドがランサーを倒したら、本編の通りに進まなくなる。

しかも多分今は、ぎりぎり本編通りに進んでいるって所だろう、むやみに戦わせられんな。

「そうしたいのは山々だが、するとしてもいつになるか分からんぞ？」

「シグルドと戦えりやいつでもいいぜ、頼んだぞ」

ランサーはそのまま士郎と遠坂に視線を移す。
士郎と遠坂は臨戦態勢を取る。

「待て待て。俺は戦うつもりなんてこれっぽっちもねえから。見る
に見かねてな。少しばかり手助けしてやろう、とでしゃばりに来た
ワケだ」

「な——に？」

士郎が驚いたように声を出した。
俺は士郎と遠坂に背を向けているが、どのような顔をしているのか
ぐらい分かる。

「……聞き違いかしら。今、手助けをするって聞こえたけど」

まあ、士郎と遠坂が警戒する理由は分かるな。
士郎はランサーに心臓を穿たれ、遠坂は……良く分かんが、
敵からこう言われたら誰でも警戒するだろうな。

「なんだ、判りづらいか？なら言い直すか。お前達二人だけではキ
ャスター達には太刀打ちできん。できんだろうから、俺が手を貸し
てやると言っただ」

俺は士郎達の方を向き、観察をする。

「そう。ホントにでしゃばりね、ランサー。訊くけど、それは貴方
のアイデア？」

まあ、ランサーならこんなことやりそうだな。
これは言峰からの指示だ。

「いや、俺のマスターの指示だ。キャスター達がああなっちまった以上、一人きりの身としては協力者が欲しいんだと。ま、連中を潰すまでの共同戦線ってワケだ」

「まっとうな理由ね。けど、それなら私たちよりもっと頼りがいのあるヤツがいるでしょう」

ギルガメッシュと一緒に戦ったら、何時裏切られるか分からん。

よほどの馬鹿では無い限り、やつとは組まないだろう。

「いや、ありゃあ駄目だとてもじゃないが性に合わん。戦力的には申し分ないが、いちいち背中への心配をするのも面倒だろう」

「……ふうん。正しい判断ね、ランサー。けど、それも貴方のマスターの指示ってワケ？」

「それも違うな。アンタらを選んだのは俺の趣味だ。一度面識がある分話が早いだろう？」

……ランサーの面識とはアーチャーと戦ったり、士郎の心臓を貫いた事を言うのだろう。

士郎がランサーを睨みつけて問う。

「……待てランサー。俺は二度もお前に殺されかけた。だって言うのに、お前の言葉を信用すると思っっているのか？それとサーヴァントはこっちには二、いや一人いるんだ」

士郎がサーヴァントが二人、と言おうとしたとき、咄嗟にアイコンタクトして、ライダーのことは黙らせた。

そしてランサーは士郎の言葉を聞き、自身ありげに答える。

「思っているさ。オマエの参謀はさっぱりとしたいいい女だからな。」

そんな女が手を貸すってんだから、オマエだつて物好きなお人好しなんだろ？それにサーヴァントって言ったって、武器が無いんじゃない意味が無い。だから俺が手を貸すって言うってんだ」

「む——」

士郎は眉を寄せ、遠坂はランサーの言ったことに頷いている。そして一言も言い返せない自分にむかつく。

「そういう訳だ。だから協力できると思ったのさ——ああ、オマエ達がじゃない。オマエ達なら協力してやっていいと、この俺が思ったんだ」

流石だなランサー、見事な言い回しだ。

「……大した自身ね。協力しようって言うておいて、選ぶのはそっちってコト？」

「ああ。初見からアンタのコトは気に入ってたんだぜ？美人で強情で肝が据わっているとき
ている。女をマスターにするならな、アンタみたいなのがいい」

ランサーは言い終わると、遠坂を流し見る。

士郎はランサーのことが気に食わないのか睨みつけている。

「——いいわ。私は賛成。けどまだ決定じゃない。衛宮くんと蒼緋が信用できないって言

うんなら、この話は無かったことにするけど」

「だそうだ、どうするオマエら？。オマエら、器を試されてるぞ」

笑いを押し殺してランサーは俺と士郎を交互に見る。

「俺は別に構わない」

「俺も構わない、ただど一つ条件がある」

ランサーは士郎を不思議そうな目で見ている。

「ほう、条件か・・・まあいいだろう。言ってみろ」

「仲間だからって気安く遠坂に近寄るな」

——その場の空気が凍りつく。

遠坂は士郎の言った言葉の意味が分からないのか呆然としている。

ランサーは心底虚を突かれたのか絶句している。

士郎は本当に面白いな。

「は、なるほど！そりゃあそうだ、俺のマスターなんぞよりそっちのほうが何倍も重要だよなあ坊主！」

ゲラゲラと、士郎の言ったことが心底面白いのか、ランサーが笑っている。

「なんだよ、悪いか。言つとくけど遠坂はやらないからな」

「まさか。悪くなんかねえ、むしろ見直したぜ坊主。いや、いいねえお嬢ちゃん。坊主、嬢ちゃんにぞつこんじゃないか！」

士郎の言った言葉の意味を理解したのか、頬を赤らめて否定しようとする

「——！！な、ななナ二言つてんのよアンタ、私と士郎はそんなじゃ無いわよう！その・・・そう、私たちはただの協力関係なんだからっ・・・！！」

「えー、そうかあ？」

遠坂は必死に否定するが、それをランサーはニヤつきながら受け流して遠坂で遊んでいる。
そろそろだな……

「話の途中悪いが、俺はイリヤを治療しなければならないから衛宮邸に戻る。戦闘には遅れるが出来るだけ早く、追いつく」

「私としたことが、ランサーのせいで忘れてたわ。士郎イリヤスフィールを連れてきて頂戴」
「分かった」

――数分後

「おっ、戻ってきたな」
「……………」

やはりサーヴァントは凄いな、俺より気配を察知する範囲が広い。廊下から走ってくる足音が聞こえてきた。

「はあ、はあ。連れてきたぞ」
「走ってくるな傷が開くかもしれんだぞ」
「う——、ごめん」
「まあ、いい。では俺は先に戻る。死ぬなよ」

そう言つて、衛宮邸に転移す……………る前に。

「遠坂、ちょっと来てくれ」
「ん、なに？」

俺の所まで来た遠坂の額に手を当て、宝石魔術の知識と技量をコピーする。

「ちょっと何やってんのよビックリするじゃない」

「気にするな宝石魔術の知識とお前の技量をコピーしたまでだ」

「え、ちょっとあんた？・・・」

何か言われる前に衛宮邸に転移する。

転移した先は衛宮邸の庭だ、そういえば誰かがいないような気がする・・・まあいいか何れ思い出すだろう。

俺はそのままイリヤを土蔵まで運び、魔法陣の上に寝かせる。

そして魔法陣内の八角形の角に予め創っておいた八つの宝石を置く。この魔法陣はアイリスフィールが書き、そこで養成を取っていたはずだ、これを使えば・・・。

「これでいける筈だ、成功するのを祈るだけか」

流石に宝石を心臓の変わりに使うのは一時の間だけしか無理だ。だからこれから俺がイリヤの心臓を宝石八個使って再生する。俺は魔法陣に手を付き、魔力を注ぐ。

—————
数時間後

イリヤの心臓は完璧に再生した、だが問題が一つ心臓が前と一緒だということだ。

このままだとまた、イリヤの中に英霊の魂が取り込まれ、聖杯として機能するかもしれない、どうすればいい。

「どうしました、ソウヒ？」

俺が悩んでいるのに気付いたのか、この家を守るように命じたライダーが話しかけてきた。

「それがな……………」

今までの事をライダーに説明する。

「なるほど、そういうことですか。ならいつそまた殺してしまっっては？」

「何を言っている、殺したら俺が助けた意味が無いだろう」

ライダーめ、まともな意見を言いそうだと思ったのにな、また殺せとは……………殺す、か……………!!
そうか、仮死状態にすれば。

「良くやったライダー、お前のおかげで解決の糸口を見つけられたぞ」

「え、殺すのですか？」

土蔵を結界で覆い、魔力を感知されないようにする。
そして、魔法を使い、イリヤを氷の中に閉じ込めてコールドスリープさせる。

「凍らせて仮死状態にした。これで聖杯戦争が終わるまでイリヤには寝てもらおう」

「考えましたね。これならば大丈夫でしょう」

どうせ士郎達は今森を出た所だろうから、俺は遅れていくつもりだからこれから一時間ほど暇になるな。

さて、何もすることが無いし……………寝るか。

「ライダー俺は一時間ほど仮眠を取る、だから一時間経ったら起こしに来てくれ」

「分かりました」

そうして、自室に戻り布団に入り、直ぐに瞼が落ちた

第十四話 冬の少女（後書き）

更新遅れてすんません

誤字脱字があつたら言つてください。

アドバイスもヨロシク!!Σ)。(A>。(ゞ

てかなんか俺、小説に向いてねーんじゃない？
駄文すぎる

第十五話 再契約（前書き）

更新遅れてすみませんでした

（――（……）――（……）
コメコメ

第十五話 再契約

夜が明け、薄暗い町を俺は跳躍して教会の坂の下で止まる。

「ふう、いい運動になったな」

起きて直ぐに転移して、もし戦闘になったら体が動かないからな。まあ俺は戦闘しないと思うが。

考え事をしながら坂を上っていると、鉄と鉄がぶつかる音が聞こえてきた。

「もう始まっているのか」

鉄と鉄がぶつかる音を聞きながら、坂を歩いて上る。

もの凄い殺気だ、これが英雄が持つ殺気なのか、少しきついな。

「——っ！！」

悠長に坂を上っていると坂の上から、歴大な魔力の波動を感じた。その瞬間、ランサーが空中に飛び上がって、魔槍を放とうとしていた。

「これは、見ておかなければ」

坂を走って上りきり、草むらに隠れる。

上りきった瞬間、ランサーは魔槍を放つために真名を開放する

「刺し穿つ ゲイ」

紡がれる言葉に因果の魔槍が呼応する。

ランサーは弓を引き絞るように上体を反らし

「死翔の槍 ボルク」

怒号と共に、その一撃を叩きおろした――

魔槍は一秒も満たぬ間に、アーチャーに迫る。

アーチャーは死を覚悟して瞼を閉じ――

「――I am the bone my sword」

天空より飛来する破滅の一刺が、アーチャーに当たる刹那。

「熾天覆う七つの円冠 ロー・アイアス――！！」

大気を震わせ、真名が開放される。

激突する槍と盾。

あらゆる回避、あらゆる防壁を突破する魔槍。

投擲武具に対して無敵を誇る盾。

だがその盾を魔槍はいともたやすく一枚、二枚と花弁を破っていく。そして魔槍は勢いを緩めず、最後の七枚目の花弁を突破しようとする。

赤い弓兵は突破されまいと、裂帛の気合を以って、宝具に全魔力を注ぐ。

「ぬ――ぬあああああああ………！！！！」

瞬間、視界を閃光が白く染め上げる。

Fateをプレイして分かってはいたが、実物は想像と全く違うな。

パキイン

その時何かが砕ける音がした。
勝負が付いたか……………。

「——驚いたな。アイアスを貫通しうる槍がこの世にあるとは。君のそれはオリジナルの“大神宣言”　グングニル　を上回っている」

アーチャーは心からランサーに賛辞を送る。

「――」

だが、その賛辞はランサーに届く筈が無い。

ランサーの最強の一撃。

自らを英雄たらしめていた一撃を防がれたのだ。

その憤怒いや殺気は、視線だけで人を呪い殺せそうだ。

「貴様——何者だ」

「ただの弓兵だが。君の見立ては間違いではあるまい」

「戯言を。弓兵風情が宝具を防ぐほどの盾などをもつものか」

「場合によっては持つだろう。」

だが、それもこの様だ。魔力の大部分を消費したというのに片腕を潰されアイアスも完全に壊された。

……………全く私が持ちえる最強の守りだったのだがな、今は」

そうは言っているが実際余裕そうだな。

俺はアーチャーとランサーの元へ歩み寄る。

「やっと姿を現したか、デバガメはよろしく無いな……」

「シグルドのマスターか、見るなら隠れてないで普通に現れれば良かったのにな」

「俺が普通に居たら邪魔だと思ったのだな」

俺とランサー、アーチャーは何事も無かったかのように言葉をかける。

「ふう、では私は行くでしょう、キャスターは苦戦して私の監視を出来ないでいるから、今がチャンスだ」

「……そうじゃねえかとは思ったけどな。テメエ、元からそういうハラか」

「無論だ。言っただろう。勝率の高い手段だけを取る、と」

「——ふん。とことん気に食わねえヤロウだな、テメエ」

「……」

アーチャーはそう言うてはいるが、どうせ寝返ったのは複線だろうな、士郎を殺すための。

ランサーは踵を返し、その直後、何を思ったのか立ち止まり、近くの草むらに体を預けていた。

アーチャーは俺がランサーの方を向いている間に霊体化して先に行ってしまった。

俺も教会の中に入り、士郎達の下へ行く。

地下への階段の途中、キャスター達の姿がギリギリ見えるくらいの場所に奴はいた、それは先ほど霊体化して先に行ったアーチャーだ。

「……やはり来たか」

「来ては行けなかったか？」

俺は口元を歪めながら返事をした。

それに対抗してかアーチャーも口元を歪めながら皮肉を言ってきた。

「なに、君はこのような所に来る愚か者じゃないと思ってたんだが私の勘違いだったようだ」

「それは、褒め言葉と思ってるいいのか」

「ああ、どう取ってくれても構わんよ」

俺とアーチャーは口を歪めながらお互いを睨む。

すると視界の隅にキャスターに攻撃を相殺され、倒れる遠坂が写る。

「すまないな、お前に構ってる暇は無い」

「――ぬ？」

俺はそう言ってこれから起こる遠坂の動きに夢中になる

遠坂の中国拳法の連携技が綺麗に決まり、キャスターを壁まで吹っ飛ばした。

まだまだ荒削りだが才能はある、というか中国拳法をやっている者の中で上位にギリギリ入るだろう、地道に鍛錬すれば将来化けるぞきつと。

「アーチャー、遠坂の動きを見たか？寸頸からの連携、キャスターのヤツ何が起こったのかわからないだろうな」

「ああ、そうだな。あんな行動を取る魔術師を見たことが無いからだろう。キャスターは凜の動きに目が追いついて無いからな。その点、凜はキャスターが肉弾戦を仕掛けられたことが無いということを予測して、この奇策に掛けたんだろうな。全く、大したものだよ」

ハァー、とアーチャーは溜息を吐いて先ほどまで中腰だったが立ち上がる。

「さて、私は下に行くが君はどうする？」

「俺はここでもう少し様子を見る」

「良い判断だ」

そう言いアーチャーは階段を下りていく。

それと同時に、葛木の声が聞こえた。

「キャスター、セイバーを起こせ。甘く見ていい相手ではなさそう
だ」

「ええ。的確な判断ですわ、マスター」

キャスターの指が祭壇にいるセイバーに向けられる。

セイバーに掛けていた強力な呪いの縛めを解こうとする。

と、その時……

“——ああ。それが後数秒ほど
早ければな”

声が聞こえた瞬間、葛木の頭上には無数の剣が展開され、機会を窺うように全ての剣は空中に静止する。

キャスターはそれに気付き

「宗一郎様——」

己が身を盾に葛木前に立つ。

“ 投影、開始 トレース・オン ”

その言葉が聖堂内に響き渡ると、展開されていた全ての剣が、葛木を守るキャスターに豪雨の如く降り注ぐ。

降り注いだ剣は、キャスターにの肉を裂き、断ち、貫いた後、幻のように消えていく。

キャスターが居る場所には、夥しい血が撒き散らされている。ぐらりと、血まみれの体で、背後の葛木へ振り返る。

キャスターは崩れ落ちる体で、葛木の顔に手を当てて何かを喋っている。

すると、直ぐにキャスターの体がこの世から消えた。

「キャスター、聖杯戦争に参加せず、この戦いから身を引けば、お前の望みは叶ったのにな」

俺はそう言い、創った煙管に魔術で火を灯して吸う。

聖堂に向けていた目は天井の暗い闇に向けた。

ゴン

数分後、聖堂内に鈍い音が響き渡る。

「早いな、まだ吸い終わっていないのだが・・・」

起き上がり煙管を消し、階段を下りる。

階段を下りきると、士郎がセイバーの元へ駆け寄っていく。

さて、俺は何もしなかったんだ、助けてやるか。

・・・まあ、助ける必要は無いがな。

俺はグラムを創造し、士郎の目の前に転移する。

ギギギギイイン

丁度、セイバーは危険を察し、士郎を突き飛ばす。

「邪魔をしないでくれるかな」
「無理な事を言うな」

俺とアーチャーは睨み合う。
だが、直ぐに睨み合いは終わる。

「アーチャー、何のつもり!？」

遠坂はアーチャーに詰め寄る。

「芝居はもう終わりでしょう? キャスターは倒したんだから、もう勝手な行動は許さないわよ!」

ふう、熱くなると本当に周りが見えなくなるんだな。

「遠坂、今の状況を考える。アーチャーにはマスターがいなく、お前はもうマスターでは無いんだ」

「あ……!!」

「そう、その小僧の言うとおり、オマエは私のマスターではない。はっ、許さないだど? 笑わせるのは止めてくれ」

「アーチャー……!!?」

「凜、オマエとの契約は切れている。自由になった私が、自ら人間の手下になると思うのか?」

アーチャーは呆れ口調で遠坂に言う。

「アーチャー、士郎を殺すのは止めておけ。まあ、俺が居る限り士郎に触る事すら出来ないだろうがな」

「まさか、本当なのアーチャー!？」

「そうだ、私の目的はその衛宮士郎を殺すことだ。だがそこに才

「マエがいては些か面倒だ」

「———！」

遠坂が飛び退き、膝をついている士郎の方へ駆け寄ろうとするが、遠坂の行動は二メートル程の大剣が弧を描いて出来た鉄格子に封じられた。

「チツ、反応が遅れたか」

俺は士郎の方に背を向けアーチャーと対峙する。

「そこを退け、令呪の縛りが無くなった今がチャンスなのだ」

「はいそうですかと退く奴はいないだろうな」

「・・・そうか、なら」

アーチャーが双剣を投影する。

俺はグラムを構え、戦闘態勢に入る。

俺が構えると同時にアーチャーは双剣を投げる。

「ふん、こんなものに当たるわけが———ッ———！」

俺に投げられた干将が避ける寸前で方向を変え、遠坂の元へ飛んでいく。

「間に合うか」

遠坂の元へ疾走し、干将を弾いた瞬間———

「蒼緋、危ない———！」

ドボツ!!

アーチャーが俺の隙を突き、鳩尾に蹴りを入れられ、壁まで吹っ飛ばされる。

「ぐううああ」

くそ、アーチャーめ強化して蹴ったな。
俺は立ち上がり、アーチャーを見る。

「ほう、手加減はしたが私の蹴りを食らい立ち上がるとはな。ふむ、なかなか頑丈だな、並の人間ならば内臓が破裂しているぞ」
「俺は普通じゃ無いからな」

そうドラゴンスレイヤーの力がなければやられていただろう。
だが、さすが英霊、手加減したのに体を動かすことが出来ない。

「なんでよアーチャー！アンタまだ士郎を殺すつもりなの？」

と俺の後ろ、剣に囲まれている遠坂がアーチャーに問いたです。

「そうだ、私自らの手で衛宮士郎を殺す。それがだけが守護者になった“オレ”の、ただ一つの願望だ」

「な——に？」

アーチャーの話を聞きセイバーは動くのが困難な体に鞭をうち士郎とアーチャーの間に立つ。

「アーチャー。アナタは、まさか。」

「……そうだ。いつか言っていたな、セイバー。オレには英雄

としての誇りが無いのか、と。そんなもの有る筈が無い。この身に埋めているのは後悔だけだよ。

オレはね、セイバー。英雄になんてならなければ良かったんだ」

「――」

セイバーの体から力が抜けていく、戦意を失ったんだろう。

「そういうことだ。そこを退いてくれセイバー。その体で、マスターがいらない体で無茶をすると直ぐに消えるぞ。もう衛宮士郎にはマスターとしての資格が無い、肩入れをすると君の願いが叶わなくなるぞ、セイバー」

「それは出来ない。士郎は私のマスターではありません、だが契約は消えない。彼を守り、彼の剣となると誓った。聖杯戦争の事を知らなかった彼は、それでも私の一方的な契約に応えてくれた。その信頼を、裏切ることなど出来ない」

セイバーの言葉を聞き終わると、アーチャーは目を瞑り、直ぐに開き。

「ならば、偽りの主共々ここで消えろ」

アーチャーの両手に双剣が握られる。

セイバーは剣を構える。

が、それからのセイバーとアーチャーの攻防は数秒で終わった。

「ここまでだ」

セイバーは床に手をつき、消えていく体を持ちこたえるのに必死で身動きを取れない。

アーチャーはそのまま剣を振り下ろす。

くそっアーチャーの蹴りでまだ体が……

「チィ——！！！」

「つああああああ——！！！」

士郎の気合が籠った声を上げ、双剣を投影し、アーチャーの剣を弾く

「ほう、まだしばらくは大人しくしていると思ったのだがな、目の前で女が殺されるのは耐えられないか」

「うるさい、オマエが殺したいのは俺だろう？なら、相手を間違えるな」

士郎とアーチャーは対峙し、戦闘が始まる。

だがそれも直ぐに決着が付いた。

やばいな、もしかしてもしかすると。

ここで士郎が死ぬということになるかも知れない。

「う、うおおおおお——！！！」

動かない体を無理やり動かし、近くで倒れているセイバーを遠坂の元へ放り投げる。

「任せたぞ」

士郎に止めを刺そうとするアーチャーに、先ほどの借りを返さんとはかりに、今の自分に出来る最高の蹴りを放つ。

「チッ、邪魔を——！！！」

“——告げる！”

汝の身は私の元に、我が命運は汝の剣に！

聖杯のよるべに従い、この意、この理

に従うのなら——”

聖堂に遠坂の音が響く。

この聖堂内にいる者は全て遠坂の方を向く。

“——我に従え！ならばこの命運汝の剣に預けよう・・・！”

遠坂は剣の檻から手を伸ばし、その手をセイバーが握る。

「セイバーの名に懸け誓いを受ける・・・！！
アナタを我が主と認めましょう、リン——！」

第十五話 再契約（後書き）

もう駄文過ぎて泣ける

誤字脱字、おかしい点を見つけたらコメントお願いします。

第十六話 裏切りの赤

「セイバーの名に懸け誓いを受ける……！」
アナタを我が主と認めましょう、リン——！」

セイバーが遠坂の手を握って契約が完了した瞬間、セイバーから歴大な魔力が奔流する。

「——チ。もとより凜と再契約させるつもりだったが、些か手順が違ってきたか」

アーチャーは舌打ちしながら、セイバーを見据えてぼやく。
俺はすぐさまアーチャーに声を掛ける。

「アーチャー、お前にはもう勝算はない。負けを認めるんだな」
「……ふっ、勝算が無いだと？笑わせるなよ小僧。オレにはまだ奥の手が残ってある。

それもここにいる全員を殺せるほどのな」

奥の手とは固有結界“無限の剣製” アンリミテッドブレイドワークス のことだろう。

だが、アーチャーはセイバーの聖剣を投影できる。

聖剣同士打ち合えばここは、その波動に耐えられずに崩壊する。

だがここで、先ほどのアーチャーの言葉を聞き、セイバーが一步前に出てアーチャーを見据える。

「アナタの宝具がどんな物かは分かりませんが、今の私に勝てると思っているのですか？」

「はっ、たかだか魔力が戻った程度で、よくもそこまで強気になる

ものだな!!」

そう言い、アーチャーはセイバーに向かって突進する。
俺はそれを見逃して、床に座り込む。

「——っ!!」

今分かったが、肋が一本逝ってるな。

アーチャーの蹴りが俺の肋の部分ににちょっと当たっていたんだろう。

「ちよつと当たっただけでこれか……」

俺は、剣と剣がぶつかる音を聞きながら、目を閉じて意識を集中し、肋を治癒魔法で治す。

ギン、ギン、ブウン、ギン、ギギン

凄いな、音だけでも戦いの激しさが分かる。

ギン、ギン、ブウン、ギン、ギギン、ドカァ!!

誰かが吹っ飛ばされる音と同時に骨はつながった。

立ち上がると、片膝をつくアーチャーが、セイバーの止めの一撃を剣を交差して防ぎなにやら話をしている。

「——何故、その様な結末を望むのですか。そんなことをしても貴方は」

「……ふん。間違えている、か」

アーチャーは一度だけセイバーを見て、

「それは此方の台詞だセイバー。」

君こそ、いつまで間違った望みを抱いている」

「——アーチャー」

セイバーはアーチャーの言った事が気になるのか、剣を緩める。

だがアーチャーは、それを見逃さず自由になった足でセイバーを蹴り飛ばす。

完璧な不意打ちだったにも関わらず、セイバーは華麗に着地する。

「・・・ふう。分かつてはいたが、やはり剣技では及ばぬか。なら、奥の手を使うまでだ」

アーチャーは持っていた双剣を消して、徒手空拳になる。

「奥の手を使う前に負けを認めるとは」

「負けを認める？セイバー、私はアーチャーだ、近接戦闘を行う者ではない」

そう言つてアーチャーは、直ぐに小声で詠唱に掛かる。

“ I a m t h e b o n e m y s w o r d ”

俺はすぐさま相手の能力をコピーする能力をオンにする。

「止めるアーチャー！！私は、貴方と・・・」

「セイバー。いつか君を解き放つものが現れる。」

それは今回ではなくようだが——次回も君に関わるのは私なの

だろうよ」

アーチャーは再び詠唱を開始する。

“ U n k n o w n n t o D e a t h . N o
r k n o w n t o L i f e ”

聖堂にアーチャーの声が響く。

「だがな、それも次の話。今のオレの目的は、衛宮士郎を殺すことだけだ。

それを邪魔するというならば、この世界はお前が相手でも容赦はせん」

左腕を上げて最後の詠唱をするアーチャー。

l a d e w o r k s ” “ ■ ■ ■ ——— U n l i m i t e d b

瞬間。アーチャーを中心に炎が走り、いつの間にか聖堂が荒野が広がり、剣が墓標のように地面に突き刺さっている製鉄場へと変貌する。

「これが、固有結界“無限の剣製”か……」

能力で俺に固有結界が使えるようにする。

さて、俺の心情世界はどうなっているのか楽しみだな。

「——固有結界。術者の心情世界を具現化して、現実を侵食する大禁呪。

つまりアンタは剣士でも弓兵でもなく……」

「そう。生前、英霊になる前は魔術師だったと言うことだ。」

「ということは、アーチャー貴方の宝具は……」

瞑っていた目を開き、アーチャーはセイバーを見て、

「そんなものは無い、ここにあるのは俺が今まで見てきた武器の複製だ」

「武器の、複製!？」

「そうだ、オレはオリジナルの宝具を見るだけで複製し、貯蔵する。それがオレの能力だ」

「これが、貴方の世界だというのはですか、アーチャー」

「セイバー、聖剣は使うなよ」

俺は一応、セイバーに警告する。

「何故です。彼を倒すには聖剣を……」

「ほう。蒼緋だったか？分かってるじゃないか」

「ふん、なめるなよ」

セイバーは俺とアーチャーの会話について来れず、ちよつと動揺している。

するとセイバーが訊ねてきた。

「何故、聖剣を使ってはいけないのでしょうか？」

「奴はお前の剣を、投影できる。だが、完璧な複製は出来ないが真に迫ることは出来るだろう。そしてアイツの聖剣とお前の聖剣が衝突したら……この場で生き残るのは俺と士郎だけだろうな」

聖剣同士が衝突したら、俺の張った結界が持たないかもしれないか

らな。

俺一人なら、アヴァロンで生き残れるがな。

「はあ、呆れるくらいに私が言おうとしたことを悉く先に喋るとは・
・・・」

アーチャーは肩を落とす。

そしてセイバーは、何か思いついたのか、アーチャーを見据える。

「貴方は、私の聖剣の正体を・・・」

「ああ、知っているとも」

「な——貴方は!!」

「そうだ間違っても聖剣は使つなよ。その場合、死ぬのは我々ではなく、周りの人間だ。

・・・おまえの事だ、自分の身を犠牲にして、そこに居る小僧を助けるだろう。

オレとて聖剣を投影しては、自滅する。

と、言うことはその男が言ったとおり、生き残るのは衛宮士郎と蒼緋、お前達二人だけが生き残ることになる。それでは全く意味が無い」

アーチャーの左腕が上がる。

荒野に刺さっていた剣が、次々と浮遊して切っ先がセイバーと俺に狙いを定める。

そして、オレの方はセイバーに向けている剣の数倍の量の剣が狙いを定めていた。

「くっ!!」

戦闘系の能力を全てオンにする。

うと、マスターの命には代えられまい」

セイバーはアーチャーの言葉を聞き、何を思いついたのか、

「果たして、士郎を守ることが出来るのは私だけなのでしょうか？」

「どういう意味だ、セイバー？」

セイバーは俺をチラリ、と見る。

そのことに気付いたのかアーチャーが笑う。

「そんな手負いの小僧如きに私が敗れると思っているのか？」

「思っています。ソウヒ今すぐその刀を抜き、傷を治してください」

セイバーの思惑に俺は気付く。

そうか、アヴァロンを使えば……。

正直、先ほどまでアヴァロンを防御用に使うことしか頭に無かった。

「分かった」

俺は直ぐに返事をし、剣を抜……けない？

「ククク、そんなこともあるつかと、その剣には細工を施していてな」

俺の右足の太ももに鰐元まで刺さっている剣を見ると、刃がおかしな形になっていた。

そう、刀身の数箇所が釣り針の先ようになっていたのだ。

これじゃあ、抜けんな。

「無理だセイバー、この剣は抜くことが出来ん」

「本当ですか!？」

「ああ……」

セイバーは落胆し、アーチャーは呆れて笑っている。

「ククク、頼みの綱は動けないようだな。では、私は行くと……」

「郊外だ……」

士郎が体に鞭を打ち何かを喋った。

「何だと？」

「郊外の森の奥に城がある、そこなら誰の邪魔も入らないだろう。俺に文句があるんだろう? いいぜ聞いてやる、言いたいことがあるのは、こつちだって同じなんだ」

「郊外の森……アインツベルンの城が、確かにあそこならば邪魔は入るまい。」

「いい覚悟じゃないか、衛宮士郎」

「うるさい、そんなことより——それまでに遠坂に手を出してみろ、その時は俺達三人でお前を殺してやる」

俺はそんなのに加わらんぞ、一対多数は嫌いなんだ。

「よかるう。場所を指定した見返りだ、一日は安全を保障してやるう。」

——だが急げよ。マスターがいない、俺はそう長くはもたん。先ほど言ったとおり俺は良くて二日、存命できる。その前にお前を殺せないとあらば、人質をバラしかねんからな」

そうして、アーチャーは笑いながら聖堂から姿を消した。

ドサッ

音が聞こえたほうを見ると、士郎が膝をついていた。

「シロウ……！！無茶をして、いくら貴方でもアーチャーと同じ投影は早すぎる」

セイバーは士郎を抱え込み説教？をしている。

でも、俺にはやらなければいけないことがある。

そう、この剣をどうするかだ。今のセイバーなら俺の足に刺さっている剣の鏝元に斬りつけて折ることは出来る、が危なさそうだから止めておこう。

「はあ、全く持って解決策が思い浮かばん」

アーチャーめ、他の剣は消しておきながら、俺に刺さった剣だけ消さずに消えるとは、舐めた真似をしてくれる。
さて、本当にどうする。

「ソウヒ、シロウが危険だ直ぐに帰りましょう」

「分かった。治療は家ですか」

俺は太ももに刺さっている剣と血を、認識阻害魔法で他人には見えないようにして、教会を出た。

「お。事は済んだみたいだな、坊主」

教会の前の広場には青い槍兵がいた。

セイバーは士郎に貸したまま、広場にいる槍兵を睨む。

「止めろ、セイバー。そいつは俺達の作戦を手伝ってくれた功労者だ」

「は？あのランサーがですか？」

「・・・そうだ蒼緋の・・・言ったとおり、だから・・・今ここで・・・戦わないでくれ」

「・・・分かりました。二人がそこまで言うのなら止めておきましょう」

ランサーはセイバーを見て愉しんでいる。

「それそうと、貴方は何故士郎たちに協力したのですか？何か企んでいるのですか」

「あ？なんだ、バカだろおまえ。んなもん有るに決まってんじゃねえか。

裏で企んでなきや誰が余所の手助けなんかするか」

本当に気持ちが良いほどはつきり言うな、こいつ。
そして、驚くセイバーを見て愉しんでいるしな。

「さて、早く帰るぞ。傷を治療しなければお前もともに戦えないだろう」

「あ、ああ。そうだな、俺にはこんなことをしている暇が無かったな」

「そうでした、早く家に帰りましょう」

「・・・？」

俺たちが帰ろうとすると。

「おいおい、ちょっと待てよ。万事首尾よくいった——て訳じゃ

なさそうだな。何が起きたんだ、坊主」

「遠坂がアーチャーに連れて行かれた。これから取り戻しに行くんだ」

士郎が気力の無い声で、ランサーに説明をする。

「なに？おい、そりゃあどついう事だ」

「――」

士郎は疲れ果てて喋れない。
なら俺が説明するか。

「簡潔に言つと、アーチャーは二回遠坂を裏切つたと言ふことだ」

「……クソッ、気が変わった。本当はもう手助けはしないつもりだったがな、もう少し手伝わせる。このままじゃ寢覚めが悪い」

そう吐き捨てて、ランサーは歩き出した

セイバーが驚きながら、ランサーの背中をみて、呟いた。

「……まいった。士郎達はどのような魔術を使って、彼を味方に引き入れたのですか？」

別に何もしていないんだがな。

そうして俺達は歩き出すと。

「――っ！！」

先ほどまで痛覚が麻痺して、痛みが無かったのに、今頃痛みが来るなんて。

これじゃあ歩いて帰るのは無理だな。
手っ取り早く転移でもするか。
俺は右腕を上げて指を鳴らす。

パチン

瞬間、俺達は衛宮邸の庭に転移した。

「ほお、お前魔法が使えるのか？」

「まあな、それがどうした？」

「いや、俺も魔術師の端くれなんでね、魔法を見れて感動しているぜ」

確かに、魔法使いなんてそこら辺にいるものでも無いしな。

「まあ、見たいならいつでも見せてやる。だが早く士郎を休ませなければ」

「おっと、そうだったな……ってあれ？セイバーと坊主がいねえぞ」

ランサーは辺りをキョロキョロと見回している。

「二人なら先に家に入っていたぞ」

「俺としたことがオメエと話をしてて気付かなかったとは」

「そんなことはどうでもいい。俺は早く士郎の傷を治療しないといけないからな。」

「適当に休んどいてくれ」

「分かった」

そう言ってランサーは縁側に寝転がった。

さて俺も土郎の傷を治して仮眠でも取るか。
俺は土郎の部屋に行き、治療を始める。

「すごい、これが魔法の力なのですか。傷が見る見るうちに消えていく、これはまるで」

「アヴァロンみたい、か？」

「ええ、アヴァロンもこの程度の傷なら、これぐらいの速さで治りますから」

まあ、アヴァロンの回復能力は魔法の域に達していると言っても良いからな。

「よし、これでいいだろう。後は体力を回復させるだけだ」

「お疲れ様です。私はここにいたので、蒼緋も仮眠を取ってきてはどうでしょう」

「そうさせてもらおう」

俺は土郎の部屋を後にして、自室に向かう。

自室に着き、布団の上に胡坐を掻き、瞑想をする。
瞑想の途中、俺は凄いことに気付いた。

「何か俺の戦う場面が少ないような気がする」

第十六話 裏切りの赤（後書き）

ズー（ゝ。ん、い）ーン

もう駄文すぎるだろこれ

更新遅れて急いでやったから結構滅茶苦茶だ

てか誰か fate の五大元素の全部を教えてください

第十七話 救出

気分は上々、体調も申し分ない。

戦うことは無いかもしれないのに、なんで今日はこんなに調子がいんだ？

仮眠していた俺は調子が良すぎて、絶句する。

すると障子の向こうからセイバーが声を掛けてきた

「ソウヒ、シロウが起きましたので……」

「分かった。では、庭で待っていてくれ」

俺は服を着替えて部屋を出る。

庭には、士郎とセイバー、ともう一人ランサーがいる。

「お、やっと来たか」

「ソウヒ、遅いです!!」

「蒼緋、早く行こう」

セイバーはどうせランサーに弄られて起こっているんだろうな。

「行くか」

俺はいつも通り、腕を上げて指を鳴らす。

パチン

俺達は、森の外に転移した。

「あれ？城まで転移するんじゃないのかったのか？」

「そうです、時間が無いのですよ」

まあ来るだろうと思ってはいたが。

「城まで歩いて行つて、体を温めるんだ。いざという時に体が動か
なかつたらどうしようも無いからな」

「あゝ確かに、戦う前に軽い運動すると動きやすいんだよな。なら
歩いて行くっきゃねーだろ」

「むう、貴方達がそこまで言つのなら……」

「そうだな、アーチャーを倒すにはそれぐらいしないとな」

ランサーのフロアのおかげで何とか、歩いていくことになった。
余り早すぎるといけないからな。

数時間後、夜が明ける。

森を進むごとに口数が減つて、沈黙が重たくなってきた。
だがそれも直ぐに終わる。

何故なら、もう城の城門を開けて中に入ろうとしているからだ。
中に入り、階段の上を見る、そこには赤い弓兵が立っていた。

「来たか。随分と遅い到着だな、衛宮士郎」

ロビーに良く響く声でアーチャーが皮肉を言う。

「……………」

対して士郎は声を出さず、アーチャーを睨む。

「……………」ようやく気付いた。あのペンダントが二つあるはずが

無い。アレは、元々」

「そうだ。アレは命を救われたお前が生涯持ち続けたもの。この世に二つと無い、遠坂凜の父の形見だ。……だが、そこにいる男は俺の正体に直ぐに気付いていたがな」

アーチャーは士郎に向けていた視線を俺に向ける。

「すまんな、士郎」

俺は簡単に一言で謝る。

「いや、別に気にして無いよ。逆に俺はもっと早くに気付くべきだったんだ、ヒントはいくつもあつたんだ、特にあのペンダント、アレで気付けなかった俺が悪い」

驚いたな、てつきり質問攻めが来ると思ったんだが……今はかなり冷静に対処しているな。

「——時に衛宮士郎。英霊の召還には必ず触媒が必要となる。お前がセイバーを召還したように、召還者と英霊には繋がりがない。なくてはならない。」

だが、凜には英霊を召還する触媒が無かった。故に、彼女は――

「召還したサーヴァントに何の縁も無いと思い込んだ。だが、英霊の召還には偶然は無い、召還者と英霊には必ず物質的な縁が必要、ということか……」

アーチャーが俺を感心？したようにじろじろ見てくる。

「本当に私が言おうとしたことを先に言うな、君は……」

「まあな」

実際アーチャーの言葉をほとんど真似ているだけなのだが・・・。

「では、話の続きをしよう。召還者ではなく、呼び出された英霊の方が召還者に縁のある触媒ものを持っていた場合のみだ」

「―――っ」

士郎、そこは驚く所では無いと思うんだが・・・。
いや、普通は驚くべきなのか？良く分からんな。

「アーチャー。遠坂はどうした？」

「あの小娘ならこの城の何処かに置いてきたが、気になるのなら急げ。」

お前が来るのが遅いのでな、間桐慎二にくれてやった所だ」

「な―――んだと」

「お前との約束は守っている。俺は手出しはせん。」

他の人間が彼女に何をしようが、俺には関わりの無いことだ」

元の世界でこの場面を何回も見て思ったが、自分の目的のためには昔惚れていた女をも犠牲にすることは、最悪だな。

「まあ、結果は見えているがな。間桐慎二は遠坂凜に情欲と敵愾を抱いている。」

アレに凜を預けたらどうなるかは考えるまでも無い。

凜に挑発された小僧は我慢できず口火を切り、今頃は死姦の真っ最中かも知れんぞ」

「―――！―――」

さっきまで冷静だった士郎の顔が怒りに満ちて険しくなる。

「あー、焦るな坊主。あのお嬢ちゃんなら俺に任せろ。
なに、直ぐに助け出してやる」

「え……ランサー？」

士郎はランサーを呆けた様に見て瞬きをする。

「士郎、ランサーはマスターに遠坂を死なせないように命令されたんだ」

「……ほう、良くそのことを知ってるな兄ちゃん。まあ、そんなことよりその兄ちゃんの言ったとおりだ。

だが、まあ昨日のは悪くなかった。自分の仕事を気に入れるってのは、俺にとってはめずらしい」

そう、軽口を言いながら、ランサーはアーチャーを無視し、西側のテラスにへ向かって行く。

「ランサー」

士郎はテラスに向かっていているランサーの名前を呟く。
それが聞こえたのかランサーは振り返らずに喋りかけた来た。

「気にするな。これはあくまで俺の趣味だ。

……ま、今まではいけすかねえ命令ばかりだったからな、この命令は最後まで守り抜く。

そっちはそっちで、自分の面倒だけ見てやがれ」

士郎はその言葉を聞いて安心したのか、一時的に緊張を解き

「……ああ、遠坂を頼む」

「あいよ」

そう言つて手を振つて気軽に声を返す。
と、何を思い出したのか、ランサーは足を止めて振り返つた。

「おい。何してんだセイバー、お前も来るんだよ」

「――」

セイバーは苦しげに目を細めたあと。

「いいえ。私はここに残ります、ランサー」

ランサーはセイバーの言つたことが意外だったのか、驚いている。

「本気か？今のマスターはお穢ちゃんだろう。サーヴァントが守るのはマスターだけの筈だが」

「分かつています。ですが、それでも私はここに残りたい。

……私はこの戦いを見守らなければ」

その言葉を聞いてランサーは呆れ顔になり

「――そうかよ。なら好きにしな」

ランサーの体が消える。

テラスまで跳躍し、振り返りもせず通路に消えた行つた。
さて俺も付いていくか。

この戦いは魔法で、移動中に見れるからな。

「俺はランサーに着いて行く」

「はい。リンをお願いします、ソウヒ」

「俺からも頼んだぞ、蒼緋」
「了解した」

そして俺もランサーのようにテラスに跳躍し、通路に入る。
ランサーに追いついて一緒に行こうとしたが、さすが英霊、かなり
の速さで走るから見失ってしまった。

——数分後

しまったこれならば、先日この城の構造を調べればよかった。
……そう今の俺は道に迷っている。
どうする何か、探知系の魔法なんかあったか？
一応、俺は能力で得た、魔法の知識を総動員して探知系の魔法を調
べる。

——さらに数分後

探知系の魔法七十個……どれを使えば良いか良くわからん
とにかく色々試したがこの世界の知識が少ないために、ほとんど使
えなかった。
探知系などの魔法はこの世界の知識、まあ地理が必要なのか、参っ
たな。
俺が知っているのは冬木の簡単な見取り図くらいを見ただけの知識
しかない。
本当に困ったどうする。

——そしてさらに数分後

あるじゃないか、一つ。
ドラゴンスレイヤーの能力の内、まだ使ったことが無いものがある。

それは一般人には“気”と呼ばれているが、俺の使っているドラゴンスレイヤーの世界では“エクシード”と呼ばれている。

その用途は多々有り、寿命で死にそうな人でも、一定時間なら元気になったり、気配を察知するために使ったりなど、そのほかにも色々なことが出来る。

俺は走りながらエクシードを広範囲に広げ、遠坂の居場所を城の隅々まで探す。

と、直ぐに反応があった、一箇所に四人……遠坂と慎二、ランサーと言峰か。

俺は先ほどまでの数倍の速さで廊下を走る。

直ぐに目的の場所が見えてきた。

俺は目的の場所の扉を走っている今の状態で蹴破る。

ドガアッ!!

「ふう、間に合ったか？」

「ほう、貴様は……」

「兄ちゃんか、びびらせんなよ」

「蒼緋!!」

周りを見ると、言峰が左腕を掲げている。

なるほど、言峰はランサーに令呪で自害させようとしていたのか。

「言峰、貴様ランサーを自害させようとしたな」

「そうだが？それがどうした、言うことを聞かない駒など必要ないからな」

俺と言峰は睨み合う。

すると言峰は早口で何かを呟く。

すると、背後から物凄い殺気が放たれる。
なんだと、何故後ろから…………。

「すまねえな、兄ちゃん」

その言葉のおかげで咄嗟に横に飛んで赤い魔槍をかわす。

「さあ、ランサーその者を殺せ」

楽しそうな声を発しながら言峰が俺とランサーを見ている。

「チッ」

「避けてくれよ、兄ちゃん!!」

クソッ、ランサーが手加減してくれている内に何か解決策を立てねば。

一つだけ解決策はある、だが懐に入れなければ意味が無い。
どうする…………。

ドスッ

部屋が狭いせいか、避けきるのも限界があつたか。

足を貫かれた、魔法を使っても流石にゲイボルグの傷は治らないだろう。

これでは、避けることも出来ん…………ふむ、これで俺も終わるか、呆気なかったな…………。

俺は目を閉じ、迫ってくる赤い魔槍に貫かれるのを待つ。

……………ん？

貫かれていない、どういうことだ。

——はあ、こんなんで諦めるなんて俺の見込み違いだったかなあ——

この声は……。

俺は目を開けて眼前にいる、魔槍を素手で掴んで止めているバカを見る。

「貴様がいればこんなことにはならなかったんだぞ」

「へいへい、そりゃあ割るうござんした、ねっ!!」

久しく姿を見せたのは、シグルド掴んでいた槍を横に放り投げるように振り払う。

「シグルドじゃねえか。今まで何処に居やがった」

「はっ、んなもんしらねーよ。……だがなこの通り」

シグルドは右手を横に突き出す、するとその手の中に壊れたはずのグラムが在った。

「これで、心置きなく戦えるってもんだ」

「ああ、俺もだシグルド。だが、俺は令呪でその兄ちゃんを殺すように命令されたんでな」

「そう、か。それは残念だその命令は一生達成できないだろうな!!」

シグルドは言葉を言い終わると同時にランサーの懐に一瞬で入り、剣を切り上げる。

「チィ!!」

「クソッ惜しかったのに」

ランサーとシグルドがこの狭い部屋の中で争っている最中だ。
俺はその戦いを腕を組んで観察していると、いきなり横から衝撃が来た。

「ガハアッ!!」

俺の声を聞いてランサーとシグルドが此方を向く。

俺のいた場所の横には言峰が拳を突き出したまま此方を見ていた。

「ヒュー、ヒュー、ヒュー」

呼吸が出来ない、人体急所を突かれたか。

「油断したな」

「貴様」

俺は今の状態から回復しようと魔法を使おうとするが、

「そうはせんよ」

ドボッ

「グッ」

ドラゴンスレイヤーの体じゃ腹を蹴られても痛くも無いんだが、流石に呼吸困難の状態で、肺の近くを蹴られたら流石に危ないな。言峰は俺の首に手を掛けて、首の骨を折ろうと力を入れてくる。

「ソウヒ、待ってるよ今すぐ助けに……」

「この瞬間を待ってたぜ」

ドスッ

「グウウッ」

「グッ、ランサー貴様」

ランサーは言峰の後ろから心臓を貫き、そして言峰の体を貫通した槍は俺の方を貫く。

「ヘッ、これでこいつの令呪の縛りが消えた、仇は取らせてもらったぜ」

ランサーは優越感に浸っている。

「ランサー、できれば早くこの槍を抜いてくれ」

「お？ああ、悪かったな兄ちゃん」

ランサーはズボツと勢い良く槍を抜く。

「蒼緋、早く傷の手当てを」

今まで何処にいたのか遠坂が駆け寄ってくる。

遠坂ならこの傷を治せるな、ランサーに心臓を貫かれた士郎の傷を治していたし。

俺は魔法で呼吸困難を治すと、すぐさま大量の魔力を込めた宝石を創る。

「これを使って俺の傷を治してくれ」

そう言つて俺は遠坂に宝石を投げ渡す。

「分かつたわ」

遠坂は直ぐに作業に取り掛かる。

・・・・・・・・・・・・・・・・体の痛みが無くなつて来た。

――数分後

「これで終わり」

「助かつた」

「じゃあ私は先に行くわね」

遠坂は治療が終わると直ぐに部屋を出て行つた。

「治療の礼をしなければな」

俺は魔法で遠坂を転移させた。

「さて、邪魔者はいなくなつたな。どうせお前等、戦うんだらう？
なら外に出るぞ」

「ああ、前回の様にはいかないぜ、ランサー」

「ハッ、ほざけ。どうせ勝つのは俺なんだからな」

俺たちは倉庫から出ると、ランサーは振り返り倉庫の床に何かを書き始めた。

すると、ランサーが何かを書いたところから、炎が燃え上がり広がっていく。

「“火” アンサスのルーンか……」

「俺のアンサスはそんじょそらの魔術師より強力だぜ」

俺の呟きが聞こえたのかランサーは自分の自慢をする。

「ケツ、たかがルーンごときで自慢すんじゃねえよ」

「かー、この凄さがわかんねえのかオメエ。だからこれは……
・etc」

ランサーはルーンの事になると話に熱が入り、延々と喋り続けている。

「だっー！！さっきからもうそんな話聞きたかねえって言ってんだろ！！」

「なんだ、聞きたくねえのか？ここからが面白いのにな、後悔すんなよ？」

「誰がするか！！」

ランサー。お前、人を怒らせるのが得意なんだな……。

俺は二人の前を歩き、二人の口げんか？を聞きながら士郎たちの下へ行く。

実際、魔法で士郎たちの戦いを見ようとしたが予想外のこと（道に迷った）があつて見ることを忘れていた。

士郎とアーチャーが戦う所は俺の中で結構好きな場面なんだが見れなかった……かなり萎えるな。

「おつと着いたみたいだぜ」

「結構早く着いたな……ってうおっ！！煙が目に！！」

廊下からテラスに出ると、そこは炎に包まれており、誰も残っては

いなかった。

「やべーな俺たちもさっさとズラかるぞ」

「そうだな」

「ちよつと待つてくれよ」煙が目にしみて、ゲホツ、ゲホツ」

シグルドの腕を掴み俺は窓まで近づき、そこからシグルドを背負い投げで外に放り投げた。

シグルドはガラスを豪快に破り、背中から地面に落下した。

「さて道は開いた行くぞ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

ランサーは驚いて言葉が出ないようだ。

それを無視して俺は先に飛び降りる。

そして、俺ははまだ悶えているシグルドの腹部に着地した。
もちろん膝から。

「おーぶるるああああああ」

なんか似たような悲鳴をゲームで聞いたことがあるな・・・・・・・・
まあどうでもいいか。

「よつと」

遅れてランサーが降りてきた。

ランサーは足元で悶えているシグルドを見て哀れむ？ように声を掛ける。

「オメエ何してんだ」

「何って、見てわかんたる!!」

「ああ、まあ、一応上から見てたから何が起こったのかわかったけど」

「なら訊いてんじゃねえよ!!」

シグルド、俺の膝が効いたからってそこまで怒ることはないだろう。いや、だがあれほど綺麗に鳩尾に入ったんだ、怒るのは無理ないか。

「おい、兄ちゃん」

俺が考え事をしている最中にランサーが声を掛けてきた。

「どうした？」

「もう俺にはマスターはいない、いつ消えるかも分からん、だからな今すぐシグルドとの決着を付けさせてくれねーか」

「そうだな」

俺は頷きシグルドの方を見る。

驚くことに、シグルドはもうグラムを顕現し、立って瞑想している。

「向こうは準備が終わっているようだが？」

「それは好都合。それじゃあまた開始の合図を頼む」
「分かった」

俺の隣にいたランサーは直ぐにシグルドの近くに行き、ゲイボルクを顕現させ、軽く振り回して構えを取る。

準備が出来たことを確認して、俺はそこら辺に落ちている石を拾い上に投げる。

石が着地した瞬間、二人の魔槍と魔剣がぶつかり合う。

第十七話 救出（後書き）

F a t eの五大元素ってなんですか？
全部知ってたら教えてください。
後、誤字脱字もあつたら教えてくれ

第十八話 雌雄決する二人の戦い

――ドス

ギン、ギギン、ギン、ギン、ギン、ギン

石が着地した瞬間、二人の魔槍と魔剣がぶつかり合う。

「うおおおおおおっ！！」

「はああああああっ！！」

やるな、シグルド。この前戦いは双剣だから、ランサーの攻撃を防げたばかり思っていたがそれも俺の勘違いだったようだ、前の戦いより遥かにレベルが高い。

「おいおいおい。どういうこった、オメエ前より腕が上がってんじやねえか」

「はっ、この前は不慣れな双剣の練習をしてたんだよ」

「ていうことは。テメエ、オレを練習台にしてやがったな」

「大当たりっってうおっ！！」

ふざけた瞬間、ランサーの横薙ぎの一閃がシグルドを襲う。

それを、後ろに跳躍し、一回転して着地する。

「ちっ、外したか」

「つぶねえ。お前、オレを殺すきかつ！！」

「はあ？ばかじゃねーの、俺らは今殺し合いをしてるんだぜ」

「・・・・そうでした・・・・」

さっきのは本気で言ったのか・・・・・・あいつのマスター

として恥ずかしい。

「さて、こんな話は終わりにして、小手調べは終わりにしようぜ」
「そうだな時間も無いし、これから全力でいくぞ」

忽ちの内にランサーとシグルドは殺気を発し始め相手を牽制し始めた。

ランサーとシグルドは互いを睨み、そして微動だにせず戦闘が膠着状態に入っている。

二人はまだ動かないか、いや動けないのか？

俺は一人がいつ動くのか静観する。

何十分動かないんだ。

何十分動かないんだ。

俺は痺れを切らしその場に落ちていた石を、二人の間に投げる。

ギン

いつの間にか二人は間合いを詰めて鏢迫り合い？（ランサーは槍だ
が）をしている。

「グッ
ウウ」

「ハアアアア」

ランサーが上、シグルドは下の状態で鏢迫り合いが続いている。これはランサーに分があるな、剣とは違い、何処を持っててもいいか

らな。

しかも槍は持つところによって力の加減が出来る。
罅迫り合いはランサーの……

シューイイイン

いつの間にかシグルドはゲイボルクを受け止めていた刃から剣腹に変え、斜めに受け流していた。

「チイツー!!」

「もらったー!!」

シグルドは受け流してから流れるようにランサーの懐に入り横に一閃する。

だが、ランサーは受け流された勢いで、そのまま跳躍して避ける。
着地してすぐさま後ろを向き、シグルドに向かって疾走し、ランサーが渾身の突きを放つ。

ビュッ!!

だがシグルドは待つてましたとばかりに笑い、ランサーの突きを回転して避け、その遠心力を使い、剣を横に一閃。

見た目完璧に龍巻閃だな、しかもタイミングも申し分ない。

ザンッ

今度の攻撃はランサーの腹を切っていた。
そしてランサーが体勢を崩し、前のめりに倒れ、シグルドはその隙を見逃さず追撃する。

ヒュンツ！！

だが、それも空しく空を切った。

アレだけの傷でよく動けるものだな。

さすが、心臓を貫かれても動ける男だ、あの根性は尊敬に値する。

「クツクツクツクツクツク」

「????」

俺が感心していると、ランサーの笑い声が聞こえた。

「おいおい、何笑ってんだよ」

「いや、こんな戦いやってたら笑いたくなるだろ。

こんな、こんな最高の戦いはよお！！」

言葉を言い終わった途端、ランサーが槍を構え直し、魔力が辺りの空間を埋め尽くす。

それに合わせ、シグルドも剣に魔力を注ぐ。

宝具を使う気が、もうこの前の様には行かないだろう、シグルドの負けだな。

「ランサー、お前に良いこと教えてやるよ。俺の幸運はなかなだよ」

「ほう、なら絶対に外すことはできんか。

何のつもりで言ったかは知らんが、後悔すんなよ」

「はっ、後悔なんぞ微塵もしてねえよ」

ふう、やはり馬鹿だな。

でもあいつがそんなことを言う筈が無いからな、何か策でもあるんだろう。

「行くぜ……刺し穿つ ゲイ

死棘の槍”

ボルク ！！」

真名開放をした瞬間、赤い魔槍は点となってシグルドを襲う。
俺はシグルドの方を見るとある事に気付いた。

「……笑っているな」

そう、シグルドは絶対絶命のピンチの状態で笑っているのだ。
シグルドにゲイボルクが刺さる。

「ふん、馬鹿が余裕ぶってるからそんなことになるんだ」

俺は呆れ、右手の親指と人差し指で眉間を揉む。
右手を眉間から離し、空を見上げる。

「お前は、馬鹿で阿呆で間抜けで使えない奴だったが、忘れはしないぞ」

——人を勝手に殺すんじゃないやねえ！——

声が聞こえたほうを見ると、シグルドが此方を見ていた。
もしかしてまた脇で挟んだのか？
すると、ランサーの顔に皺が寄り低い声で喋る。

「テメエ、どういうことだ、幸運はCじゃなかったのか？」
「はっはっはっはっはー。残念、当たる瞬間、俺の能力の一つ鳥の
声を聞く能力を、代償に幸運を一時的に上げたんだ。えーと……」

多分今はA＋ぐらいだな」

「チッ、なんか裏があると思ったが、こんな事をするとはな、全く驚かせてくれるな」

「それは残念。ていうことで……死ね“栄光と破滅の魔剣”グラム　！！」

シグルドは真名開放をし、右手に持ったグラムを大上段からランサーの頭に切りかかる。

まさかの、一発逆転だな。

ザンツ！！

「……………何だと！？」

ランサーは斬られる瞬間体をずらし、槍を持っている右手を犠牲にして生き残った。

その事に驚いてシグルドか混乱して動かない。

それを見てランサーは、左手で槍を握り、足でシグルドを蹴り飛ばす。

「クッ、はあ、はあ、はあ、はあ」

「……………クッソ、驚いて何も出来なかった」

シグルドは立ち上がり、右腕の無いランサーを見る。

「利き腕が無いのにまだ戦うのか？」

「当たり前だ、俺は往生際が悪いんだ。それにお前には負けられん、お前に勝つには利き腕何ていらんからな」

「テ、テメエ」

ランサーに言葉にイラついたのか、暗くてよく分からんが、眉間に皺が寄っている。

「これで、最後だ俺の最後の奥の手、受けてみよ」

ランサーは後ろに飛びシグルドとの距離を取る。

まさか利き腕が無いのにアレを放つのか。

ランサーはゲイボルクを空に向かって投げる。

ゲイボルクは綺麗な弧を描き、シグルドめがけて降下する。

「これで終わりだ!!」

声がしたほうを見ると、ランサーが助走をつけ、ゲイボルクに向かって跳躍する。

右腕が無いのにどうするんだ？

「“突き穿つ死翔の槍” ゲイ・ボルク」

ランサーは今までに無いほどの魔力を込め、ゲイボルクの後ろを足で蹴った。

「おいおいおい。この前と違うじゃねえか」

そういえばクー・フリーンはゲイボルクを足を使って投擲していた、と聞いたことがある。

これが、ランサーの最高の一撃か、今度こそ死んだなシグルド。すると、体から大量の魔力がシグルドに取られていく。

こんなエクスカリバー五発分程の大量の魔力で何をする気だ？

「っしゃあ、こいやあああああ」

ゲイボルクは容赦なく、仁王立ちのシグルドの心臓部分に当たる。
が、おかしい事に、ゲイボルクがシグルドの胸板一枚に止められて
いる。

「ううおおおおおおおお」

俺の体からさらに魔力がシグルドに流れていく。

シグルドの奴、ファーブニルの血で攻撃を通さない体を魔力で強化
しているのか。

「おおおおおおおおおおおおおおおおおおおー!!」

まだまだゲイボルクの勢いは止まらない。

それを察して、ランサーが着地して直ぐにシグルドの元に疾走し、
足でゲイボルクを後ろから押してシグルドの心臓を貫こうとしてい
る。

「まだ、まだあああああああ」

「チッ、バケもんかこいつは。だがそれでこそ俺が認めた男だ!!」

ランサーが足を介して、ゲイボルクに魔力を注ぐ。

マスターが居ない状態で、これほどの量の魔力を使うか、というこ
とは命を懸けた一撃、流石だな、ランサー。

「シグルド!! 魔力はいくら使ってもいい、ランサーの要望に応え
てやれ!!」

「りよおおかいいいい。うおらあああああああ!!」

シグルドは今まで受け止めていたゲイボルクを、真名開放状態のグ

ラムで力一杯弾く。

ランサーはゲイボルクを足で押していたため、当然体勢を崩す。弾かれた、ゲイボルクはシグルドを再度襲おうと、点となりシグルドに迫っていく。

「うううおおおお！！まあにいいああえええ」

シグルドは体勢を崩したランサーの心臓を貫こうと、右腕に持っていたグラムを突き出す。

それと同時にシグルドの身近、左側からはもうゲイボルクが迫ってきている、どちらが先に届くか微妙だな。

ドスッ

何かが刺さる音がした。

シグルドは体を半身ずらし、ランサーの心臓にグラムが刺さる。

ゲイボルクはというと、此方はシグルドの体を貫通して無いから大丈夫なはず………多分だが。

「胸板一枚、俺の勝ちだ、ランサー」

シグルドが勝利宣言を言っただけ、その瞬間、ランサーの体が地に崩れる。

「はっ。なあーにが胸板一枚だ、首の皮一枚だろうが。勝手に変な言葉作ってんじゃねえよ」

「本当の事だろ。ほら、俺の胸板を貫いて心臓の手前で止まってるし。意味的にはあってるだろ？」

俺は楽しそうに喋っている二人に近づいていく。

「シグルド」

「ああ？なんだ？」

シグルドが俺の方を向いた瞬間、胸に刺さっているゲイボルクを勢い良く引き抜く。

「いっつつつてええええええ」

「はっは、容赦ねえな兄ちゃ・・・ゲホッ、ゲホッ」

シグルドがゲイボルクを抜かれて地面に倒れ、直ぐにランサーが血の塊を吐く。

それを見たシグルドが、直ぐに起き上がり、ランサーの元へ駆け寄る。

「——！！？大丈夫かランサー」

「はっ、心臓を貫かれてるんだ、大丈夫なわけねえだろ。ほら、足も消えかかってるしよ」

言われて気付くと、ランサーの足が先から徐々に消えかかっている。

「ランサー。何か言いたいことがあるなら言え」

「はっ。んなもんねえよ・・・いやあるといえはあるけど、どうせ生きてはいないだろうし、やっぱ言うことなんかねえわ」

ランサーが言ってるのはバゼットの事か、そういえば生きていることを知らないんだっとな。

まあ、もう少しで消えるんだ教えてやっても大丈夫だろう。

「大丈夫だ。バゼットは生きている」

俺の言葉を聞き、ランサーが苦笑する。

「はは、生きているのか、なら一言伝えといてくれ、お前といた日々は楽しかったぜ、ってよ」

「分かった。その言葉、必ず届ける事を誓う」

「頼んだぜ。はあ、でももうちつと女運があってもいいのにな、なんで俺ばかりこんな目に……………」

最後に己の不運を嘆きながら、ランサーは消えていった。

ランサーが消えて、右手に違和感を持ち、見て見る。

「——あ」

これは、紛れも無く右手に持っているのはランサーの槍、ゲイボルクであった。

俺はいきなりのこととで頭が真っ白になる。

「ん？おいどうしたんだ……………っておい！！それゲイボルクじゃん、何で消えてねえの！？」

「さあ、良く分かん」

本当に良く分かんが、オリジナルの宝具だ、持っただけで損は無いだろう、ありがたく頂戴するとうとう。

「よし、衛宮邸に戻るぞ」

「りょーかい」

俺は右手を掲げ、指を鳴らし、転移する。

さて寝るか、何故かというと良く分からん、がかなり眠たい。

「俺はもう寝る、お前も休んでおけ」

「りょーかい。ってちよつとまったあー」

何故にこんな、テンションが高いんだ？
うるさくてたまらん。

「なんだ、俺は眠たいんだ、用件があるなら二秒時間をくれてやる」
「ってみじか！！たったの二秒！？」

「1」

「あーもう。俺の胸にポツカリ開いた風穴を直してくれ」

「……………そういえばそんな傷が出来ていたな。
シグルドの胸に手を当てて、治癒魔法を使う。」

「お？おお？おおおおお！！すげえ、なおんの早すぎる。でも・
……………」

「でも？」

「メツチャ痒い！！」

おっと丁度右手にゲイボルクが。

サク

見事にシグルドの右太ももに槍の刃の根元まで刺さる。

「ちょ、ま、えー！！かなり痛いんですけど！？」

「お前のテンションには付いていけん、それにうざい」
「ヒドッ!」

でもまあ俺も鬼では無い、すぐにシグルドの傷を治す。

「はあ、全く。ランサーも余計なもん残していきやがって」
「お前に付き合ってられん、俺はもう寝る……ん?」

なにか美味そうな匂いがする。

匂いが漂ってくる所は居間、士郎たちが夕飯でも作っているのだろう。

俺も一緒に食わせてもらおうとするか。

縁側から上がり居間の障子を開けて、中に入る。

「あら、遅かったじゃない」

「お帰りなさいませ、ソウヒ、シグルド」

「おう、蒼緋お帰り。お、シグルドも一緒じゃないか今日は飯食っていくか?」

「ああ、ただいま」

「たっだいまー。飯は食うに決まってんだろ」

「よし、なら手伝ってくれ」

それから、俺とシグルドは夕食の手伝いなどを取り掛かった。

全ての準備が整うと、全員で夕食を食べ始めた。

食事の途中に今まで何があったかを話した、もちろんゲイボルグのことも。

「はあー、凄いわね。宝具がそのまま現世に残るなんて」

「やはり、おかしいことなのか?」

「普通におかしいわよ。だって宝具は英霊の象徴よ?担い手が消え

たとえればそれも消えるに決まってるじゃない」

「……いえ。ソウヒなら可能でしょう」

俺と遠坂はできうるだけの可能性を考えてみたが、全て不可能なことであった。

だがその時セイバーが確信があるように、話に入ってきた。

遠坂はセイバーに訊ねる。

「どうして、分かるの」

「いえ。多分ですが、ソウヒはこの前私の宝具を使うことが出来ました。

それにソウヒは、これも神から力を与えられたものの一つ、と言うような事を言っていたので、それを元にして考えれば、ランサーが消える前にゲイボルグを持つ、ランサーが消えた後、自動的にゲイボルグの所有権は神の力のおかげでソウヒ渡る。

ちよつと説明が分かりにくかったと思いますがこれが私の考えです」

「そういえばそんな能力があったな、しばらく使っていなかったの
で忘れていた」

「……本当に非常識ねアンタ」

遠坂は呆れて肩を落とす。

そこに、士郎が訊ねてきた。

「なあ、作戦会議はどうするんだ？」

「あ、ごめん忘れてた。よしみんな気持ちを切り替えて、作戦を練るわよ」

「そうですね」

「そうだな」

「俺はパース」

一人、テレビの前で寝転がっている、馬鹿がいた。

「なら出て行け」

俺は転移魔法を使いシグルドを道場に転移させる。

「さて邪魔者はいなくなった。最後の作戦会議を始めよう」

まあ、戦力的には此方のほうに分があるから、決める必要はないんだがな。

ランサーの時同様に、何も起こらなければ良いんだが。

第十八話 雌雄決する二人の戦い（後書き）

誤字脱字あつたらよろしくお願いしまつす!!

第十九話 前座（前書き）

今回は結構短くて あんまり面白くないです。ここは適当に書いたから別に見なくても良いですよ

第十九話 前座

「こんな感じで行くわよ」

一応作戦は決まったが、やっぱり本編と全く変わってないな。

俺が山門にアサシンがいるのを教えて、作戦を少しの変更しただけだしな。

しかも俺の役割は士郎がギルガメッシュにやられた時の代理のストッパー。

シグルドはセイバーに加勢して柳洞寺の正面から入り、アサシンを倒した後、俺と士郎が足止めたギルガメッシュを倒す、と言う作戦だ。

まあ俺が出張らなくても、士郎なら大丈夫だろう。

「柳洞寺に攻め込むまで時間があるし、各自それまでは自由にしていいわよ」

そう言つて遠坂は居間を出て、自室へ向かっていった。
それに合わせて、セイバーも出て行く。

「さて、どうするか」

余りにも暇だ……どうせ俺の出番は無いんだ、シグルドと鍛錬でもするか。

俺は居間を出て、庭の中央に立ってシグルドがいないか探す。

「おい、俺はここにいるぞ」

声がした方、屋根の上にシグルドがいた。

あいつ酒を飲んでいるのか。
俺は空を見上げ、月を見る。

満月か・・・雲も全くとっていいほどない、月見酒には申し分ないな、俺も酒を飲むのに付き合おうとしよう。
跳躍してシグルドの隣に着地して座る。

「お前はどうせ来るだろうな、って思ってたちゃんと杯もちゃんと二つ用意してあんだよ」

「ほう、気が利くな」

本当に気が利くが、そんなものを何処に隠してたんだ？そんなものを取る前に庭に転移させたはずだが・・・。

でもまあ、問い詰めるのは止めておこう。

俺は渡された、杯に酒を注ぎ、一口飲んでみる。

「・・・なかなか美味いじゃないか」

「だろ？俺が虎の姉ちゃんの下に行つて、かつぱらってきたんだ」

「盗むのは許せんが、美味いからよしとしよう」

「お、話が分かるなおい」

シグルドは持っていた酒瓶を足で挟み、俺の背中を叩いてくる。

「止める、酒がこぼれる」

「おっと、すまねえ」

それから言葉も無く、月を見上げ、この世界にやって来た日から今までの事を思い返す。

と、二つ疑問が浮かんできた。

「シグルド、二つ訊きたい事があるんだが、いいか？」

「おう、俺が答えれることなら何でも答えてやるぜ」

「では一つ目、お前はどやって宝具を治した」

言いくいのか目が泳いでいる。

「え、えーと、その」

「なんだ言ってみろ、今日の俺は機嫌がいいからな、怒ることはないぞ」

シグルドはホツと胸を撫で下ろし、説明を始める。

「俺がグラムを再生させることが出来たのはな、俺の鎧、つまりフアーブニルの血のおかげで手に入れた鉄壁の肌を代償に、再生させたんだ」

「・・・それはおかしいな。ならどうしてお前はあの時ランサーの攻撃を防いだんだ？」

俺はその鉄壁の肌を魔力で強化して止めたんだと思っていたが。

間違いか？」

「いんや、その考えは合ってるよ」

「ならどうして・・・」

「正面の心臓の部分だけを残しておいたんだよ。まっ、もう意味ねーから消したけど」

「・・・・・・と言うことは、後ろから突かれたら普通に、心臓を貫かれると言うことか、だから俺がゲイボルクをシグルドの太ももに刺した時、簡単に刺さったわけだ。

「博打だな」

「そうそう、冷や汗がかなり出てたしな。で、後のもう一つ、これが一番重要なんだろう？」

「そうだが、それがどうした？」

「その質問ってどうせ、俺が聖杯に何を望むか、ってことだろ？」

「……こいつには驚かされてばかりだな。」

「分かっているのなら、教える。言えないのなら、言わなくてもいいぞ」

「別に言えないってワケじゃないんだけどな……まあ簡単に言えば『命を懸けたギリギリの戦いをしたい』かな」

「というと、その願いはもう果たされているな」

「ランサーのはカウントしねーぞ。あいつの手はもう分かっていたから、それを基に対策を立ててそれを実行して勝った、それじゃあ面白くねーんだよ。」

もつとこう、俺の理解を超える攻撃とか、まだ力を隠してる奴と戦いたいんだよ。」

アレほどの戦いをしておきながら満足していないと言うのか。

「それに、俺は戦いたい奴がいるんだ」

「ほう、お前が気に掛ける程の者がこの時代にいるとはな、一度手合わせしたいものだ」

「なに言ってるんだ？俺の戦いたい奴はな………“お前”なんだよ」

「……ふつ。そうか、ならば受けて立とう。この戦いが終わったら、お前の好きな時間、場所で戦ってやろう」

「さっすが！！話がわかんじゃん」

また、背中を叩かれて杯を落とそうとした。

そして、またいつしか会話が無くなり、月を見上げて酒を飲むことしかしなかった。

「さて、俺は少し仮眠を取るが、お前はどうする？」

「俺はもう少し月を見てるよ」

「……分かった、勝手に屋敷から離れるなよ」

「りょーかい」

俺は屋根から飛び降りて、自室へ向かう。

今日は布団で寝らず、座って壁に腰掛けて寝る。

——午前四時。

夜明けまで数時間をきり、俺は遠坂、シグルドと門の前で士郎とセイバーを待っていた。

「士郎……私と言うものが有りながら!!」

「いいではないか、セイバーと話すことはこの時が最後かもしれない。黙ってみてろ」

「そうだぜ穰ちゃん、昨日坊主とあんなことやこんなことをしたんだ、セイバーにも少しは話をさせてやれよ」

すると、見る見るうちに遠坂の顔が赤くなっていく。

「な、なななな何でそんなことあんたが知ってるのよ!!」

「いやゝ生憎と俺は鳥の声を聞いている内に耳がよくなってな。もちろん、声は聞こえてたぜ、バツチリ」

こいつが言っている限り、この世界はPC版の物か。

すると、ポキポキ、と骨の鳴る音が聞こえて、その音がしたほうを見ると

「さて、覚悟は良いかしらシグルド」

魔術刻印を起動させ、にこやかに笑う遠坂がいた。
これが赤い悪魔か。

「明神君？シグルドを捕まえてくれるかしら、それと魔力が籠った
特大の宝石を一つお願い」

「・・・わ、分かった」

俺は素直に魔法でシグルドを空中に浮かせ、両手両足を光の輪で拘束する。

この俺が素直に従ってしまった、これが、これが女の出す気迫なのか？

そもそも、遠坂から名字で呼ばれたら、言うてはならんが気持ち悪くなる。

と、シグルドが身の危険を悟ったのか、叫び始める。

「ちょ、ちょっと待て！！なんだその宝石！？、かなり魔力が込められてんじゃねえか！！それになに、その魔力全部腕に集めてんの！？流石の俺もそれは痛いって」

「遠坂、シグルドはファーブニルの血の鎧を失って、どんな攻撃も効くようになった、遠慮なく殴ってくれ」

「なにしろっと、暴露してんだよ temeー！！」

「そ、マスターの貴方が良いって言うなら遠慮なく・・・」

すまん、遠坂と目を合わせてしまったら、つい喋ってしまった・・・
・・・許せ、シグルド。

「記憶がなくなるほど痛い、右フックをお見舞いするわ」

遠坂がファイティングポーズを取って、腕全体を覆っていた魔力が拳に集まりだした。

その魔力量はゲイ・ボルク（刺し穿つ方）二発分だ。

と、いきなり遠坂が後ろに下がり、助走をつけて右フック、ではなく右ストレートを放つ

「ちょ、ま、までいふっ！！・・・くはっ！！」

遠坂の右はシグルドの右頬に綺麗に入った、しかも士郎達と逆のほうの衛宮邸の塀まで吹っ飛んだ、距離は・・・4・5メートルとった所か。

アレは痛いな、遠坂が放ったのはただの右ストレートではなくコークスクリュー、しかも肩・手首の完璧な回転から放たれた最早最強と言って良いほどの一撃だ。

俺は塀にぶつかったシグルドの元へ良き、怪我を治そうとして顔を見ると・・・見事にシグルドの顔の骨は折れ、複雑骨折の域に達していた。

「大丈夫か、シグルド」

「・・・」

返事が無い・・・これはまずいな。

俺はすぐさま治癒魔法とアヴァロンを使って早急に治療を始める。自体を察知したのか遠坂が駆け寄って来た。

「もしかして、私やっちゃった？」

「ああ、完璧にやってしまったな」

遠坂は明後日の方を向き、あははは、を笑っている。

そんなことより脳が傷ついてなければいいんだが・・・。

「う、うーん」

「気が付いたか。おい俺が分かるか、シグルド」

シグルドは治療が終わると、意識が戻った。
直ぐに呼びかけてみるがまだ反応が無い。

「・・・・・・・・・・悪魔」

「よし、分かってるみたいだな」

「って、否定しないの!？」

遠坂の素早く俺に突っ込む。

まあそんなことは置いとして。

俺はシグルドを立たせようと手を差し伸べた。

「立てるか？」

「あ、ああ何とか」

差し伸べた手を掴み、俺はそれを引いて立たせてやる。

「はて？何故俺はこんなとこに？確かさっきまでお前と酒を・・・あれ、夜が開け始めてるんだ?・・・・どういうことだこりゃ？」

・・・・・・・・こいつ本当に記憶が無いのか？

俺は殴った本人を見ると、ガッツポーズを取っていた。
俺はシグルドにどう言おうか考える。

「なんかあったのか？」

「物凄い魔力を感じたのですがどうしたのですか？」

と、異変に気付いたのか士郎とセイバーが来ていた。
気付かれまいと、一生懸命士郎達を急かせる

「あ、そろそろ出発しなくちゃ！！早く行きましょう」

「え？あ、そうですね」

「そうだな、早く行こう」

「うーん、俺は一体何を……まいつか。ってちょっとまってよ」
「……………」

絶句。

こんな焦って急がせる遠坂に疑問を持たないのか？

それに何だこいつらは、簡単に流されすぎでだろ…………。

…………はあ、頭が痛いな。

俺は衛宮邸の門から出て行く皆に気付いて、最後に出る。

よくこんなんで、聖杯戦争を勝ち抜いて来られたな。

第二十話 始まる決戦（前書き）

つい最近突如ネットにつながらなくなって、それと直すのが面倒だから更新が遅れましたすんません。

一応今日の昼に、直ったんで急いで書いて更新しました。

結構おかしな所があると思いますがそこら辺はご了承ください（汗）。

第二十話 始まる決戦

衛宮邸を出ること一時間程で柳洞寺の階段の下に付いた。

「それじゃ、私達は裏山に行くわ。二人とも、アサシンを直ぐに倒してギルガメッシュを倒すのよ」

「りょーかい」

「分かりました」

遠坂はシグルドとセイバーに最終確認をして、裏山の方へ歩んでいく。

「シグルド」

「ん？なんだ？」

呼ばれたシグルドは訝しげに俺のほうへ歩み寄ってくる。

「お前ら二人なら大丈夫だろうが、くれぐれも足場には気をつけるんだぞ」

「あゝお前が言ってた“燕返し”ってやつのことだろ？大丈夫、その対策法は立ててあるから」

「・・・それならいいが」

「そう考え込むなって、あいつと戦うのはクラスがセイバーの二人だぜ？そんな心配する必要なんかねえから、さっさと行けよ、もう穰ちゃんと坊主の姿が見えなくなっちまったぞ」

「そうだな、境内で待ってるぞ」

「おう！」

俺は踵を返し、直ぐに遠坂達の後を追った。

何事も無ければいいんだがな。

シグルド達に僅かな不安を抱きつつも、直ぐに遠坂達に追いついた。

「もう、遅いわよ蒼緋」

「すまない」

「良いじゃないか、追いついたんだし」

士郎がフォローするが余り効果が無かった。
が、それも束の間

「……尋常じゃないわね、これ。生臭すぎて吐き気がする」

確かに、空気は湿り、変な違和感がするな。

これならば吐き気がするというのも分かるな。

「……今更だけど。士郎、体の調子はどう？」

「え……？いや、調子はいいいんだが、悪いと言うか。

正直言つて、持て余してる」

これから話が長くなるので先に進む。

先に進んでいると、後ろから走ってくる足音が聞こえてきた。

士郎と遠坂は俺を抜かず、俺もそれに合わせて走り、遠坂達に追いつく。

走っていくにつれて、頂上が見え始めてきた。

「見えた、あともう少し……！」

立ちはだかる枝を掻き分けながら、斜面を上がっていく。

そして、長い斜面から抜け出して、平らな地面の上に立つ。

斜面を上がって来た俺たちを迎えたのは、巨大な肉塊だった。

「……………流石に実物を見ると、気持ち悪いな。」

「嘘だろ——アレが、聖杯だっていうのか」

士郎は肉塊から視線を逸らす。

あんなものを見たら誰でも視線を逸らすだろう。

「アレは器を壊して溢れ出てくるぞ、やるなら早くするぞ」

そう、早くやらなければ、俺がいる事でイレギュラーが起きる可能性があるかもしれない。

この前の言峰がランサーへの命令を変更したのと同じように……………。

「って言う事は、聖杯は器である慎二を壊すって言うのか？」

「そうよ、ほらあそこ。人型らしきものが見えるんだけど、士郎なら見えるでしょ？」

「え……………」

士郎は目を凝らし、遠坂が指で指した方を見る。

「……………間違いない。背格好からして慎二に間違いない」

「そう。で、生きてるの？」

「息はある、体だってまだ……………」

「人型の聖杯の心臓を他人の体に埋め込むから、あんな姿になるんだ」

遠坂が感心したのか、俺の言った事に少し付け加える。

「蒼緋の言った通りね。それと、あの聖杯は宿主が生きていないと

起動しないの、だから・・・」

「ちょ、ちよつと待てよ遠坂。まさか慎二を殺そうなんて考えて無いよな？」

「そう遠坂を急かすな。説明が終わっていないだろう」

「あ、ご、ごめん」

士郎は少し冷静さを取り戻す。

「じゃあ続きを言うわよ。慎二は殺さない、殺してしまえば孔^{もん}が開いて泥が際限なく溢れ出てしまう。それこそあの金ピカの狙いよ。だからまだ本来の願望機っていう姿になってない今がチャンスなのよ」

「なら早く慎二をあの肉塊から引き剥がそう」

そう言つて士郎は泥の中に入ろうとする。
が、それは直ぐに遠坂に連れ戻された。

「馬鹿なことはしないで。貴方じゃ、行けたとしても真ん中で飲み込まれるってば！」

「そんなの、やってみなくちゃ分からないだろう。もう時間が無い。二人も今頃アサシンと戦つてる筈だ、ここで躊躇してる暇は——
——っ・・・！？」

来たか・・・。

俺は近づいてくる気配の方を見ると、そこにはヤツがいた。

「これは驚いた。

まさか、三度もその不出来な顔を見る事になるとはな、雑種」

嘲笑いながら、展開した武器を此方に向けている。

「――貴様」

ギルガメツシュの赤い瞳に殺気が籠る。

奴の背後に浮かぶ宝具が、際限なく数を増していく。

士郎が遠坂を狙った攻撃を弾く音を聞いて、遠坂が振り返る

「――士郎」

「遠坂。慎二を頼む」

「――任せて。直ぐに連れ帰ってくる！」

遠坂は言い終わってすぐに、黒い泥に飛び込んだ。

「お前の相手は俺達だ。遠坂に手を出したかったら、俺達を倒してからにしゃがれ」

士郎は前に一歩踏みでて、双剣を構える。

ギルガメツシュの視線は遠坂から、俺に移る。

「まずは貴様からだ。先日受けた屈辱、果たさせてもらっぞ雑種」

「俺と戦うか……なら、こいつに勝ったら相手をしてやろう」

ギルガメツシュの視線が士郎に移る。

「いいだろう。我もこの贗作者が気に食わなかったからな」

そついうとギルガメツシュの宝具が展開される。

展開された宝具の切っ先が士郎に向く。

「その身をもって、真偽の違いを知るがいい――！！」

言い終わると、直ぐに展開された宝具は射出された。

ギン

射出された宝具の一本が、此方に向かって来たが、俺は瞬時に日本刀を創り、それを打ち落とす。

「・・・・・・・・どういうつもりだ」

「なに、気が変わってな。この小僧を相手にするのと、貴様を相手にするのは造作も無い、だから無駄な手間をかけずに貴様らを葬ってやろう」

「ということは、二人一緒に掛かって来い、と言いたいのか？」

「ああ、そうだ。貴様とシグルドに受けた屈辱を糧に、貴様と小僧と一緒に殺してやると言うのだ。ああ、気にするな、きちんと一緒に墓に入れてやる」

ふざけたことを言う奴だ、我慢も出来んのか、言う事はあっても呆れて言葉が出ないぞ。

俺は構えを解き、ギルガメッシュと睨み合う。

「ほう、抵抗せずに死ぬと言うのか、殊勝な心がけよのう」

「馬鹿か貴様、抵抗せずに死ぬなど誰がするか」

癪に障ったのか、眉間に少し皺が寄っている。

「貴様、我を愚弄しよったな、その罪ここで償ってもらおう」

ギルガメッシュの目に先程以上の殺気が籠る。
展開される宝具は、次々と増えていく。

「おいおい、挑発して大丈夫なのか？」

と、今まで空気だった士郎がおずおずと訊ねてきた。

「まあ、大丈夫だろう。奴も此方を侮っているからな、付け入る隙はあるだろう」

「そうだな、よし。そう思えば気が楽になってきた」

士郎は双剣を構えなおし、ギルガメツシュの方を見ると、すぐさま顔が驚愕の表情に変わっていた。

「……なんて数だ、先程の倍はあるぞ。」

俺と士郎が話している間に、ギルガメツシュは有に百ほどの宝具を展開していた。

「話し合いは終わりか？なら、始めよう、貴様らの処刑を！！」

ギルガメツシュは言い終わると、宝具を一気に放ってきた。

「ちっ。多いな」

俺は急いで円形のシールドを張り、そのシールドの範囲内に士郎も入れる。

防ぐことはいいが、攻める事ができない、今出て行ったら俺でも串刺しになるだろう。

まあ、アーチャーなら片っ端から複製して、防げただろうが、士郎にはその様な技術がまだ無い。

さて、どうしたものか……………

「はっはっはっは。どうした、その様に防いでばかりだと、面

白く無いぞ、少しは我を楽しませろ」

ふむ、一つ作戦が決まった。

奴には重い一撃を食らわせてやろう。

「士郎」

「どうした？何か良い案でも浮かんだか？」

「ああ」

「なら俺はどうすれば良い？」

「奴の背後に回って、お前が攻撃しろ」

「えっ！？で、でもどうやって？」

ギルガメツシュの放った宝具が、シールドにぶつかり、派手な音を鳴らす中、俺は士郎に簡単に作戦を伝えた。

「分かった。それしか方法が無いなら、少しでも可能性があることをしよう」

「確認するが二十七本の回路に設計図を入れたか？」

「ああ、そのせいで頭が少し痛いけど、何とか行けるぞ」

「では行くぞ」

俺は所々罅が入ったシールドを維持したまま、右手の指を鳴らす。士郎をギルガメツシュの背後に転移させ、それに気付いたギルガメツシュはすぐさま後方に宝具を放つ。

転移して直ぐに放った、二十七本の複製した剣は全て弾かれるが、俺はその一瞬の隙にギルガメツシュに接近する。

「城門を破壊した一撃だ、受け取れ！！」

俺はどこぞの喪服を着たドラゴンスレイヤーと同じく、回転してギ

ルガメツシュの背中に蹴りを放つ。

「ちいっ!!」

だが、奴は黄金の鎧を胴だけ出現させ威力を軽減した。
でも、奴は池から境内まで吹っ飛び、正面入り口付近の塀にぶつかる。

「ぐううう」

「どうだ、痛いだろう？なんせ先程も行つたとおり、城門を破壊した一撃だからな。貴様でも無事ではすまないだろう？」

俺と士郎は急いでギルガメツシュの元へ行き、皮肉を言う。

「き、貴様等あああああ」

ガバツと立ち上がり、愛剣のエアを取り出す。

「“天地乖離す エヌマ”」

「——ちっ!!」

俺は日本刀を破棄し、グラムを二本作る。

「開闢の星” エリツシュ　!!」

「“栄光と破滅の魔剣”　グラム　!!」

ギルガメツシュの放ったエヌマエリツシュを、俺の放ったグラムが打ちやぶ・・・・・・らないだとい？

エアの一撃はグラムから放たれた斬撃を打ち消し、そのまま俺と士郎に迫ってくる。

エヌマエリツシュの延長線上には、池がある避けたら遠坂が死ぬだろう、避けなかったらこのままでは二人とも……いやせめて士郎だけでも。

「——え!？」

俺は士郎の腕を掴み、遠くに投げ飛ばす。
そして直ぐに盾を創造する。

「“熾天覆う七つの円環” ロー・アイアス ！！」

咄嗟に創り出したアイアスに魔力を限界まで込める。
エヌマエリツシュがアイアスにぶつかり、花弁が一枚、二枚と消えていく。

「ぐ、あああああああ!!」

完全に防ぐのは無理だと悟った俺は、アイアスを横に少しそらし、エヌマエリツシュの軌道を変える。

残った花弁は三枚か……。危なかったな、咄嗟に創ったからアイアスになってしまったが、今のはアヴァロンを創ったほうが良かったな。

いや、それよりも何故グラム二本の真名開放が掻き消されたんだ？考えられるのは一つ、前以上の魔力を込めたんだろう。

「ほう、良くぞ防いだな。先日以上の魔力を込めた一撃だったのだが……。サーヴァントに頼り切った補助系マスターとばかり思っていたが、ふむ存外にやりおるな」

「貴様に褒められても、嬉しくないな」

やはり前より魔力を込めていたか。

本気を出さないとグラム你真名開放がかき消されたんだ、アヴァロ
ンで防御に徹すれば何とかなるだろうが攻めることが出来ない。
それに、本気を出されたら此方が負ける確立が大幅に高くなる。

「ちつ、このままでは詰まれてしまうな」

「……………クソツ、何を弱気になっている。

落ち着け、落ち着け、落ち着け、落ち着け。

俺はいつの間にか乱れていた息を整える。

「ほう、落ち着きを取り戻したか。そうでなくては面白く無いぞ、
もつと我を楽しませろ雑種！！」

「はっ！！それでは百年分楽しませてやろう。士郎！！」

「おう！！」

展開され、俺に放たれた無数の宝具は横から士郎が投影した宝具に
打ち落とされていく。

「そついえば贗作者^{フェイカー}がいるのを忘れていたな。ふむ、そいつの処刑
を邪魔してくれた礼だ、受け取るがいい」

ギルガメッシュは、また宝具を展開して放つ。

展開された宝具は、士郎が投影出来る数より多い、このままでは士
郎が危ない。

俺は士郎の方へ駆け出し、また間違つて咄嗟にアイアスを展開する。

「ありがとう蒼緋、助かったよ」

「そんなことよりどうする、流石にこいつを維持するのに魔力をず
っと込めなければならぬから、こんな次々と放たれる宝具を止め

ることは出来んぞ」

「でも、方法が……いや、あることにはあるぞ」

「なんだ？言ってみろ」

「固有結界が展開できれば少しは対抗できるんじゃないか？」

そうだったな、固有結界ならギルガメッシュに少しは対抗できるな。

「固有結界に賭けるぞ、詠唱を始めろ」

「分かった！」

俺の後ろから士郎が詠唱をする声が聞こえる。

士郎がやろうとしてることに気付いたのか、ギルガメッシュの攻撃は勢いが増してくる。

「ふむ、何をやろうとしてるか分からんが、これで終わりだ」

ギルガメッシュの攻撃が突如止む。

どういうことがあんなことを言っておきながら、攻撃を止めるとは。俺は用心のため、アイアスを消さずに残している。

花弁は後二枚、厳しいな。

「——剣の丘で鉄を鍛つ」

もう士郎の詠唱は後半部分、このまま攻撃が無ければ……

「ならば我が生涯に意味は……」

「はあ、使いたくはなかったが仕方があるまい“壊れた幻想”」 ブ

ローケン・ファンタズム」

「なに！！」

瞬間、アイアスを突破できず周りに落ちていた宝具が、全て爆発し、視界を白に染めた。

第二十一話 二人で戦うはずが・・・（前書き）

初めて主人公以外の視点で書きました

第二十一話 二人で戦うはずが……

作戦開始から三十分……

遠坂の穰ちゃんに“三十分経ったたら始めて”って言われて今、長い石段を駆け上がっている。

顔を少し上げると柳洞寺は赤く光っており、空を見上げれば雲が立ち込めている。

「ふう。嫌な天気だなあおい」

「そうですね。三人に何も起きなければ良いのですが……」

石段を登りながらセイバーとあの三人の事を心配する。

「まあ、蒼緋がいるんだ。大丈夫だろ」

「そうですね、彼がいれば大丈夫でしょう」

でも、なんだこの胸騒ぎは……

こいつのせいで悪い事を考えちまう。

「シグルド」

「——つとー」

俺はセイバーに声を掛けられて止まり、顔を上げる。

そこには、階段の踊り場に長刀を持つ着物姿の侍がいた。

「待ちわびたぞセイバー」

「アサシン……」

アサシンにとって俺は眼中に無いらしく、視線はずっとセイバーに

向けられている。

「そこを退いて下さい、私達には時間が無いのです」

「時間が無いか。それは私も同じこと」

そういつとアサシンは右腕を上げる。

着物の中絡みえる腕は透けていた。

「アサシン、貴方はもう……」

「そう、私の体は日が昇れば消えるだろう」

アサシンはセイバーと悠長に話している。

さて、さすがの俺ももう限界だ

「おいアサシン！！俺たちには時間が無い、今すぐそこを退かなければ殺すぞ」

「ふむ、些か驕のなっていない犬だな」

「俺の何処が犬だこら！」

「そのように、叫ぶから犬だと言っただ。」

「テ、テメエ……」

俺は我慢できずグラムを出して、アサシンに切りかかる。

「ぶっ殺す！！」

ヒュン

大上段からの剣戟をアサシンは軽くかわし、グラムは階段の踊り場に刺さり、そこからいたるところに亀裂が走る。

「ほう、なかなか鋭い攻撃だな。だが、怒りで振るう剣など読みやすい。」

貴様では私の相手は務まらない。というより私はセイバーと戦いたいのだ、今すぐ引け」

「残念ながらそれは無理だ、今からお前は俺とセイバーと一緒に相手にしなければならぬからな。セイバー――！」

「はい――！」

俺とセイバーでアサシンに切りかかる。

だが、此方の攻撃がまともに当たらない。

「ふむ、セイバー私との約束を破る気か？」

「すみません。事情が事情なので………」

「そうか……。それでは仕方が無いな」

アサシンは二人の攻撃をかわしながら喋りかけてくる。

俺たち二人の攻撃なんぞ、簡単にかわせるってか？

「えらい余裕だなあおい」

俺はまた大上段から剣を振りかぶる。

ヒュン

アサシンは当然の如く、それを避ける。

「どうした、二人掛りで私にかすり傷しか付けられんとは、貴様らの力はそんなものか？」

「調子に乗るなよ――！セイバー、お前は後退してろ」

「ですが――！」

「大丈夫だ、俺を信じる」

俺がそういうとセイバーは渋々と俺の後ろに回る。

「ほう、セイバーを下げるか。それで良いのか？」

「それで良いから後ろに下げたんだよ！！」

俺はまたまた大上段からの攻撃をする。

先ほど同様、アサシンはまた簡単に避ける。

「そろそろ、終わりにして、セイバーと戦わせて貰おう」

先ほどまで避けるばかりで反撃してこなかったアサシンが、俺の首筋目掛けて刀を薙ぐ。

「うおっ！？」

突然の反撃で後ろに飛んで避ける。

「ふむ、首を落とせたと思ったのだが、なかなかやるなお主」

「それほどでも・・・ってうお！！」

その場でアサシンが刀を振るったと思うと、アサシンの刀は伸びるように俺の首を狙ってきたのだ。

結構間合いを話したつもりだったが、あいつの間合いは結構広いんだな。

いや待てよ、それはおかしい。俺とあいつの距離は約三丁四メートルぐらいだ、そしてあいつの長刀は目測二メートル前後、どうやっても俺に攻撃を与えるのは無理だ、なら何でこっちまで攻撃が届いたんだ？

「これも避けるか、完全に虚を突いたと思ったんだがな」

「思いつきり突かれて、驚いてるぜ」

「シグルド、やはり私も……」

「いや、もうちょっと待ってろ」

セイバーは計画の要だ、こんな所で死なれたら終わりだ。

というより、そもそも蒼緋が壊せば良いのに何でセイバーなんだ？
あゝ考えても俺には良く分からん、とにかくこいつ倒して蒼緋達の
元へ行かないとな。

「よし、これから本気出してやるから覚悟しとけよ」

「ということは今まで、本気で相手をしていなかったと？」

「そういうことだ!!」

俺はアサシンに幾重もの攻撃を繰り返す。

「剣速が上がっているな。面白い、ならば私も本気を出そう」

アサシンは俺の攻撃を全て避けると、後ろに下がる。

「なんだ？本気を出すとかほざいてた割には逃げんのか？」

「逃げる？ははは、バカなことを申すでない。私の秘剣は少しばかり
間合いを空けなければならぬからな」

「秘剣……あ！なるほどそういうことか!!」

俺が自己解決して納得していると、セイバーに訊ねられる。

「何が分かったのですか？」

「さっきのあいつの攻撃の種だ」

「先ほどの……！刀が伸びたように見えたあの攻撃のことですか？」

「ああ。蒼緋に聞いた話じゃ、あいつの“秘剣・燕返し”は『多重次元屈折現象』ってのを利用して三つ同時に繰り出す技らしい。と言うことはだ、アサシンは同時に攻撃を繰り出せるんだから、自分の太刀筋の延長線上に同じ太刀筋を発現させて、あたかも刀を伸ばしてるように見せてたんだ」

「なるほど……」

俺はアサシンを見てにやりと笑い。

「さっきの攻撃の種はこれであってるか？」

「ああ。良く分からん言葉が入っていたがそれで正解だ。すまんな少し悔っていた」

「分かればよろしい！！」

自信満々に頷いて胸を張ってみる。

が、いきなりアサシンが笑い出した。

「クツクツ。それが分かった所で私の秘剣をかわすことが出来るかな？」

「ハッ、そんなもん避ける以前に、そんなもんさせねーよ」

そう、“燕返し”は回避不能の技、それを使わせないようにするためにさっきまで伏線を張ってたんだ、発動なんぞ誰がやらせるかってんだ。

「それでは、我が秘剣をお見せしよう」

アサシンがそういうと殺気が先ほどより鋭くなっていく。

実際、冷や汗の量が半端じゃない、初めて見る技を発動する瞬間に無効化する。

ハッ、博打だな失敗すれば死ぬなこりゃ。

「行くぞ。秘剣……」

落ち着け、落ち着け、落ち着け、俺ならできる、いや絶対にできる。アサシンが刀を振るおつと予備動作に入った。ここだ!!。

「“燕返し”!!」

「ハッ!!」

瞬間、踊り場の地面が爆発するかのように割れ、その割れた岩が空を舞う。

アサシンは足場が突然不安定になり体制を崩す。

「ぬ!？」

「セイバー!!」

俺はセイバーを呼び。

二人で虚を突かれて愕然としているアサシンに切りかかる。

ザン!!

俺の剣は腹に、セイバーの剣は心臓を貫いている。

「油断したな、アサシン」

と言うと、俺は剣を抜く。

それに続いてセイバーも剣を抜く。

「ふっ、やはりクラスがセイバー二人を相手にしては分が悪かったか。」

いや、言い訳はよしておこう」

アサシンは俺を見ると、一瞬不服そうな顔をしたが、すぐにいつも道理の涼しい顔に戻る。

「・・・一つ訊ねても良いかな？」

「ああ？別にいいぜ、だが早くしろよ俺は急いでるんだ」

「分かった。では聞くが、先ほど何故地面が割れたのか教えていた
だきたい」

「ああ、アレかアレはな俺が何回も剣を力強く振り下ろしてただろ
？それで出来た穴を使って、そこから足を通しておもいつきり魔力
を流したら、何でか爆発するってわけよ」

「何でか、だと？」

アサシンは軽く目を見開き、笑い出す。

「クククク、ハッハッハッハッハ」

「てめえ何がおかしいんだコラ」

「いや、何故このような現象が起きるのかを知らないとは、クク。
まるで私と同じではないか」

アサシンの体が徐々に消えていく。

「おい、どういう意味だそりゃ」

「私もな、“燕返し”がどういう原理で出来るのか良く分からの
だ。どうだ、それでも私と同じでは無いと言いきれるか？」

「・・・・・・・・クハハハハ。確かにな」

俺はアサシンに拳を向ける。

すると、アサシンがふっ、と微笑む。

「いや、それは次の機会まで我慢しておこう。というより私は腕が無いからなできん」

「そうだな、また次の機会に」

「ああ、その時はセイバー、貴様と一対一で決着をつけよう」
「はい。その約束確かに承りました」

セイバーがそう返事をする、アサシンは消えていった。

「ふう、さっきの“燕返し”後数秒遅れてたら死んでたな」

「え？」

俺はセイバーに首筋に出来た傷を見せる。

「これは・・・・・・・・」

「ああ、あいつの体制を崩さなかったら死んでたな。はぁ、疲れた、セイバー先に行ってる俺は少し疲れたから、ここで休んでいく」

「それでは・・・・・・・・」

「何のために俺がお前を後ろに下げたと思ってるんだ？」

「それは・・・・・・・・」

セイバーは俯き考えをまとめている。

いや、実際今度ギルガメッシュと戦ったら勝ち目が無いといつていほど危ないからなあ。

絶対あいつ俺と戦うことになったら本気を出すぞ・・・・・・・・多分。
この前戦った時は本気出してなかったみたいだからな。

と、一人思索していると、セイバーが顔を上げる。

「分かりました。出来る限り早く助けに来てください」

「あいよ」

俺はひらひらと手を振る。

セイバーはそれを見て、石段を駆け上がっていった。

「あゝ、疲れたな。どうすっかなあ、助けに行くべきか？ いやいやそれだとあいつが本気で宝具使ってくる筈だから戦況が不利になる。………やっぱり隠れて機会を窺い、隙が出来たら奴の死角に入りぶった切る。

うん、これが良いな。失敗してもセイバーと二人なら大丈夫だろ」

考えがまとまると石段に寝転がり、月が出ていない曇り空を眺めてしばしの休憩に入る。

第二十二話 終わる決戦

・・・・・・・・・・暗い

何も見えない、俺はどうしてしまったんだ？

よし、何があつたかを思い出そう・・・・・・・・・・何、うまく思い出せ・・・・・・・・るな。

何があつたかを鮮明に思い出せる。

全く、こういう場面では思い出せないと言うのが俺的には面白かつたんだが。

でも、どうしたんだ俺は、死んだのか？

いや、アイアスが壊れた後、一応シールドを張つたはず。

死ぬことは無いだろう、だが今の状況からして死んだというのが一番しつくりする。

だが、俺は死ぬ気など一切無い、心臓を引き抜かれようとも、頭を砕かれようと生きてやる。

すると、いきなり頭の中に声が聞こえてきた。

『いいね、いいねいいねいいねえ。面白いよこの状況、人が死の淵から蘇る、まさに感動のシーンだよ。それに、こんなに早く死なれても僕が面白く無いからね、生き返らせはしてあげよう。それから君次第、頑張つてね。ブツッ』

俺は何を言うまでも無く、奴（神）は通信を切断した。

なんだか最後の音は、聞いたことがあるぞあの音は・・・・・・・・・・そんなくだらない考え事をしていると、視界が黒から白に染まる。

「・・・・・・・・ゲホッゲホッゲホッ」

「蒼緋！！セイバー、蒼緋を！！」

意識を取り戻し、肺に溜まった血を吐くと、激しい痛みが体を襲う。それに、目が見えない、目を潰されたか……。いや違うな触っても眼に以上は無い、考えられるのは血だな。血を流しすぎたための一時的な失明だろう。

今頃、俺を中心に赤い絨毯が敷かれているだろうな。不意に誰かが俺を抱きかかえる。

「大丈夫ですか、蒼緋」

「これが、ゲホッ、大丈夫に見えるのか、お前は」
「それだけ言えれば十分ですね」

この声はセイバーだろう、でも何故セイバーが、シグルドはどうしたんだ？

「もうちょっと待っていて下さい蒼緋、今安全な場所に連れて行きますから……。っ！」

「その男を此方へ渡せ、セイバー。どうせその男は死ぬ、その前に我が止めを刺してやろう」

「蒼緋は渡しませんし死なせません」

「クツクツその男を渡さないと云うのならばセイバー、貴様もろとも消してくれる」

ギルガメッシュの声が聞こえる。

そうか、まだ戦っている途中なのか、しかも俺とセイバーと一緒に消す、か。

エアを使う気だな。

打開策は一つ、どうせ一度死んだ身だ、こっいつ時に使わなければ宝の持ち腐れだろう。

「“天地乖離す開闢の星” エヌマ・エリッシュ　！！」

ギルガメッシュが宝具を使ったらしい、そんなことは無視しろ俺は俺のやることをやる。

俺は神経を研ぎ澄まし、集中する。

——想像しろ、どんな傷をも一瞬で完治させる俺を——

瞬間、体の痛みが消え、視力が戻る。

俺はいつの間にか地面に寝かされていた、が直ぐに起き上がる。前を見るとセイバーが、エクスカリバーを使ってギルガメッシュに對抗している。

でも、流石にエクスカリバーじゃエアには勝てない、ならどうする？ 士郎は何処にいるんだ。

周りを見ると、寺の堀まで吹っ飛ばされたのだろうか、士郎がそこで倒れている。

俺が助けに入るしかないだろう。

俺は剣を能力で創り、右手でつか……めない。どうしたことかと右腕を見てみると、そこには何も無い、本来あるべきものがそこには無かった。

「クソッ!!」

仕方が無い、利き腕じゃないほうでやるしかないか。

さて、問題が一つ出来たな、こいつは果たして腕一本で反動に耐え切れるかだ。

「ウ、ウウウウウウウウウ」

もうセイバー持ちこたえきれないだろう。

えええい。迷っているのなら、やれ。

持てよ俺の体。

俺の左手には黄金の剣、それをセイバーの横に立って使用する。

「“ 約束された勝利の剣 エクスカリバー ” ！！」

「チツ、よもやこの我が押されるとは」

俺がエクスカリバーを使った瞬間、エヌマエリッシュを打ち払っていた。

代償は左腕、筋肉、靱帯、骨の全てがやられた。

「蒼緋、助かりました」

「ああ、それはよかった」

俺は能力を使い、傷を完治させる。

それでもやはり右腕は元に戻らない。

どうなってるんだ。

そうしていると何時かの続きが聞こえてきた。

だが、それは聞き取るのが難しいぐらいの小さな声だ

「セイバー、遠坂の元へ行け！今すぐにだ！！」

「え？は、はい分かりました。では、御武運を」

そういうとセイバーは境内の裏へと走っていった。

「フ、ハハハハハハハハ。唯一勝てる希望を自ら捨てたか、まあ我を倒せないから聖杯を壊す、中々に良い選択だ。

だがな、そうはさせん貴様らを殺して直ぐに、セイバーとあの小娘を殺してやるう」

ギルガメツシュの笑い声が当たりに響く。

「ふっ、そんなことを言っていると、足元をすくわれるぞ」

「はっ、我が？何をバカなことを……………」

ギルガメツシュの視線が俺から外れ立ち上がった士郎に向けられる。

「貴様、死んでいなかったのか。ならばもう一度……………」

先ほど聞こえてきた言葉がついに終わりを告げる。

——その体は、無限の剣で出来ていた——

瞬間士郎を中心の炎が弧を描き壁となり、景色を塗り替える。

そこには、無数の剣が乱立した荒野が広がっていた

「固有結界！？これが貴様の能力か……………」

士郎が一步踏み出す、気付けば士郎の周りにある剣がギルガメツシュが展開している剣と一緒に消えた。

「驚くことは無い。これは全て偽者だ。

おまえの言う、取るに足らない存在だ」

士郎が両脇にある剣に手を伸ばす。

地面に刺さった剣は容易く抜ける。

「だがな、偽者が本物に敵わない、なんて道理は無い。

お前が本物と言うのなら、悉くを凌駕して、その存在を叩き落そ

「士郎！！気をつけろ！！」

「え！？」

忠告したのが遅かったのか、士郎の腕には鎖が絡みついていた。

「待つてろ、今助けに……………」

士郎の下へ駆け寄ろうとしたが、視界が徐々に暗くなってくる。

この症状はもしかして……………貧血、か

俺は倒れそうになった体を気力で踏ん張らせる。

「やめろ、蒼緋。このまま引つ張ったらこいつが外に出てくる、それなら方法は一つ……………」

「お前、死ぬなんて言ってみろ、代わりに俺が殺すぞ。それに遠坂達はどうする、お前が居ないとあいつは……………」

「もう何も言うな蒼緋……………」

「士郎！！」

あいつ本気でギルガメッシュを道連れに……………

「俺は……………諦めない」

「……………最後まで心配させるな！！アーチャー、いるんなら早く投げろ！！」

一応、言ってみたが応答は無い。

クソッ、なら俺が……………」

急いで莫耶を創り、投げる体制に入ったが貧血でふらつく、倒れそうになる俺の腕を誰かが掴んで

「止めておいたほうが良い、今の君には正確に投げる力はないのだらう?」

そいつは俺が創った莫耶を俺の手から取り、悩むような顔を一瞬して……

「……ふん。貴様の勝手だが、その前に右に避ける」

そう行つて莫耶をギルガメッシュに向けて投げる。

士郎は、ありえないものの声を聞いたように後ろを振り向き、目を見開く。

士郎の顔数センチ横を莫耶が通り過ぎてギルガメッシュの頭に突き刺さる。

「お見事」

「ふつ、それほどでも」

完璧に目が見えなくなった。

これでは、俺が目覚めた意味が無いな、全く出番が無い舞台とは空しい事だ。

そこから、俺の意識は途絶えた。

第二十二話 終わる決戦（後書き）

もう士郎とギルガメッシュの戦いの所は面倒なんで省きました
それと主人公の出番をもう少し増やさないと・・・・・・・・

第二十三話 包囲

聖杯戦争が終わって一ヶ月。

聖杯戦争時に起きた事件は教会の手により人々の記憶の中から消し去った。

と、言うより隠蔽されて無かった事になった。

今思うと色んなことがあったなあ。

遠坂が魔術師だったり、いきなりランサーに心臓を貫かれたり、蒼緋はいきなり泊まらせてくれなんて言ってきたし……。

思い出せばきりが無い。

それに、無事に聖杯戦争が終わって平和な日常を取り戻したんだ、これからはゆっくりできるな。

でも、問題が一つ、それは……………。

「おい、まだ起きないのか？」

「ああ。もう一ヶ月も経ってるのにな起きない、本当にどうしたんだろうな」

それは、蒼緋が一ヶ月もの間ずっと昏睡状態に陥っているからだ。シグルドはいつもここ（衛宮邸の蒼緋の部屋）に来ては俺にさつきと同じ質問ばかりする。

「ったく。お前が起きないと勝負が出来ねーだろ、とっとと起きろよ」

「まあ、そういうなって蒼緋は好きでこうなったわけじゃないんだ、待ってやれよ」

「だけどよ。聖杯戦争の最後に俺がギルガメッシュを奇襲して殺そうかと思ってたのに、計画を変更するもんだから俺の出番が無かったんだよ。」

それを考えると・・・・・・・・・・・・・・・・うおおおおおお！
！早く起きろよこん畜生！！」

いきなり愚痴をこぼし始めたと思うと、頭を抱え込み叫ぶ。
はつきり言って普通の人が見たら、白い目で見られるのは確実だな。

「はいはい。病人がいるんだから静かにする？それとも・・・・・・・・

」

俺の隣にいた遠坂が右腕をチラリと見る。
それに気付いたシグルドは

「ほんつとくにすいませんでした」

綺麗な土下座をして、謝罪をした。

「うん。それでいいのよ」

遠坂、やけに楽しそうだな。

グギョルルルル

大きな腹の音が部屋に響く。

恥ずかしい、今の腹の音は俺だ。

「あ、もうお昼か。お昼ご飯にしましよ、今日は私が作るから」

「俺も食わせて貰おうかなっ」と

「よし、なら俺はセイバーを呼んでくるよ」

「直ぐ出来るって訳じゃないから、セイバーと鍛錬でもしてたら？」
「分かった」

俺は部屋を出て道場に向かう。

「さて、今日こそは一本……いや二本取ってやる」

少し、ほんの少し目標を高くする俺であった。

「セイバー」

「はい。何でしょう？」

「もう直ぐで昼飯なんだけど時間が掛かるって、遠坂に言われてさ、飯が出来るまで鍛錬でもしないか」

「分かりました」

セイバーは立ち上がり掛けてあつた竹刀を二本取り、一本を俺に投げてくる。

「今日こそは一本取ってやる」

「そのいきですシロウ」

——それから三十分後

「ふう。今日はこれくらいにしましょう」

「ぐ、でででで」

「大丈夫ですかシロウ」

「なんか日に日にセイバーの動きについていけなくなってるような気がする」

「そんなことはありません。そう見えるのはシロウの技量が上がっているからです」

「俺の技量が上がってる？」

首を傾げながら返事をする。

うーんセイバーの言ってることがよく分からないな。

「そう、シロウの技量が上がれば私もそれに見合う分の力を出して相手をしているのです」

あ、そうか。そうだよな今までの強さで戦っても効果が無くなってくるからな。

でも、これじゃあセイバーから一本取るのはまた難しくなってきたって事か。

「……はあ。気が遠くなるなあ」

「何か言いましたかシロウ？」

「いんや、何も」

本当、いつになったら一本取れるのやら。

軽く落ち込んでいるとシグルドが、道場に来た。

「よーっす。おうおうまたやられたのか士郎、お前もこりねーなあ」

「うるせー、これでも少しは強くなったんだぞ」

「へー。ならお前がどれくらい強くなったか、教えてもらおうとするか。ほら立て」

「いつもは頼んでも拒否するお前が相手してくれるんだ、本気で行かせて貰うからな」

「来い来い、お前じゃ俺から一本取ることなんて出来ねーよ。セイバー竹刀貸してくれ」

「あ、はい分かりました」

セイバーから竹刀が渡される。

シグルドは竹刀を肩に担ぐような格好で構える。

俺は普通に正眼に構える。

「準備はいいか？」

「ああ、いつでもいいぞ」

返事じをした瞬間、体が硬直する。

いつの間にか息が荒くなる。

「どうした、殺気を漲らせた英霊とも戦ったんだろう、これぐらいでへこたれてんじゃないぞ」

「シロウ、落ち着いてください、体に力が入っていますよ」

ふう、そうだセイバーの言うとおり、体の力を抜こうそして軽く深呼吸するんだ。

目を瞑り、呼吸を整え、そして目を開ける。

よし、体の硬直が解けてきた、これなら……。

「ほう。まあ確かに前よりはマシになったな」

「それほどでも！！」

俺はシグルドの一瞬見せた隙について袈裟懸けに竹刀を振る。

「うん、確かに強くなっている、が……」

シグルドが竹刀を喉元に突きつける。

「こんなわざと隙を見せるトラップに掛かるのはよろしくないな」
「くっ」

反論することが出来ないことが悔しい。

何でかって？それは俺が振り下ろした竹刀をシグルドが足の指の間ではさんで動けなかったからだ。
改めてシグルドの強さに感心する。

「まっ俺が隙を作ったのを気付いたんだ、前よりはマシになったことは確かだな」

「くうー。今度も秒殺か……」

「まあそう、ガツカリすんなよ」

そついうとシグルドは道場を出て行つた。
と、思つたらまた戻ってきた。

「あ、そつだった。遠坂の穰ちゃんが飯が出来たから来いってよ」
「分かった。行こう、セイバー」

「はい。早く行かないとご飯が冷めてしまいます」

セイバーは早足で道場を後にした。

俺もその後についていく。

セイバーが今の障子を開けると、動きが止まる。

「こ、これはっ！！」

「ん？どうしたんだ」

開けかけた障子を、俺が開けて中を確認すると、そこにはテーブル一面に豪華な料理が並べられていた。

「おいどうしたんだよこれ」

「ライダーが特売日だからって大量に買ってきたのよ」

「へえー、流石だなライダー、貯金が底を尽きかけているのにこんな食材を買ってきたのか。感心感心」

ライダーにはいつも一定の金額を渡して、買出しに行ってもらっているのだ。

だって自分で行きたくても行けないんだもんな。

「そんなところで突っ立ってないで早く座れテメーら、飯が食えねーだろ」

「あ、ああ。分かった」

「すいません」

家の食事は全員が揃わないと食わないようにしてある。

シグルドは遠坂が料理当番の時は必ず飯を食いに来る、なぜかという・・・

「うほー、いつ食っても中華はうめえー!!」

そうシグルドはつい最近中華を食べて中華の虜になってしまったからだ。

それと、中華の日になると必ず起きるんだ・・・

「シグルド、それは私の餃子ですよ!!」

「うるへー取られるのが悪いんだろぅが」

「い、いいましたね」

二人の戦いが・・・。。。

「うおおおおおおおお」

ガツピシッガツガツピシッガツガツムシャゴクガツガツガツムシャ

「はああああああああ」

ガツピシツガツガツピシツガツガツ、ゴクムシヤムシヤガツガツ

二人の手のスピードが見えなくなってきた、それに途中に聞こえるピシッ、と言う音は二人の箸が激突するときにする音だ。

おっと解説する前に俺も早く食わないと無くなってしまふ。

――― 食事が始まり、二十分経過

シグルドが胸を張ってセイバーを立てて見下ろしている。

それにくら比べてセイバーは、四つん這いで悔しそうに俯いている。

「ふっ俺の勝ちだなセイバー」

「くっ、また貴方に勝てなかった」

さて一つ疑問が出来たぞ。

あいつら、どうやって勝敗を決めるんだ。

ちよっと聞いてみよう。

「シグルド、ちよっといいか？」

「ん？なんだ？」

「お前らってどうやって勝敗を決めてるんだ？」

「なんだそんなことか。勝敗の決め方は箸がぶつかってピシッって音が鳴るだろ？あの時二人とも同じのを狙ってるからどっちが多く目的の物を取るか競ってたんだよ」

「そ、そうなのか」

「へえー、あの一瞬でそんなことするんだ。英霊って凄いわねー」

セイバーとシグルド、二人の食欲に感嘆するよ。
二人をずっと見ていると玄関から音がした。
居間にいる全ての者が戦闘態勢に入る。

「ただいま戻りました」

「なんだ、ライダーか」

「ライダーだったの」

「ふう、ライダーでしたか」

「驚かすなよ」

全員ライダーだと分かると戦闘体制を解く。

「ライダー、どうだった？」

「はい、ここら一帯に人払いの結界を張られており、結果内に一般人はいませんでした」

「で、敵の様子は？」

「ここの屋敷を中心に円形状に大体二百人ほどで囲まれています」

「に、二百う！？」

「この前より増えてるわね、そろそろこっちの結界も突破されるでしょうし」

はあ、平和になったは良いけど、こんなことになるとは思わなかったなあ。

聖杯戦争が終わり、一週間程立って俺たちは協会と教会に教われるようになった。

もちろん最初は交渉だけだったんだけど、相手の交渉の内容が余りにもアレだったから遠坂が全て断ったら、どんどんエスカレートして襲われるようになったんだ。

それに交渉が英霊を実験用に差し出せ、そりゃそんなことを言われたらキレるよな。

そんなことがあつてかセイバーの“風王結界”インビジブル・エアでここを覆っているんだけど、遠坂曰く良くて二、三週間つてとこね、て言つてたし。だからライダーには霊体化して買物に行つて貰っている。

「ハツたかが二百、英霊三人揃えば即殺だろ」

「駄目よ殺しちゃ、そしたら私達の首に賞金が掛けられて色んな奴から命を狙われることになる。今後の為にそれだけは避けたいのよ」
「だがよ、向けられた殺意には殺意を持って挑むのが普通だろ!!」
「それはそうですが、状況が状況なので仕方ないでしょう」

「じゃあこのまま指を咥えてろつてか!？」

「いや、用は相手を殺さなきゃいいの、殺さなきゃね」

遠坂は意味深な言い方で呟く。

俺にはよく意味が分からないなあ。

「……そうだな、殺さなきゃいいんだ殺さなきゃ」

すると、その意味に気付いたのかシグルドが立ち上がり、玄関に向かう。

「ちょっと待ちなさいシグルド」

「あ?なんだ?」

「今あなた一人が突っ込んで行つても死ぬだけよ」

「は?俺が死ぬ?バカなことを言うな」

「シグルド、少し落ち着いてください」

「ライダー、俺に落ち着けてるのは無理な質問だ。奴らは俺らを実験用に差し出せと言つたんだぞ、こっちは腸が煮えくり返つて煮汁も出ないぐらいキレてんだ」

「ちよつと待てよシグルド、遠坂は何か作があつてそう言つたんだ、遠坂の意見を聞いてからにしよう」

俺がそういうと、セイバー、ライダー、遠坂はシグルドを見る。

「——ちつ。分かったよ」

シグルドは諦めて畳に胡坐で座る。

「で、どうすんだよ」

「ライダー、周りを囲んでいた人たちの服装を覚えてくれない？」

「私が見る限り、百名近くが黒いスーツ、他の者達は言峰綺礼のよ
うな格好をしたりしていました」

「参ったわね、教会と協会が手を組んだってことか。協会は代行
者、でも流石に教会はねえ、もし埋葬機関の化け物が出てくれば・
・・」

遠坂の最後の言葉がよく聞こえなかった、なんて言っただろう？

「で、どうすんだ穰ちゃん」

「教会の化け物級の奴らが出てくる前に・・・・・殺さずに全滅、
これしか無いでしょうね」

「では結界を解きますか？」

「いや、結界を解いて囲まれたら危ないから結界の一部を人が通れ
るようにして、そこから入って来たのだけやりましょう」

「そうだな、結界を解いて囲まれて穰ちゃんと士郎を庇いながら戦
うのは流石に無理だからな、それが良いだろ」

「私もそれで良いと思います」

「よし。じゃあこれから三十分後に作戦を開始するわよ。各自準備
が出来たら庭に集合ね」

「分かった」

「分かりました」

返事をしたのは俺とセイバーだけ他は直ぐに居間を出て行った。
その後、急遽決まった作戦に支障が無いように遠坂にマッサージを
してもらった。

「なあ、遠坂？」

「何？」

「お前準備しなくてもいいのか？」

「準備なんてとつくの昔に終わってるわよ、どうせ直ぐにシグルド
が何かをきっかけに我慢に限界が来て特攻するかも知れないと読ん
でたのよ。」

あゝでも考えてたより、早かったなーもう少し後になるだろうと踏
んでただけど、まあいいでしょ、同じことをするんだし」

「は、はは。凄いな遠坂」

「まあ、シグルドの行動は分かりやすいからね」

俺は分かっている遠坂は自慢げに言っているが、絶対にポ力をやら
かす。

蒼緋が言うには遺伝的だそうだが・・・・・・・・。
心配だなあゝ。

「はい。これぐらいでいいでしょ」

「ありがとう遠坂、助かったよ」

「礼には及ばないわ、やる事が無かったただけだしね。それじゃ先
に行ってるわよ」

「ああ、俺も直ぐに行くよ」

遠坂は居間を出て庭に行った。

俺も立ち上がって外に出る。

すると、庭にはすでに四人が揃っていた。

「まだ、十五分しか経って無いぞ？」

「ふん、こっちはいつでも準備万端なんだよ」

「私もです」

「セイバーに同じく」

「ふう、皆せっかちな」

遠坂が言うのとサーヴァント三人組が遠坂ジーと見る。

「なあセイバー、俺確かお前の次にここに来たよな？」

「はい、そして私はライダーの次に来ました」

「私が来た時にはもうすでにリンがいました」

「う、うぐぐぐぐ」

「つまりだ、穰ちゃんが一番せっかちと言うことだ」

「ま、負けたわ」

と、遠坂が負けを認めるなんて……

ま、それはもう置いといて。

「で、どうするんだ遠坂。まだ時間があるけど……」

「もちろん、今から戦うに決まってるでしょうが」

遠坂がそういうとセイバー達が頷く。

結局皆せっかちなんだな。

「じゃあセイバーその扉に結界を人が通れるぐらいの大きさで開けてくれる？」

「分かりました」

セイバーが返事をする、渦巻いていた風の壁が少しずつ開き始め

た。

第二十三話 包囲（後書き）

ちよつと急展開すぎたかな？

第二十四話 なぜこんな所に？

「いやっほーいーい」

聖杯戦争が終わって約一ヶ月がたった。

俺は確か血が足りなくて倒れたはずなのに、何故こんな所にいるんだ？

辺りを見回すとジェットコースター、観覧車、メリーゴーランド・・・etc。
言うときりが無い。

「はあゝ楽しかった。君も乗ろうよ」

ああ、何故俺はこんな所に・・・。。。

あの聖杯戦争という血肉沸き踊る戦場からどうやって俺はこんな遊園地に着たんだ？

聞いてもあのバカは答えないしな。

しかもあのバカのせいでストレスが・・・

「ちよつと聞してる？今度はジェットコースターに乗りに行こうよ。いや乗りに行くぞ！！」

握り拳を作って俺の肩に手を置く。

ふう、こいつと居るとストレスが溜まるな。

「だからそのストレスを解消するためにジェットコースターに・・・」

「次、俺の心を読んだら例え神でも殺す」

「えー←ええ→」

「スクール。イズの機会音声の真似か……何故だろう
無性にお前を殺したくなってきた」

ベンチに座っていた俺は立ち上がり、刀を創造する。

•
•
•
•
•
•
•
•

「ぶっ――――！！これで二回目だよ」

「くっ!!」

剣は創られず俺の手は空気を掴んでいた。

俺は諦めてベンチに座りなおす。

「いやあ君が同じことを二回もするなんて面白いねえ。はっはっはっ愉快だなあ」

くっ、何も言えない俺が憎い。

「最初に能力は使えないようにしてるから、って言ったのに君は・
・
・
・
・
・
ぷつくくくくくくくくくく」

こいつと居ると本当にストレスが溜まってくる。

「もうそろそろ、俺を士郎達の下へ歸せ」

「うんちよつと待った」

バカ（神）はそういうとベンチに座り目を閉じて瞑想状態に入った。

[illegible]

そう思った瞬間、バカの目が、かつ、と開き。

「もう少ししてから帰してあげるよ。あと少しで揃うから」

「揃う？　どういうことだ？」

「今ね、衛宮邸を中心に円形状に二百人で包囲されているんだよ」

「・・・そんなことか、あいつらにとって二百人じゃ足りないだろう」

「そうだろうね、でも衛宮邸に向けて二つの大きな魔力が動き出したんだよ」。

しかも一人は魔法使い、二人目は・・・何て説明すればいいのかかわかないけどまあとにかく、衛宮邸に強い人が向かっているのは確かだよ」

魔法使い・・・思い当たる節はあるがどっちだ？　青崎青子がいやゼルレッチかもしれない、それと後一人・・・ふっ、全く思いつかない。

「うーん、僕も説明してあげたいんだけど、説明しづらくて僕じゃ無理だね」

「なら、性別だけでも教える」

「えーと、性別は女だよ」

女か・・・やはり分からん、これだけでは情報が少なすぎる。

もうちょっと詳しく聞いてみるか。

俺が口を開いた瞬間バカの口が動く。

「もう説明するの嫌だよ、面倒くさいし・・・」
「使えない神だな」

「……ふう、まあまず魔法使いならセイバーの対魔力、もう一人の正体不明の女はシグルドとライダーで相手をすれば直ぐに決着がつくだろう。」

「うーんなら強い人を後二人増やそうかな」

「おい、あいつらを殺す気か？」

「いや別に殺すつもりは無いけど。ほら、よくマンガとかアニメで皆が絶体絶命のピンチの時に助けに来てくれるヒーローがいるじゃん？」

「ああ、それがどうした？」

「いやね、その役を君に任せよう」と

「……その申し出は嬉しいが、俺は友人が傷つくのを見たくないんだ、そんなことをしている場合じゃない。だから早く俺を士郎達の下へ戻せ」

「ふう、残念だ僕の言うことが聞けないなら……」

「なんだ？視界がどんどん暗くなってくる、それに眠い。」

「あのバカ、俺が言うことを聞かないから眠らせて時間を稼ぐつもりか。」

「君の考えている通り、丁度良い時間まで眠って貰うよ」

「き、さまあ」

「クソ、皆無事で居てくれ。」

「そこから俺の意識は途絶えた。」

「ふう、こりゃあもうちょっかい出さないほうが良いかな、次ぎ会ったら殺されそうだし」

第二十五話 結界突破

「士郎、そこから敵が入ってきた瞬間弓で足か腕を狙って」
「分かった」

セイバーが風王結界に空けた穴は人一人通れるぐらいの大きさだ。そこから入ってきた瞬間に士郎が弓で相手の戦闘能力を低下させ、サーヴァントに止めを刺させる。

「なんとも、面白くない戦い方だなあおい」
「いや、安全を考慮すればこの戦い方はいいでしょう」
「二人ともそろそろ来ますよ」

ライダーがそう言うと、穴から一人、スーツ姿の男が入ってきた。

「士郎!!」
「ああ、分かってる」

士郎が弓を放つ。

それは相手の右太股に刺さり、体勢を崩した所を

「どっせーい!!」

シグルドの右ストレートが射抜く。
スーツ姿の・・・いや協会の人間が吹っ飛ぶ。

「なんて威力よ全く。ライダー気絶した人たちの持ち物奪って、縄で縛っという」
「分かりました」

ライダーは吹っ飛ばされた協会の人間の元へ行き持っているものを奪い縄で縛る。

「っしゃあ！どんだん来いやコラア」

シグルドが叫ぶともう一人入ってきた、今度は教会の人間だ。その教会の人も同じパターンで気絶させる。それを数回いや数十回も続けると……

「やべ、そろそろ手痛くなってきた。セイバー交代してくれ」
「分かりました、後は私に任せてください」

セイバーは予め士郎が強化をしておいた木刀で相手を気絶させていく。

それから数十人を倒した頃に……

「遠坂、これ以上したら俺の腕が危ない交代してくれ」
「分かったわご苦労様、後は休んでなさい」

今度は弓の代わりに遠坂のガンド。

また同じパターンで数十人を気絶させたら……

「リン」

「何、ライダー？」

「もう縄がありません、どうしましょう？」

「そうね……相手の持ち物奪った後に、こっ……骨を外すか折って頂戴」
「分かりました」

もう六十人目ぐらいだろうか、襲ってきた人たちが積み上げられていき、山が出来てきた。

下の人はさぞかし痛いだろうなと、士郎は思っていた。

「ライダーそんなに、積み上げたら下の人たちが苦しいはずだから、上の人たちを下ろしてあげよう」

「そうですね、分かりました」

ライダーは、人で出来た山の頂上から崩していく。
数分後山は無くなり、平地が出来ていた。

「ライダーそっちに一人行っただわよー」

遠坂がそういうと、空から人が降って来た。

ライダーはその人の持ち物を奪い、骨を外していく。

「ライダー、骨外すの上手だな」

「はい、よくお姉さま達に外されていましたから」

「そ、そうなんだ……」

士郎はライダーと居るのがつらくなり縁側に座りに行く。
そこには手を氷で冷やしているシグルドが居た。

「ふう、あいつら魔術で防御力を上げてやがるから、三十人位で拳が痛くなってきちゃったよ」

「実際三十人殴って拳を痛めない人はこの世に居ないと思うけどな」

そんな話をしているといきなりシグルドの顔が険しくなる。

「どうしたんだシグルド？」

「面倒なのが来たぞ」

「へ？」

瞬間、風王結界が掻き消えた。

「え……？なんで風王結界が！？」

「風王結界を突破するとしたら何かしらの宝具か、魔法使いか、それとも特殊な能力を持っている奴だな」

「魔法使い！？」

「お前、宝具と特殊な能力はどうでもいいのかよ」

魔法使いと聞いて目を輝かせる？士郎をシグルドが変な目で見る。すると塀の向こう側から声が聞こえた。

「はあ、結界破ったんだしもう私の出番は必要ないってーのになんて戦わないといけないのよ」

俺は士郎を引っ張り遠坂たちの下へ行く。

「今の女の声の主が結界を破った張本人みたいだな」

「そうみたいね。どうやって破ったかは知らないけどその女から先に倒しましょう」

「そうですね。では私とシグルドが前衛、ライダーはリンとシロウの護衛、リンとシロウは後衛で出来れば援護それと、蒼緋を人質に取られぬよう守っていてください」

「分かったわ」

「分かった」

「では行ってきます」

セイバーは説明が終わったら直ぐにシグルドと共に塀の向こう側へ

消えていった。

「でも、凄いわね」

「セイバーがか？」

「それもだけど、感じない？この魔力量が尋常じゃないわ」

「そうか？蒼緋と一緒に居たからよく分からないな」

「はあ、この戦いが終わったら特訓ね」

「お手柔らかに頼みます。ってうおー!!」

一瞬視界がブレた。

「ライダー？」

「二人とも敵はまだたくさん居ます気を緩めないでください」

先ほどまで自分が居た場所を見ると、地面に直径約十五センチほどの穴が開いていた。

さっき視界がブレたのはライダーに腕を引っ張られたからか、感謝しないとな。

「では私が庭に入ってきたものを倒していきますから、その取りこぼしをお願いします」

「ああ、分かった」

「分かったわ」

それから数百人对三人の戦いが始まった。
そのころセイバー達は……

「ハア―イ、貴方達が私の相手をしてくれるのかな？」

「ったりめーだ。それに結界破ったのテメーだろ？」

「あり、ばれちゃったか。ははは」

そう言いながら大きなトランクを持った赤髪の女が笑う。
それに腹が立ったのかシグルドがキレる

「テンメー女だからって容赦しねーぞー!!」

シグルドは駆け出し、女に殴りかかる。

「シグルド、無理に突っ込んではいけません」
「知るかゴラァ」

シグルドの拳が女の顔に当たる瞬間

「ど〜ん」

女が呟くと、腹に衝撃が走る。

「グフウ」

シグルドは塀まで吹き飛んだ。

セイバーはその女から目を離さない。

というより外せない、相手は無詠唱で魔術を行使できる。

それより、風王結界を破って魔力が激減していると思っていたのに
この女はピンピンしている、流石の対魔力Aの私でも耐え切れるか
どうか……………

「なに？来ないならこっちからいくわよ？」

「————!!」

女の手から波動が放たれる。

セイバーはそれを直感で避ける。

「へーやるわね。流石英霊ね、でもこれならどうかしら」

女が瞬時に大量の魔力を両手に集めて放ってくる。

「スヴィアー!!」

セイバーは直ぐに回避行動を取り避ける。
が、

「ブレイク!!」

二発目の攻撃を避けきれずに吹き飛ばされて塀にぶつかる。

「く、今のは!？」

「ありゃあ片腕で1発ずつ放つ魔法だな」

「魔法!？」

「この時代にお前を傷つけられる魔術師は存在しないだろうしな。考えられるのは魔法使いだけだ」

「確かに少し、厄介ですね」

「少しどころじゃねえぞこいつは」

シグルドは立ち上がり、セイバーに手を貸して立ち上がらせる。

「こいつは殺さないで戦うのは無理だな」

「そうですね、殺す気で行かないと此方がやられる」

セイバーは木刀を破棄し、エクスカリバーを具現化させる。
シグルドも素手をやめてグラムを具現化させる。

「おお、二人とも本気を出してくれるのね？」

「調子に乗っていられんのは今だけだ、死んでも後悔すんなよ」

「しないしない」というかまだ死ねないもの」

「あの女性、緊張感が全くと言って良いほどありませんね」

「そんなことはどうでも良い、行くぞ！！」

シグルドとセイバーが二手に分かれて、挟み撃ちにする。

「死ねやゴルア」

シグルドは上からセイバーが下から切り上げる。

二人は女に一撃与えたかと思った瞬間、セイバーとシグルドの剣がぶつかった。

「な、消えた！？」

「おいおい、冗談じゃないぜ全くよお」

「私はここよ」

二人は塀の方を見る、そこには先ほど消えた女が立っていた。

「はは、なんつー女だ」

「これはライダーも呼んだほうが……」

「いや、それは無理みたいだな」

「え？」

シグルドは女に背を向けて、背後から迫っていた剣をグラムで弾く。

「今のは！？」

「どうやら、もう一匹手強そうなのが居るみたいだ」

「では・・・」

「ああ、そいつはお前に任せたぞ」

「はい、分かりました」

シグルドは何処から投げってきたのか周りを見回す。
すると、坂の下に不振な人影が見えた。

「見つけたあ！！」

シグルドは坂の頂上から下まで飛んだ。

「ふっはははは」

シグルドは久し振りに思いっきり動けたのが嬉しくて、笑いながら
人影を追う。

人影は路地に入ったり細い道を通ったり、屋根を飛び移ったりして、
最後には雑草とベンチしかない公園にやってきた。

追って来た奴はフードを被り顔が見えない。

「俺をこんな所まで誘ってきたんだ、そろそろ顔を見せろよ」

「・・・」

「無視か、なら実力行使と行かせて貰うぞ！！」

シグルドは切りかかる。

フードを被ってる奴も懷から剣を取り出しそれを受ける。

「俺の打ち込みに耐えたか、ならこれはどうだ？」

シグルドは鍔迫り合いの中ノーモーションからの蹴り上げた。
フードが破れ、フードに隠れていた顔が見える、髪と目は青、性別

は女。

「……………なんで」

「……………?」

「なんで、女しかこねーんだよ。　たく女と戦っても楽しくないってーの」

シグルドがそういうと女が、いつの間にか手に持っていた剣を三本ずつ投げてくる。

「はぁー、まあいいか」

投げられた剣を全て叩き落とす。

「ちよつとばかり本気で戦ってやるよ」

シグルドは再び女に切りかかる。

女はシグルドの剣を捌く。

「やるじゃねーか、ならもうちよつと力出してやるよ」

「……………!!」

シグルドのスピードが上がる。

女は危険を感じたのか、直ぐにシグルドの間合いから離れ距離を取る。

「お前強いな、名前はなんて言うんだ?」

「……………」

また無視されるシグルド。

キレて挑発しようと口を開けた瞬間、女の声が聞こえた。

「私は埋葬機関が第七位、『弓』のシエルともうします」
「ほー」

シグルドはシエルを珍しいものを見るような目で見つめる。

「私に何か？」

「いや、ちゃんと喋れるんだなと思ってな」

「そうですね。ではそろそろ始めましょう、私は貴方を殺すか、捕獲を言い渡されているのです」

「そうかい、ならアンタも本気出して来いよ」

「本気？何を言ってるんです、私は……………」

「武器だ」

「え？」

「お前、その武器より使い慣れたやつがあるだろ？それで来いよ」

シエルは驚いた顔をしている。

たった数回切り結んだだけで見破られるなんて。

「良いでしょう」

そう言うとシエルが服を脱ぎ去る。

「おいおい、こんな所で裸になるつもり……………か？」

シエルは服の下にもう一着着込んでいた。

その服には袖が無く、スカートも短い。

するとシエルの体から光が発せられ、背中には羽のようなものが浮かび上がる。

脱いだ服が空を舞いながら形を変えていき、最後にシエルの手元に
戻っていく。

「まあ、さっきより動きやすそうだな」

「気をつけてくださいね、この武器は霊体到大して絶大な威力を
揮いますから」

「って言うことは、それをまともに喰らえば危ないって事か。ご忠
告ありがとさん」

そういうとシエルの殺気、魔力が膨れ上がる。

シグルドもそれに感化されたのか、先ほどとは顔つきが変わる。

「お前は本気で戦うに値する女だ。ちゃんと見てろよ俺の動きを、
ちゃんとかわせよ俺の剣を、そうしなければお前は必ず……
死ぬ」

これより、英霊VS埋葬機関の化け物対決が始まる。

第二十六話 仮初の勝利（前書き）

今回はちょっと短めです。

第二十六話 仮初の勝利

「ウオラアア！！」

「くっ！！」

シグルドとシエルの戦いが始まり数十分が経つ。
その数十分のうち、二人ともともに攻撃を受けてはいない。

「ちよろちよろ逃げ回りやがって、オラア！！」

クツソあの女服を脱いでからスピード上がってねーか？

あんなでかい武器もってスピードが上がるなんておかしくないかい。

もしかして重力軽減使ってるのか？

いやいやそれなら一発一発があんな重いわけ無いしなあ。

全く最初はただの雑魚と思ってたが、普通に化け物だなこいつ。

シエルつつたけか？あいつの魔力はサーヴァントの俺と同等、いやそれ以上じゃね？

てかそれほど魔力持つてんのに魔術を使わないのは何でだ……
……っはもしかしてなめられてるの俺？

「隙あり！！」

「うお！！」

つぶねえ。

こりゃあもうなめられてんだからもう、アレだね、うん殺すしかないね。

「もういい、女だから使わないでおこうとした俺がバカだった、次

の一撃で終わらせるぞ」

シグルドが動くのを止めると、シエルのほつも動くのを止める。

「次の一撃で終わらせる、か。まだまともに一撃当てたわけじゃないのに、よくそんなことが言えますね？」

「ふん、言ってる。とにかく次の一撃でお前を殺してやる」

「殺す、ですか。私を殺せるなら殺して欲しいものです」

「ほお、死にたがり屋か。ならその首……貫き受ける！」

「ですがそう簡単にはやられま——え？」

一瞬にしてシグルドがシエルの視界から消える。

「あれ？どういうことでしょう。目が見えなく……なって……きまし……た」

シエルが喋ってる間、少しずつ首が横にずれて最後には首が地面に落ちる。

「ああ、殺っちまったよおい、女は殺さないよう努力してきたのになあ」

シグルドはそう呟きシエルの胴体を見つめると、胴体が地面に倒れる。

それを見届けた後、思い出したかのように

「あ、士郎達の援護に行かねーと」

シグルドは走り、その場を離れていく。

「走るのきついから、少し歩いていこう。ライダーとセイバーが居るんだ大丈夫だろ」

と、道中に歩き出すのであった。

その頃セイバーは――

「そらそら、まだまだいっぱいあるわよ」

「フツハツ!!」

ボン

「クウ!!」

「どう私の魔法、結構多様性があるのよ？」

セイバーは、青子の攻撃を避けるが、設置された魔力の球体にぶつかり吹っ飛ばされる。

それをずつと繰り返し、流石のセイバーも体力の限界に近づいてきていた。

「それ!!」

また魔力の波動が此方に迫ってくる。
それを横に回避する。

ボン

また設置された魔力の球体にぶつかる。

「クウ!!」

流石の魔力耐性Aのセイバーでも魔法をこつも、喰らい続けるときつい。

「喰らってしまうのなら」

魔力を足に寄せ、一気に駆け出す。

ボン、ボボン。

「え、ちょ、何いきなりダメージ無視で特攻？」

しめた!! 相手は動揺しているこの機会に……

「ハアアアアア」

大上段からの一撃、青子の体が縦に真つ二つに斬り裂かれる。

「——え」

斬った筈の青子の体が、どんどん透けて消えていく。
すると、坂の下から声が聞こえた。

「あつぶないわね。今の避けなかったら死ぬ所だったわよ」

まさか、魔力放出でスピードを上げた、私の動きが見えていた？

「今の直感で避けなかったら危なかったわよ、マジで」

見えていたわけでは無かったのですね。

でも、アレを避けられたのなら、もう宝具を使うしかない。

相手は中・遠距離型、接近して隙を作り、逃げられないよう直ぐにエクスカリバーを使う、これで行くしか無いですね。

「さあて、続きを始めましょう」

青子が転移をしてセイバーの回りに魔力の球体を設置させる。

「クッ、またそのような小細工を」

「英霊相手に戦うには、慎重に行かないと直ぐ死んじゃうもん」

これではまた先ほどの二の舞に……。いやもう良い、所詮は魔力の塊、切り裂けばいい。

「ハアアアアアア!!」

剣に魔力を乗せて、設置された魔力の球体を切り裂いていく。
丁度セイバーは青子に背中を向けていた。

「アチャー、ちよつち危ないわね。ならこれで!!」

魔力の波動をセイバーに放つ。

スパ

「……………うそ」

「背後から狙うなど騎士道の風上にも置けませんね」

「私、騎士じゃないもん」

そういつと青子は焦って大量にセイバー目掛けてがむしゃらに魔力の波動を放ちまくる。

「ハッ!!」

セイバーは飛び上がり、波動を避けて青子の目の前に立つ。

「こうなったら、転移で……」

「させません!!」

セイバーは青子の腕を掴むと、空中に放り投げる。

「“エクス（約束された）”」

「うそ……」

セイバーの黄金の剣が輝きを増し、空中に居る青子に狙いを定める。

「カリバー（勝利の剣）”!!」

エクスカリバーから放たれた光に青子が飲み込まれる。

エクスカリバーの通った軌跡には青子の姿は見えない。

「勝った、のですか」

正直、宝具が無ければ危なかった。

と、それより早く士郎達の元へ行かなければ。

第二十七話（前書き）

一時間で書いたものです

多分意味不明な所と誤字脱字があるかと思うけど気にしないでください。

それとタイトルは思いつかなかったので書きませんでした。

第二十七話

「士郎、後何人位いる？」

「えつと……100人位、ですかね？」

流石の多さに敬語を使う俺。

でも、何でだろう余り恐怖は感じない。

恐怖は感じなくても、今は絶体絶命なんだけど。流石に囲まれてたらなあ。

と、考え事をしていたら、剣が投げられてきた。

キン！

「シロウ、今は戦闘に集中してください」

「すまんライダー」

「それじゃあ、いくわよ」

遠坂が走り出すと、それにあわせて周りの敵も動き出す。

包囲網を突破するってたって他に方法があったんじゃないか遠坂？
いくら一点突破だって流石に厳しいだろ。

「ハッ！！」

おお、教会の人の顎に肘鉄食らわせやがった。

「ヤッ！！」

次は水面蹴り

「ハアッ!!」

そしてフィニッシュの黄金の右。

うん、実に見事なコンボだな、遠坂。

その時、コンボが終わった瞬間、横から剣が襲い掛かる。

「そうは、させるかあ!!」

投影した干将と莫耶を投げて剣を弾く。

「助かったわ、士郎」

クソ、流石に今のはまずかった、つい宝具を投影してしまった。
もうこーなったら………

「もう後戻りは出来ないな」

でも流石に宝具を百本単位で投影するのは無理だから、さっき投げられた剣を投影して放てば、突破は簡単にいくだろうな。
俺は直ぐに二十七の回路に設計図を走らせる。

「———ロールアウト 工程完了。バレット 全投影、クリア 待機」

俺に向かって投げられる剣を干将・莫耶で打ち落とし

「———フリーズアウト 停止解答、ソードバレルフルオープン 全投影連続層射!!」

投影された剣、いや黒鍵は目の前で道をふさいでる人達の足に突き刺さる。

今ので大勢の人達が倒れていく。

「ナイス士郎!!」

そついいながら倒れた人を踏んで先に進んでいく。

「よし、突破した。ライダー、抑え目をお願い!!」

「はい、フレイカー・ゴルゴーン“自己封印・暗黒神殿”」

最後尾に居たライダーが俺らを囲んでいた人達の方に振り返り、宝具を使う。

途端に誰も動かなくなった。

「勝負ありね」

「ふう、一時はどうなることかと思ったよ」

「リンの戦略は無茶苦茶です」

「突破できたんだから良いでしょ」

そついうと、遠坂は家に向かって歩いていく。

「遠坂、何処に行くんだ？」

「蒼緋を運び出すのよ。ほら士郎、手伝いなさい。ライダーはそのまま、そいつらの動きを封じてて」

「分かりました」

俺と遠坂は蒼緋の部屋に向かうため、走りだそうとすると上空から何かが降ってきた。

瞬時に身構えて警戒する。

「!!」

「!!」

「此方はもう終わったようですね」

警戒を解き、降って来たそいつに話しかける。

「ビックリするだろセイバー」

「すいません。士郎達が心配で力を入れすぎたらここまで……」

「まあ、いいわ丁度人手が欲しかった所だし」

「どういうことですか？」

「蒼緋を運び出すんだよ」

「なるほど、なら私が運びましょう。士郎達は周辺を警戒して
ください」

「分かった」

「分かったわ」

セイバーは蒼緋の元へ行き、担いで出てくる。

「……あれ？何か出てくるの早くなかったか？」

こういう状況だし、セイバーの事だから蒼緋を力任せに起き上が
らせて、担いだんだろうな。

「ただいま」

不意に声が聞こえるほうを向くと、シグルドが門から入ってきた。

「すまん、遅くなった」

「そちらの方はどうでした？」

「ん？ああ、首を跳ね飛ばしてやったぜ。でも流石に女となると後
味がわりーな。」

「っていうか、お前宝具使うほど危なかったのか？」

「はい、流石魔法使いでしたね、宝具が無ければ勝つのは難しかっ
たでしょう」

・・・なにやらセイバーとシグルドは物騒な話をしているようだ。

「そういえば遠坂、逃げるってたって何処に逃げるんだ？」

「・・・・・・・・あ」

「まさか・・・・・・・・・・」

「考えて無かった、てへっ」

「てへっ、じゃねーだろー！ー！！」

どうするどうするどうする。

そうだ、ねこさんちに止めてもらえば・・・・・・・・って無理だよな。
なら柳洞寺に・・・・・・・・ってこれも駄目だな。

どうしよう、何も浮かばない。

「あーら、何逃げようとしてん、の？」

いきなり空中に現れた赤髪の女の人は、俺と遠坂を見て呆然として
いる。

「嘘でしょ？報告では子供は居ないって言ってたのに・・・・・・・・く
うう嵌められたあ、こうなりや謝らせて何か貰うまで何も任務なん
か受けないんだから」

赤髪の女の人は降りてきて、なにやらぶつぶつ言っている。
後ろから何かが落ちる音がした。

「そ、そんな、貴方は確か私の宝具で・・・・・・・・」

「あ、ああアレは危なかったわー、急いで転移したから変な所に出
ちゃって帰ってくるのに時間が掛かっちゃった」

「アレを避けるなんて・・・・・・・・」

「気にすんなセイバー、この状況じゃ俺たちの勝ちが決まってる」

英霊三人、でもライダーは魔眼で雑魚どもを足止め中。
そして此方はクラスセイバーが二人。

「………そうですね。でも油断は禁物です」
「分かってるって」

俺とセイバーは赤髪の女の方を向き、剣を構える。

「はぁ、結局戦うしかないのね」

呆れたように赤髪の女は言う。

「さっさと終わらせて協会の連中に一杯文句言わせて貰うんだから」
そついうと女が消える。

「ちつまた転移か」
「シグルド後ろです!!」
「ウラァ!!」

回転して後ろを斬りつける。

ボン!!

「ガッ!!」
「シグルド!!」

カラン

金属の落ちる音。

シグルドが剣を落としたのだ。

「セイバー、いや英雄シグルド相手に武器を落とさせる私って天才！？」

呆然と剣を握っていた手を見詰めるシグルド。

その手は、無残にも親指と薬指が変な方向に曲がっていた。その手を見ていたシグルドがいきなり笑い出す。

「クククククハハハハハハハハハハハ」

「え、なに？どうなってるの？もしかして私地雷踏んじやった？」

腰を屈め落ちた剣を拾い、立ち上がる。

立ち上がった後も体がふらふらして、異様な雰囲気をかもし出す。

「ちょっと、ちょっと。指折れ点のにまだ剣持の？」

シグルドが剣を握れたことに女をよそに、シグルドが士郎の方を向く。

「士郎、今すぐ包帯もってこい」

「あ、ああ。分かった」

「それと穰ちゃんは蒼緋を家の中に放り込んで、結界も忘れずにな」

「分かったわ」

シグルドが指示を出すと二人は素早く動く。そして直ぐに戻ってきた。

「シグルド、包帯もって来たぞ」

「助かった。今から包帯で剣を俺の手に固定させる、士郎手伝え」
「分かった」

そついい士郎はシグルドの手と剣を固定させる。

「そんなことさせないわよ」

魔力を球状にして放ってくる。

それを横から遠坂のガンダが当たるが、当たった瞬間消える。
だがシグルドを狙った魔力球は、逸れて地面にぶつかる。

「へえ、やるじゃない私の魔法を魔術で逸らすなんて」

「お褒め預かり光栄ですわ。ミスブルー、いや蒼崎青子」

「あら、私の名前知ってるの？」

「貴方の名前を知らない魔術師は居ないでしょう」

「私って有名ね」

遠坂が時間稼ぎに青子に話しかけている間に、シグルドの剣の固定が完了した。

「これでいいだろう」

「よし、助かった士郎」

「ん？あ、やば」

シグルドの剣の固定に少し動揺する青子。

「士郎お前と遠坂は俺とセイバーの援護だ」

三人は俺と目を合わせて頷く。
そしてもう一人に指示を出す。

「ライダー、そいつら気絶させてこっちに加勢しろ」
「分かりました」

ライダーは魔眼を開放したまま、刺客たちを気絶させていく。

「こりゃ、私一人じゃちよつちきついかなく。ってうわっ!!」

シグルドとセイバーが相手が油断している好きに、切りかかる。
その後に後ろからガンドと弓の嵐。

「本気ちよつち危ないわね。ならこれで!!——っ!!」

「はっ、さっきの何とかブレイクはさせんぞ!!」

「ちよつと4対1は卑怯よ」

「そちらは最初二百名ほど居たでしょう」

「ぐっ何も言えないわね」

セイバーのツツコミに負ける青子。

だが、それでも隙を見せない。

「こりゃ間合いを離すしかないわね」

青子が転移する瞬間、体が何かに削られて転移が中断される。

「ナイスだ士郎」

青子が転移する瞬間、士郎がカラボルグ?を投影して放ち、空間を捻じ曲げ転移の障害と傷を負わせたのだ。

それを見計らってシグルドが切りかかる。

「ちょ、それやばいって」

青子があわてて動こうとするが間に合わない。

ヒュヒュ、ドスッ。

「——っ！？こいつは!!」

俺とセイバーの両足の甲に剣が刺さっている。
その剣は、柄まで突き刺さり動けない。

「セイバー、こいつを抜いてく……ガハアッ!!」
「シグルド!!」

腹を大きな杭が突き刺さったような感覚がした瞬間、何かに押されて塀にぶつかる。

「グッソがああ、てめえは確かに首を……グアッ!!」

言葉を遮るように俺の手足に剣が刺さる。

「貴方の言うとおり、私は確かに首を切り落とされましたがごらんの通り。生きていますよ」

「首切り落とされて死なないなんてバケモンかよてめえ」

「まあ化け物と言われても仕方ありませんからね」

「ガハッゲホッゲホッゴフウ。ヒュー、ヒュー」

「もう、虫の息ですね。でも大丈夫、貴方達サーヴァントは生かし

ておかないと、もし殺したりしたら上の連中からかなりの罵倒が来ますからね」

女は、持っていた巨大な武器を、シグルドの腹に刺したまま、呪文を唱え始める。

「一応、生命維持結界を張ったので大丈夫でしょう。」

シグルドを円形の結界が覆う。

「もう、死んじゃってたかと思ってたわよ?」

「私が死なないと知っていて言っているのですか?」

「ははは、気にしない気にしない。ってそれより私の傷治してくれない?」

「そんなことしている暇はありません。——!!!ミスブル

ー前!!!」

「えっ!?!」

二人が話している間にセイバーが足に刺さった剣を抜いて、青子に切りかかっていた。

「戦いの中で余所見をしてはいけませんよ」

「ちょ、やば!?!」

ヒュッ、キンッ

「クッ」

「ナイス、シエルう」

余所見をしていた青子にセイバーが切りかかろうとしたが、投げら

れた黒鍵に止められた。

「セイバー！」

刺客達の全員を、気絶させて戻ってきたライダーが加勢する。

「シエル、あんた髪の毛の長いほうよろしくね、私はセイバー倒すから」
「分かりました」

青子対セイバー、シエル対ライダー。

「なら、私はライダーを手伝うわ。士郎はセイバーを」
「ああ、分かった」

二人ずつに分かれた後、各々は敵を見つめる
これから戦いの第二幕が始まる。

第二十八話（前書き）

2ヶ月サボってすみません

2時間掛けて書いた即席ですが見てってください

第二十八話

「さあーて、ちゃっちゃと終わらせて上の連中に文句良いに行かないと」

そう言いながら青子がストレッチをする。

「シロウは後方で援護をお願いします」

「えっ！？二人で戦ったほうがよくないか？」

「シロウは見ていたと思いますが、彼女は魔法使いですが近接攻撃も中々です。私も数回ほど攻撃を当てられました」

おいおいセイバーと近接戦闘やって攻撃を数回当てた？

セイバーは剣のサーヴァントなんだぞ、そんなのに俺が向かっていたら………。

よし、考えるのはやめよう。

「分かった、セイバーがそういうなら俺は後ろで援護しておくよ」

「それではシロウ、あちらも準備が出来たようなので警戒をしておいてください」

「了解」

青子是不敵な笑みを浮かべながらこちらを見ている。

「作戦会議は終わったようね。なら、始めましょうか」

青子の魔力がどんどん膨れ上がり、自身の魔力に包まれていく。

「おいおい、まだ本気を出して無かったのか？」

そうだとしたらまずい、非常にまずい。

こうなったら、攻撃をさせる暇を与えずに戦うしかない。

「セイバー!!」

「はい!!」

どうやらセイバーも同じ答えにたどり着いたようだ。

でもセイバー大丈夫かな、結構ダメージ食らってたけど。

いや、それは相手も同じだ、カラドボルクが掠ったんだ、それなりにダメージは与えているはず。

それにセイバーは自動回復が出来るんだ、あれぐらいのダメージなら直ぐに完治するはず。

でも、あの人凄いなあの人、セイバーの剣をかわしてるよ、本当に魔法使いか？

「はあああああ!!」

「——!!」

セイバーの裂帛の気合で我を取り戻す。

そうだセイバーは一人で戦っているわけじゃない、俺も居るんだ出来る限り援護を・・・

俺が弓を投影した瞬間、いつの間にか放たれていた魔力の波動が襲ってきた。

「シロウ!!」

「ち、ちくしょ、う……………」

この一撃で俺の意識は途絶えた。

「き、貴様あー!!」
「おわつとお」

よくもシロウを、私は彼の盾となり剣であるのに……………。

「よくもシロウを!!」

残りの魔力など知らない。
ありったけの魔力を魔力放出にまわす。

「えっ!? ちょ、さつきより早っ」

大上段からの一撃。

これもかわされた。
だが多少だが手応えがあった。

「くう、つつつ。転移が間に合わなかったら体が縦に真つ二つになるところだったわ」

彼女の腕には切傷がついていた。
咄嗟に魔力を腕に纏わせて、防御したのだろう。

「確実に仕留めたと思ったのですが、流石ですねメイガス」
「それほどでも。それと一つ言っておくけど私は“子供を殺した”
ことは無いわよ」
「——なっ!!」

ということとは……………!!。
急いでシロウの元へ向かう。
意識は無い、そして今は虫の息だ。

良かったこれならまだ間に合う。
シロウがまだ無事と知って、胸を撫で下ろす。

「言っただしょう？私は子供を殺したことは無いって」

「貴方は、良い人なのですね。ですが貴方達はシロウの秘密の一端を知ってしまった、ですから」

「私を殺すってゆー訳ね」

「出来ればそうしたくはありませんが、それしか方法が無いのならそうするしかないでしょう」

セイバーはきつぱりと言い切り、剣を構える。
それと同時に青子も構える。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

二人の間に一枚の木の葉が舞い落ちる。

それを合図に二人とも同時に動く。

セイバーは前へ、青子は後ろへ。

青子は後ろに交代しながら、魔力球を設置、放つなどをして弾幕を張る。

セイバーは弾幕を掻い潜りながら前へ進み、青子の目の前に到達する。

青子がセイバーの間合いに入ってからセイバーの剣が乱舞する。

それをギリギリかわして青子は間合いを開ける。

「ちょっと、何かさつきより早くない!？」

「私は貴方を人間と思って手加減してきましたが、貴方は強い、そしてその強さは人の域を超えている、だから私は貴方を英霊と戦う時同様の力で戦わせてもらいます。そしてもう一つ貴方の攻撃、も

う見切りました」

「私と同じみたいに本気をださなかったって訳？でも貴方宝具使ったじゃない」

「私が本気で宝具を使つては人払いの結界を切り裂いてしまいますからね、手を抜いておきました」

「なっ・・・・・・・・・・・・・・・・」

青子は愕然とし、口が開きっぱなしになっている。

そして膝を落とし、地面に手をつくが、溜息を吐きながら直ぐに立ち上がった。

「手を抜いていたのは私もなんだし、まだ奥の手もあるし諦めないわよ」

そう言つて、魔力球を撃ちまくる。

「くらえ〜〜〜〜〜〜！！」

だがそんな攻撃も、青子の攻撃を見切っているセイバーの前では無意味だった。

セイバーは放たれた魔力球を軽々と避けて青子の前に躍り出る。

「ちょ・・・・・・・・・・」

「終わりです」

セイバーの剣が横に一閃される。

青子の腹部に赤い線が刻まれ、後ろに倒れそうになり踏みとどまっただが無理で膝をつく。

「最後の一撃、よくそれだけの傷ですみましたね。貴方のような方

を失うのは惜しいですが、これもシロウのため、これで終わりです」

セイバーの剣が振り下ろされた瞬間、青子の口元が綻び、セイバーを球体が包む。

「……………っ！？これは！？」

「ようやく、隙を見せたわね」

青子の右腕を中心に魔方阵がいくつも取り巻いている。

「これはもう、A判定以上の攻撃力を持つ私の奥の手よ」

「なら、振り切るまで！！……………！！！」

か、体が、動かない？

何度体を動かそうとしても動かない。

「その中に入ったが最後、もう出られないわよ」

「くっ」

「これで終わりよ」

青子の右腕がセイバーに向けられた瞬間、無数の魔力球がセイバーを襲う。

ドドドドドドドドドドドドドドドドドド

セイバーの居た所にはすさまじい砂埃が舞う。

そして風が吹き、砂埃を掻き消すと底には、服の至る所が破れ、鎧には罅が入っている。

ドサッ

セイバーは声も無く倒れた。

「ふう、危なかったわね。後5ミリ深く切られてたら内臓が出てきてたでしょうね。でも、これで任務完了ね。あゝ痛いし疲れた、少し寝るかな……えっ？」

青子が寝転がろうとした瞬間、顔の横を何かが通り過ぎた。急いで、攻撃を放たれたほうを見る。

「うそ、何でそんなに早く気がつくのよ。それに……………」

さっき見た時に出来ていた傷が塞がっている！？

「……………」

呆然とシロウを眺めている青子に士郎が、突進する。

「ちよ、この体でかわしきれないわよ」

青子が移動して避けようと目を離れた瞬間、視界の端に白い何か映る。

「え——？」

青子が士郎の方に視線を戻すと、そこにはいつの間にか双振りの白と黒の双剣が握られていた。

士郎は青子に近づき、縦横無尽に剣を振るう。

その振るわれた剣を青子は、魔力を纏わせた腕を前に出して防ぐ。

「くううう~~~~~」

だがそれも長くは続か無かった

ザシュッ

「あ」

ボトッ

青子の左腕が肩から離れ、肩口から血があふれ出る。

「ちょっと、洒落になんないわよ」

腕を切り落とされ、動揺している青子に士郎がまたも襲い掛かる。

「・・・・・・・・・・」

「まずっ!!」

私は色んな修羅場を潜って来たんだ、これぐらいのピンチは経験済み、落ち着け私!!

士郎が振るう剣をギリギリまで見て、紙一重にかわす。

「ふう、ふう、ふう」

やれば、できるじゃない私。

そしてまた青子を剣が襲うが、避ける。

「・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・ん？」

この子、意識が無い？

格闘技で試合中意識が飛んで、意識が戻るまで強くなるってあるわよね、もしかしてその状態に入っただの？

なら・・・・・・・・・・

「起こすまでよー!!」

士郎が繰り出してきた攻撃を掻い潜り、懐に入る。

そこから右腕で腹にアッパーを食らわせて打ち上げ、右足を士郎に向ける。

「ちよつと痛い目覚ましだけど起こらないでね」

そういうと足から出た魔力の波動が士郎を飲み込む。

そして、遠くまで吹き飛ばされる。

「ぐ、ぐう、お、俺は一体・・・・・・・・つうつ!？」

「ちよつと眠っててもらっわよ」

「えっ!？」

青子がズボンの後ろポケットから紙を取り出し、士郎の額に貼り付ける。

「あ、れ。眠く、なつて、来た」

そうして士郎の意識は途絶える。

「はぁ〜これで終わりつと。でも流石にやばいわね、確か魔法薬をトランクに入れてたはず」

切り落とされた腕を拾い、ふらふらとおぼつかない足取りでトランクを取りに行く。

鞆は瓦礫の下に埋もれていたが、魔法でトランクを壊さない程度に瓦礫を破壊していく。

そしてトランクを開けて、青色の液体が入った薬ビンを一つ取り出す。

「これ苦いから嫌なのよねゝ．．．なんて言ってる状況じゃないし、仕方がないか」

それを飲み干すと傷を負った場所から煙が立つ。

「おおゝホントに効いてるじゃん」

結構前に試作品のこれを渡されて、試しに一口飲んで苦かったから、ずっとトランクの中に入れっぱなしだったのよねゝ。

「よし傷も大分治ってきたし。“封印”しに行かなきゃ」

青子はトランクから魔方陣やら幾何学模様の描かれた三つの小瓶と銀のネックレス三つを取り出して、セイバーの元へ行く。

そこには仰向けに倒れたセイバーがいた。

「．．．．．さっきは本気でやっちゃったけど、生きてるわよね？」

口元に耳を近づける。

ハア、ハア

もう、虫の息だ。

「でもショックだな、アレを喰らって生きているなんて」

ハアと溜息をつく、すると。

「うつ……………」

「——！！やばっ早く封印しないと」

セイバーの首にネックレスを掛け、瓶の蓋を開けて、呪文を唱える。

「—————。よし、封印」

セイバーの体が歪み、瓶に吸い込まれていく。
そして素早く蓋を閉める

「よし次々」

次はシグルドの元へ行く。

「……………ホントこれ生きてるのかしら？」

セイバーの時と同じように口に耳を近づける。

ハア、ハア

此方も虫の息

「それじゃ、始めますか」

先ずは先ほどのようにネックレスを首に掛ける、そして腹に突き刺さったままのシエルの武器、第七聖典を抜く。

「さて、と。封印封印」

瓶の蓋を開けて呪文を唱える。

「――。封印」

シグルドの姿が歪みセイバー同様、瓶の中に吸い込まれる。

「これで後一体ね。シエルの奴大丈夫かしら、市街地の方まで行っちゃったけど」

まっ、今行ったって、傷が完全に治ってないから邪魔になるだろうし………

「ここで待つてよう。きついし。それに私は他の仕事も請けてるからね、この家を散策しなきゃ」

第二十九話

「ハア、ハア、ハア！ー！たくもつ、何であんなスピードで遠くまで行くのよ。追いかけるのも一苦労じゃない！ー」

悪態をつきながらライダー達が消えて行った方へ駆ける。

ここは最初に彼と私が戦い敗れた場所、そして人払いの結界の端だ。
ここにあるのは雑草と枯れ木とベンチだけ、相手が英霊なのだから出来るだけ障害物の多い所でないと正直きつい。

「ふう、このぐらい遠ければリンも追いつくのに時間が掛かるでしょう」

「やさしいんですね」

「ええ、仲間ですから」

ライダーはそういうと、短剣を勢いよく投げる。
シエルはそれをかわして黒鍵を投げる。

「……………どうしようか、第七聖典は向こうに置きっぱなしで、法衣もないから黒鍵の数が心もとない。」

あそこで移動せずに、気絶された者達の没収された武器を使いながら戦えば勝算はあるのですが……………さて、本当にどう戦いましょうか？

ヒュン

思案していると、いきなり鎖のついた短剣が飛んできた。

それをギリギリでかわす。

「考える暇も与えてくれませんか……」
「……………」

ライダーは無言で短剣を投げて牽制してくる。
短剣は縦横無尽に襲い掛かってくる。

「くっ!!」

襲い掛かってくる短剣を黒鍵で弾いては、また襲い掛かり弾く、ライダーとシエルは延々とそれを繰り返す。

まずいですね、このままだと決着がつきませんね。

こうなったら捨て身の覚悟で突っ込んで行きましょうか？。
うん、そのほうが良いみたいです。

シエルは決心し、短剣を弾いた瞬間、身体強化してライダーに特攻を仕掛ける。

ライダーはそれを迎撃するために短剣を投げるがシエルはそれを紙一重でかわす。

よし、もう少しで懐に入り込める!!

「甘いですね」

ライダーが小声で呟く。

シエルは何か呪文を唱えたのかと警戒する。
だがその予想は裏切られ、シエルの背中に衝撃が走る。

「ぐっ………!!」

余りの衝撃の強さに、吹き飛ばされる。

だが、吹き飛ばされた先にはライダーが待っている。

これは、危ないですね。

シエルはそう思った瞬間、今度は腹部に衝撃が走り肋骨が何本か折れ、吹き飛ばされて走ってきた距離を元に戻される。

シエルが顔を上げると、自分が居たであろう場所には背もたれに短剣が貫いたであろう穴の開いているベンチがある。

「まさか、最初の短剣は罠だった？」

「いえ、別に罠に使った訳ではありませんよ」

いつの間にかライダーが目の前まで来たいた。

「私は貴方に攻撃している時、予め貴方の後方に障害物がある状況を作り、貴方が特攻してくる時を狙い短剣を投げる。そして、短剣が当たった場合はそれで良いですが、避けられたらその後方の障害物に短剣が刺さり、私の力でそれを思い切り引っ張ってその障害物を相手に当てる、こういうことですよ」

「二段構えの攻撃ですか、流石英霊、化け物ですね」

「それを言うなら貴方もそうでしょう」

「え？」

まさか、もう肋骨の骨折が治ったのに気付いて……………。

体の至る所に冷や汗をかく。

「貴方のその英霊並みの魔力、人間にはそうはいないでしょう」
「そ、そうですね」

良かった、まだばれてはいませんね。

「まあ、貴方を生かしておくと後で厄介な事になるでしょう、これで最後です、何か言う事はありませんか？」

「特にありませんね。まあお願いがあるといえはあるのですが・・・」

「何でしょう？」

「出来れば苦しませずに一気に心臓を貫いてください」

「潔いですね。良いでしょう、その願いを通り心臓を一気に貫きましょう」

死んで直ぐに傷を治癒し、彼同様背後からの奇襲で、身動きを取れなくし、ミス・ブルーに封印してもらう。

これで、良いでしょう。

「では、いきます」

ライダーの声が聞こえた瞬間、二回目の死が彼女に与えられる。

「これで、終わりましたか。此方まできているでしょうリンを回収して屋敷に戻りますか」

ライダーはそう行って、衛宮邸に帰った。

そう、自分がシグルドと同じことが起こるのを知らずに。

第三十話

シエルとの戦いが終わった後、途中まで来ていた遠坂を回収して衛宮邸に戻ると、そこには蒼崎青子が土蔵の方へ向かっていた。

「確かあそこにはイリヤスフィールが！」

「やばい、早く何とかしないと!!」

そう言つて遠坂はすぐにガンドを連射する。

「待ちなさい!!」

「……………っえ？」

青子は突然の奇襲に驚き呆然としていた。

「わっ、ととととと」

が、正気を取り戻しガンドを紙一重でかわした。

「危ないわね〜当たったらどうすんのよ？」

「どうもしないわ。でも貴方に一発でも食らわせられたら遠坂の名に箔がつくわ。魔法使いに攻撃を当てた一族としてね」

「うつわ〜。あんた腹黒いわね〜」

「お褒め頂きありがとうございます」

「……………あ」

会話の途中で青子が無かに気付く。

「あんたらシエル倒したの？」

「ええ、私はその場にいなかったけど、ライダーが殺したと言っていたわ」

「ふうん。でも何で貴方達、そいつら殺してないの？」

青子が庭の端に戦いの余波で山積みになっている人達に指を差す。
遠坂は気付く、戦いが始まる前に自分が言った事を

「……………あ」

「あゝらま。貴方達が殺したのは教会の“埋葬機関第七位”『己』のシエルよ？殺しちゃったら色々とまずいんじゃない？」

「ぐっ……………」

青子がニタニタと笑みを浮かべながら遠坂に言い迫る。

遠坂は諦めたように肩を落とすと、一気に顔を上げて言い放った。

「その時はその時よ！！こっちには英霊が三人も居るんだから負けないわよ！！」

大きな声での一声が辺りに響き渡る。

この発言に驚いたのか、青子は少し呆けた後笑い始めた。

「く、くくく、あっはっはっは、あー面白い子ね。でもその英霊達は今何人かしら？」

「——え」

周りを見渡してもセイバーとシグルドの姿は見えず、立っている者は私とライダー、蒼崎青子しか居ない。

それを踏まえて出た結論が『セイバー達が英霊の座に戻った』これはつまり死んだということ、だが遠坂は大事なものを見落としていたことに気付く。

「ミス・ブルー私のセイバーを何処に？」

「あらあら、やっぱり気付いちやった？確かにセイバー達は死んでないわよ」

「ですから先ほども言ったとおりセイバーは何処に？」

遠坂の発言で苛立っていることに気付いたのか、青子の顔がにやける。

「うゝん教えてやりたいのは山々なんだけど、これ、仕事だから教えれないのよね。教えて欲しいのなら……」

「力づくで戦い、私達が勝って聞き出すしかない、と？」

「そういうこと」

相手はふざけているが魔法使い、そして分かっていることはセイバーが負けるほど強いと言うこと。

今の私達じゃ高確率で負ける。ふん、上等じゃない。何もしないよりはマシよ。

「ライダー」

「はい」

「あの女を倒してセイバー達を救うわよ」

「分かりました。あのセイバーでも勝てなかった相手に出し惜しみは不要ですね、最初から全力で行かせてもらいます」

そついうとライダーは眼帯を外し、隠されていた魔眼をあらわにする。

青子はライダーの目が魔眼だと気づき、目を合わせないように腕で自分の目を隠して自身の被害を最小限へ食い止めた。

それでもライダーの魔眼は強力すぎて視界に入ったものは目を合わ

せなくても動けなくさる。

「っ！？ちよつとちよつと何で体が動かないのよ」

「流石のミス・ブルーでもこればかりはどうしようもないでしょう。この『ゴーゴンの目』は」

「——ご、ゴーゴンの目ですって！？って言うことはあの石化の魔眼よね？」

あのミス・ブルーが焦っている。これは、勝てるかも！！

「でもこれぐらい……うりゃあああああ！！」

だが、遠坂のそんな気持ちを踏みにじるかのように青子が声を出しながら持ち前の巨大な魔力を体中に行き渡らせている。

青子の体の周りには魔力の蒼い渦が起こっていた。体に魔力が行き渡り青子が足を動かし始めた。

「よし、これで少しは動けるようになったわね」

「うっ、嘘でしょ！！」

「彼女は本当に人間なのですか？」

流石のライダーも驚いている。

まあ、自慢の宝具が余り効果が無いのならそうなるわよね。

でもまだ勝機はある、ミス・ブルーはライダーの魔眼のおかげで先ほどよりも動きが遅い。

「ライダー、さっさと倒してセイバー達を助けるわよ！！」

はい、とライダーが返事をする、愛馬のペガサスを召還する。

「ペ、ペガサスう！？幻想種がなんでこんな所に居るのよ！？」

驚きを隠せない青子は口を鯉のようにパクパクと開いたり閉じたりしている。

それも無理はない、なんせペガサスは幻想種だ、まず出会ったこと、いや見ることすら出来たら奇跡なのだから。

「さあ行きましょうか」

ライダーが宝具の手綱を具現させ、ペガサスに装着する。

青子は本能的に危険と判断し、急速に右腕に魔力を集める。

「ベルレフォーン（英雄の手綱）”！！”」

まともに動けない青子をライダーが襲う。

ベルレフォーンが青子にぶつかりと爆発が起きた。

「よし、これで！！」

「いや、まだのようです」

「え、どういう・・・」

「ゲッホゲッホ、あゝ今のホントに危ないわね」

爆発地点から少し離れた所から声が聞こえた。

その声の主は今宝具を喰らっていたはず。

なのに何故・・・。。。

「流石サーヴァント、命令は忘れないのね」

命令・・・そうか、ブルーを倒してセイバー達を助けるための情報を得るために戦っている。

ということはベルレフォーンが避けられたのはそのせいだということ。

「ベルレフォーンだっけ？アレが当たる瞬間に減速してくれたおかげで助かったわ」

「当たる瞬間に先ほど集めていた魔力を地面に放ち、その爆風で回避する。流石ですね」

「お褒めいただきどうもありがとうございます」

と、褒められて少し照れながら青子が笑っていると、表情が変わる。まあ、変わると言っても少しだけ、ただこちらを見て（ライダーには目を合わせないで）怪しい笑みを向けてにやけている。

「どうやら“私達”の勝ちのようね」

「“私、達”??」

まさか、伏兵でも居るってワケ!?

周りを見渡しても気配も魔力も微塵も感じない、感じるのは目の前に居る青子の強大な魔力だけ。

「リン、危ない!!」

「——え？」

訳も分からずライダーに突き飛ばされる。

思案していたら、いつの間にか青子が遠坂目掛けて放った魔力弾を身代わりとなって受けていた。

魔力弾を受けたライダーは先ほどまでシグルドが居た場所まで吹き飛ばされていた。

「戦ってる最中に余裕ぶっこいて考え事をするなんて危ないからやめたほうがいいわよ」

「くっ……」

「さて、これでテックメイトよ」

青子の右手に魔力が収束していく。

まずい、この戦況、もう勝つのは無理、詰んじやったわね。

どうしようかしら。降参して時計塔に連行されて冬木のセカンドオーナーの解任……。いや、もしかしたら殺されるかも。あゝそれだけはやだな、まだ十七年しか生きていないのに。はぁあこれで終わりか……。ん？

諦めかけていたら、かすかに声が聞こえた。

「リ……。ン」

聞こえてきたのはライダーの声だ、あの魔力弾をくらい立ち上がったのだ。

そして、声を振り絞り一言……

「に……。げて……。ください。時間は……。私が稼ぎ……。ま……。すから」

もうボロボロの癖になに言ってるのよアンタ、そんなことしたら格好悪いじゃない。

「バカ言わないで、逃げれたらもうとつくの昔に逃げてるわよ」

「……。そ。うですね。でも・危な……。くなったらすぐに逃げ……。てください」

そう言って立ち上がろうとしたライダーは、余りにも魔力弾が効いたのか、そのまま倒れて気絶する。

腹を括るわよ、こうなったらとことんやってやるっじゃない。

彼女は覚悟を決め、ポケットに入れていた宝石を握りしめる。

魔術刻印に魔力を流し起動させる、回転数はもちろん最高まで上げる。

短期決戦を仕掛けるつもりだろう。

なんなのこの子いきなり目の色が変わった!?

「――、アンファング Anfang」

「面白い、受けて立つわ」

両者どちらとも動かない、相手の出方を窺っているのだ。

「――っふ――っは」

呼吸のリズムが狂う。

相手は魔法使い、相手と目を合わせるだけで汗が吹き出てくる。

汗が顔を伝い、地面に落ちると、両者が動き出した。

「Ein Körper ist ein Körper（灰は灰に塵は塵に）!!」

「なんの」

遠坂の宝石魔術を、魔力弾で相殺しようとするが、遠坂が使ったのはトパーズ、広範囲で威力の高い物で完璧に相殺することが出来な

かった。

相殺できなかった魔力は砂を巻き上げ、煙幕となる。

相殺しきれないのは計算済み、だから隙が出来た今がチャンス！！

ポケットに入れていた宝石を全て使い、身体強化の魔術を行使する。物が物だけに、キャスター戦に使ったとおきの宝石よりは劣るが、遠坂は相乗の魔術を使い効果を倍増させているのだとおきほどの時間を得ることも出来るだろう

「こんな砂煙なんて、えいや！」

青子が地面に魔力弾を放ちその爆風で砂の煙幕を掻き消す。だが、遠坂はそれも予想済みで一気に青子の懷に飛び込む。

「ま、まず！！」

遠坂はキャスター戦に使った中国拳法の連携技をお見舞いする。

まずは胸に寸頸、胸に衝撃を与え心臓を数瞬だけ止める（簡単に説明するならボクシングのハートブレイクショットの寸頸版）。

身動きが出来ない青子に一気にたたみかける。

旋脚での足払いから、そのまま立ち上がり回転の勢い利用しての肘それからフィニッシュの

正拳突きを放つ。

見事な連携技をくらった青子は吹き飛ばされる。

決まった！！これで立ち上がったらもう戦えないわよ。

そう、彼女の体は相乗の魔術を自身の体に施したせいで体にガタが

きている。

体のあちこちが肉離れ一步手前、そして強化を掛けた足・腕・背中が特にひどく、肉離れと一緒に筋肉もズタズタになっているのだ、立っているのも限界だろう。

だが遠坂凜は倒れない、倒れるのは自身の脅威が去ってからなのだから。

彼女は先ほどまで自分と死闘を繰り広げていた魔法使い、蒼崎青子を見つめる。

青子には一切動く様子がない。

まさか……勝ったの？あの、世界に五人しか居ない魔法使いの一角を！？

勝った事により安心感を得て緊張の糸が切れたのか、立つことを維持できなくなりヘタリ、と地面に尻をつき、そして倒れ意識が朦朧となる。

「なんですか、そのザマは？演技も対外にしてください」

「———？」

気を失いかけた所で誰かの声が聞こえた。

この声の主がさっき言っていた“私達”という言葉を裏付ける人物というわけね。

でも残念、もうこの体じゃ動くことすら出来ないわ。

突如現れた女の声に何事も無かったかのように返事を返す青子。

「やっぱバレてた？もうシエルったら、その子が気を失うまで待つてっああげるって優しい心遣いは無いの？」

「無いですね。早くこの任務を終わらせて“元の任務”に戻りたいですから。彼女は私自ら気絶させておいて上げましょう」

シエルは遠坂に近づき、膝をついて魔術の詠唱を行う。

遠坂は驚愕する、何故かと言うと彼女、シエルはライダーが殺したはずなのだから。

「あなたは……ライダーが殺したはずじゃ」

「残念ですが、私は死なないですよ。いや死ねないと言った方が良いですね」

「なん……ですって？」

「まだ寝ないとは、流石の抗魔力ですね。ではもう少し強めに掛けましょうか。……では、おやすみなさい」

「……あ」

声を出そうとしたが視界がどんどん暗くなり、意識が途絶えた。

「さて、ではさっさと封印して帰りましょうか」

「うゝん……ちよつと無理みたい」

「もしかして……」

あの少女の中国拳法の連携をくらって立てなくなっている！？

「多分アンタの考えてる通りよ」

「まさか貴方がここまでやられるとは……」

「実際、あの子と戦う前から体力とか切れ掛かってたし、ライダーの魔眼の効果でまともに動くことも出来ない状況だったからね。でも、本当に効いたわ、多分肋骨にひび入ってるわね、しかもフィニッシュは顔面に正拳突き……かなり脳が揺さぶられたわ」

「でも、被害が肋骨の罅だけで済んでよかったじゃないですか、あ

んな綺麗な連携技くらって無事な人は居ませんよ」

シエルが同情すると青子は真剣な顔になる。

「だからシエル」

「まあ、言うことは何となく分かりますが何でしょう?」

「私の変わりに封印やつといて」

「ふうー。分かりました。私が変わりにやっておきますから体を休めていてください」

青子から瓶とネックレスを受け取り、ライダーの元へ向かう。

ふむ、ギリギリ生きていると言う所ですね。

ライダーの頭を抱え上げネックレスを掛け、小瓶の蓋を開けて呪文を詠唱する。

詠唱が終わると、ライダーは瓶に吸い込まれるように消えていった。

「これで任務は完了。では私はこれで」

瓶を此方に投げ渡して立ち去ろうとしてたシエルを呼び止める。

「待つてよシエル、あんた回復魔術使えたでしょ?あたしの体を治してよ。そして出来れば腕もくつつけてね」

「……………はあ、分かりました」

渋々青子の傷を治すシエルだった。

それから数時間後。

シエルは十分前に私の腕を繋げて、すぐにどっか行った。
多分、前受けてた任務に戻ったんだろうけど。

「シエルのおかげで傷は癒え、そして腕もつながって体も自由に動くことが出来る。よし、そろそろ別の任務に移りますか」

別の任務とは、とある少女をとある由緒正しき魔術師の家に届けること。

「やっぱり、この土蔵が怪しいわよね」

この何重にも掛けられた異常なまでに強固な結界。

「何か核爆弾でも防ぎそうな結界ね。どれぐらい硬いかいっちょ試しますか」

土蔵から少し距離を置く。

そして魔力を両腕に集中し、魔法を行使する。

「スヴィア・ブレイク!!」

青子の放った魔法は結界に当たるが傷一つ付いていなかった。

「それでも結構強めにいったんだけどね。でも、こう何の変化もないと気が萎えて来るわね」

こりゃあもう、本気でいくしかないかな。さっきの戦闘で魔力を四割使って、今のスヴィア・ブレイクで一割、残りの五割で、いや、四割でいいか。

蒼崎青子にとって魔力の四割とは、普通の魔術師数十人もの魔力量なのだ、もしかしたら宝具にも匹敵する威力かもしれない。これを受けて壊れない結界はないだろう。

「よっし！！それじゃやりますかね」

右手に自身の魔力の四割を集める。

だが、一箇所にそれほどの魔力を集めるのは至難の技。こつという技術面では彼女の才能は乏しく、集中した魔力は右手から溢れ出しかけている。

「ぬ、おおおおおおおお。気合だーーーーー！！！」

青の魔法使い・蒼崎青子には技術がない、その技術をカバーするのはいつも気合と根性。

もつと簡単に言うならば力任せである。

あふれ出しかけていた魔力は徐々に圧縮されていき、圧縮された魔力の球体が拳を覆う。

「それじゃ、いくわよ！！！」

だつ、と駆け出し、土蔵を覆う結界に膨大な魔力を帯びた拳を殴りつけた。

バキィィィィィィン

ガラスが割れるような音が響き、土蔵を覆っていた結界が破られる。

「やあ」開帳よ」

土蔵の扉を開けると、光と冷気が青子を迎えた。
床には輝く魔方陣。

その真上には巨大な氷が浮いている。
氷の中では白い髪の少女が眠っている。

ターゲットは発見出来たけど……これは眠ってる？
いや眠ってるんじゃないかもしれないけど仮死状態にしているのかしら。

「この氷は壊せるかなって」

魔力弾を放って見るが、傷一つついていない。

「これも結構力使わないと壊せないか……っあー！」

もし、この氷を壊したら中にいる女の子も無事じゃすまないんじゃないか……

そんなことを考えていると冷や汗が出てきた。

「壊せなくて良かったー。後始末は回復した魔術教会と聖堂協会の人達がするし、さっさとこの子を依頼主の元に送り届けますか」

青子は宙に浮かぶ氷に触れて依頼主の居城の部屋まで転移をする。

「すいませーん」

「——っ！ふう、驚かすでないミスブルー」

依頼主は突然現れた青子に驚くが、その背後の氷の中で眠っている少女に気付くと、すぐさま正気を取り戻した。

「……依頼を達成したのだな」

「もちろん、さあ受け取ってくださいな」

元々在った場所から移動したのに浮き続けている不思議な氷を依頼主の方まで引いていく。

「これは凄いな、流石のミス・ブルーでもこの魔術を解けなかったのか？」

「いや、解ける（壊せる）と思いますけど、中に居る少女を傷つけそうで怖いんですよ」

「それもそうだな。では早速この魔術を解除させる作業にかかるか。報酬は時計塔に発送しておいた、数日後に届くだろう」

「分かりました。ではこれで失礼します」

今度は城からとある教会の一室に転移する。

「君か、頼んだものを持ってきてくれたのかな？」

突如女性から声を掛けられる。

もちろん声を掛けてきたのはこの部屋の主だ。

女性は今机の上に積み上げられている書類の山と格闘している。

というより、この部屋には至る所に本の山と書類の山が出来ている。

「もちろん！！英霊を一体ご注文通り持ってきました」

ポケットに手を入れて小瓶を取り出し、女性の机に置く。

女性は、それを受け取ると小瓶をじっと観察する。

納得のいくものだったのか、頷いて此方を向く。

「どうでした？」

「文句のつけようが無いな、依頼の完了だご苦労。で報酬はどうする？」

「うゝん今は特に無いんですけどね」

「・・・そうだ、君が困ったことがあつたら迷わずここに来なさい、出来るだけ力になろう」

「あー、じゃあそれでいいです。どんな厄介ごと持ってきてても文句言わないでくださいよ？」

「ああ、分かつてる」

「では私はこれで」

「ああ、また頼むよ」

最後の転移場所は時計塔。

だが彼女は時計塔の中ではなく外に転移する。

「さあーで、上の連中を少し困らせますか」

第三十一話（前書き）

何か最近適當になつてきたな（；、ρ、）グツタリ
少し気分轉換に・・・・・・寝るか（^o^）ノくおやすみー

第三十一話

「さあーて、上の連中を少し困らせますか」

本当は少しじゃなくてかなり困らせたいんだけどね。

暴れるにしても私の魔力はもう一割しかないし、それにバルトメロイ・ローレイが来たらおしまいだしね。
どうしようかしら・・・。。。

「う~~~~ん」

ここ、魔術教会総本部『時計塔』は工房が地下にずっと伸びていて何処まであるか分からない位地下に伸びている。
講義は地下じゃなく地上でするし・・・。。。

「あ~~~~~っ!!もう考えるのメンド~~~~~!!」

目の前にある大英博物館に今までの恨みを晴らすために魔力弾を放つ（もちろん少しは手加減している）

「うりやりやりやりやり~~~~~!!」

もう魔術の秘匿とか無視!!上の連中が悪いんだから知らないわよ!!

魔力弾を連射し、柱などをどんどんぶっ壊していく。

青子が魔力弾を大英博物館、いや倫敦の一部を破壊させた時点で巨大な人払いの結界が発動していた。

だがそんな事を無視して撃つ、撃って撃ちまくっていた。

「うりやりやりやりやりやーーーーー……あれ？」

一時に感情に流され、倫敦の正面部分を派手にぶっ壊して気分が晴れたのか。

青子は正気を取り戻していた。

「は、はははー！。ここまでするつもりは無かったんだけどね」
「」

青子はちよつとやりすぎたと思いながら踵を返しすぐにこの場から逃げる。

「随分派手に壊してくれましたね。ミス・ブルー」
「——っ！！」

逃げようとしていた青子だが、突然真後ろから声を掛けられて冷や汗を掻きながら身長に振り返る。

「や、やっぱり来たわね」

そう、来てしまったのだ、今の状態でも普通に負けてしまふ相手に。

「バルトメロイ・ローレイ」

「さあ、どうするのです？もう結界を張り外界から切り離したので転移は出来ませんよ」

まさか、これをするために後から出てきたの？用意周到すぎるわよ。

「こ、こうなったら！！」

「何をするつもりですか？」

青子は後ろに跳ぶ。

「距離を置いて中・遠距離戦でもするつもりですか？やめなさい今の貴方は私に勝つことは……は？」

「ごめんなさい」

後ろに跳んで着地した瞬間、彼女は土下座をしていた。

「……………」

「……………」

沈黙が少し続いてからはあーっと溜息が聞こえてきた。

「謝って済む問題ではありませんが、その調子だと任務のほうは無事完了したようですね」

「……………え、ああもちろん」

あれ？何もお咎めなし？やったあ……

「じゃあ壊れた所の修繕費は任務の報酬から差し引いときますから
「そ、そんな」

こんだけ派手に壊したら修繕費なんてバカにならないわよ、報酬が
全額ペアだわ絶対。

「では英霊を回収させてもらいます」
「はいはいわかりましたよ」

トランクから小瓶を取り出して、投げ渡す。

バルトメロイはそれにちゃんと英霊が入っているかを確認するために、小瓶に少し魔力を通す。

「任務ご苦労様でした。では私はこれを降霊学科の室長に届けに行きます」

バルトメロイはそう言って結界を解除して博物館の中に消えた。

「はあ〜こうなりや、もうアレね飲むしかない、やけ酒よ!」

やけ酒をするために日本に転移する青子だった…………。

第三十二話

壱

ここは冬木市にある聖堂教会御用達の病院。

七日前の戦い（士郎達との）で大怪我をした人達が大量に運び込まれていた。

運び込まれた者の中に『衛宮士郎』・『遠坂凜』の姿は無く、もう一人の男、明神だけが運び込まれていた。

「先生、この少年全然目を覚ましませんね」

「検査した限りじゃ異常は無いんだが、どうしたものか……」

看護師とこの病院の院長は、この異常が無く外傷も無い少年に頭を悩ませていた。

「作戦のターゲットの家で眠っていたから一応運び込んだは良いものの、全く目を覚まさないし……」

「この少年の学生鞆の中に入っていた学生証に記されていた学校の電話番号に掛けてもそんな少年は居ないと言われた、ですよね？」

「全くその通り、一体この少年は何者なんだ」

看護師と院長が溜息をつくとき、他の看護師が息を切らせながら走ってきた。

「どうした？急患かい？」

「いえ、303号室の。。。さんの容態が……………（以下略）」

「そいつはまいったね。よし、すぐに行こう」

院長達はすぐさまこの部屋から出て行った。

そしてそれを見計らったように明神の目が開く。

目を開くと陽光で目がくらんで、多少の痛みがあった。

（ここは何処だ？何故俺はこんな所に寝ている？士郎達はどうした、戦いはどうなった？待て、焦るな、まずは今の状況を確認しろ）

まずは手足を動かし五体満足であることを確認。

右腕には点滴の針が刺さっていることを確認。

枕元を見るとレストランにある店員を呼ぶアレがある。

この情報を元にある答えにたどり着いた。

（そうか、ここは病院か。）

点滴は一定の期間食事を取らなかったから付けられたものだろう。

そしてこのボタンはナースコールでその配線を辿っていくと人工呼吸器やらをつなげるプラグがある。

思案していると、複数の足音と話し声が聞こえてきた。

（声からして男そして二人か。まずは情報収集だな）

明神は寝たフリをして耳を澄ます。

「なあ聞いたか、この前の作戦で埋葬機関の第七位が来たらしいぞ」

「へーそうなんだ」

「この病院のスポンサー様のお偉いさんだぞ？興味が無いのか？」

「全然、それよりあの子供たちのことが気になるね」

「ああ、あの茶髪の少年とツインテールの少女だろ？いや、あのツインテールの娘は良かったね」

「いいからどうなったんだよ」

「そんなに怒るなよ、あの二人は魔術協会の総本山まで搬送されらしい。多分今回のことで二人を裁判に掛けるんだろ？もしかしたら死刑だぜ死刑」

「どうにか出来ないものか」

「俺たちじゃ何も出来ねーよ。正義の味方でも出てくれば良いんだけどな」

「全くだ」

二人の男は明神の病室をすぎていった。

（あの二人が死刑か・・・これは不味いな。でもまずは情報の整理だ）

まずあのバカ（神）が言っていた強い人は埋葬機関第七位“弓のシエル”のことらしい。

この病院のスポンサーは聖堂協会だということ。

士郎と遠坂は魔術協会の総本山ロンドンに居るとのこと。

そしてその二人が死刑になるかもしれないということ。

（分かったのは以上の四つ。ふむ本当に不味いな、まあ今後のことは今日の夜遅くに病院を抜け出してから考えよう）

弐

ロンドンの魔術協会総本山“時計塔”そこでは中心に少女を、その周りを大人数の人間が囲んでいた。

その中でも、裁判長らしき男が質問してくる。

「もう何度も聞いているが、君のサーヴァント、セイバーは此方に居る。大人しく君のその右腕に刻まれている令呪を我々に譲ってもらえないだろうか？」

「却下します」

「ふう、強情なお嬢さんだ。では質問を変えましょうライダーと君のではないセイバーのマスターを教えてくださいませんか？」

「黙秘権を主張します」

ここ一週間同じことしか質問されておらず、流石の遠坂でも精神的に疲労が溜まってきていた。

（毎度毎度同じことしか質問してこないわね。どうせ何も言わないんだし、私が折れるのを待っても意味ないって言うのに）

裁判長らしき男が溜息をついて何かを決心したのか、此方を今までとは違う冷たい眼で見てくる。

「ここ一週間ずっと話は平行線まま。しかたがない、話す気がないのなら先ずは君のその右腕を切断しますか」

「——っ——！」

（やばい、一番やられたくないほうで来たわね）

背中から冷や汗が染み出しじっとりとしてきた。

（もうだめね、諦めようかしら。どうせ腕を切られた後、自白剤とか頭の中をいじくられたりするんだし——腕を切られる前に舌を嚙んで死のうかしら——）

そう覚悟していたら会議室の扉が勢いよく開かれる。

それに少々驚きながら議長らしき男が尋ねる。

「今は大事な会議中なのだが、その慌てぶり、どうしたのだ？」

「はあっ、はあっ。さ、先ほど国外からの電話がありました」

「電話だと？」

「はい、向こうの話す言葉は最初は日本語でしたがすぐに英語に切り替えてました、そして声からして性別は男かと」

「相手は日本人か。で、その内容は？あれだけ慌てて来たんだ重要なことなんだろうな」

「相手の用件は、遠坂凜・衛宮士郎それとセイバー二人にライダーを明日の正午までに開放しなければ————ここ、大英博物館すなわち地下にあるこの塔を爆破する————という脅迫電話がありました」

裁判長らしき男は眉間に皺を寄せて黙り込む。

それを見て周りから話し声が聞こえてくる。

男は数秒後に目を開けた。

「これはもしかしたらライダーもしくはセイバー（男）のどちらかのマスターがこのこと此方まで出向いてきたということ。・・・

・面白い。皆の者、今すぐにここを基点に半径十kmにいる日本人を追跡、そして脅迫者らしき男を見つけ次第拘束し、ここまで連れ来るのだ！！それと、見つけて拘束してきた科には特別予算を与える、ではすぐに行動せよ！！」

「・・・・・・はっ！！！！！！」

そう言つて周りに居た人達はこの部屋から出て行つてしまった。そこに取り残されたのは、遠坂とその他数名だった。

（・・・・・・もしかして・・・・・・私助かったの？）

遠坂は自分が助かった事に気付き、少し呆然としていた。だが裁判長らしき男はそれに気付き、すぐさま近くにいたものに命令をした。

「そこに居る遠坂の当主をいつもの部屋に連れて行け」

「分かりました」

「あ、ちよっ」

遠坂は強化魔術が得意そうな（がたいが大きい）男二人に連れられる。

（さっきの話分かったことは脅迫電話の相手が間違はなくアイツだろうし。ていうかやっと思が覚めたのね……）

遠坂のアイツとはこの前の戦いで目を覚まさなかった明神蒼緋のことである。

（だけどこれで少しは寿命が延びたわね。どうせあのじじいは私を監禁して蒼緋をおびき寄せる餌として使うつもりなんだろうけど。まあいいわ蒼緋が助けに来てくれるのを気長に待つとしましょうか）

気持ちを切り替えて、遠坂は監禁部屋（何重にも結界が張られている中は普通の部屋）に鼻歌を歌いながら自分から入って行った。

それを見た二人の男は遠坂を頭のおかしい女だと話していたと言う。

参

現時刻は夜の十二時丁度、もう病院内は消灯されている時間だ。

一つの影が暗い病棟を低い姿勢で走り抜ける。

見回りの看護師が来たら物陰に隠れたり、適当な部屋などに隠れたりもした。

この忍者の様な行動をする者は明神蒼緋だった。

明神は目的の部屋に着き、色々な所から拝借してきたピンセットやヘアピンを使いピッキングする。

そしてピッキングに成功した部屋に入り、目的の物を探す。

（これか？）

学生が持つような鞆を発見し、懐中電灯を使い中身を確認する。

中身は数枚のプリント・ノート・筆記用具・携帯&充電器・財布・刃渡り二十センチのサバイバルナイフ。

（よし、これで全部か……いや、まだ何かあったな、なんだったかな？）

頭の中で一ヶ月位前の記憶を呼び起こし、バッグの中身を思い出そうとする。

それから二分後にやっと思い出した。

（俺の生徒手帳が無いのか、参ったなアレが無いとすると、俺が異世界人だとバレてしまう。幸いここはこの病院の院長室ここに無かったら諦めるしかないか）

一番ありそうな院長の机を調べる。

一段目は鍵が掛かっていてそれより下は鍵がついていなかった。

鍵付きの引き出し以外には、入っておらず一段目の鍵をピッキングをし確認する。

引き出しの中を確認すると、見慣れた手帳のカバーが見え、それを

手に取る。

(これは……)

生徒手帳には重量感が無く、おそろおそろ開いてみると——中身が無かった——。

代わりにカバーに挟まれていたのが一枚の紙だった。それにはこう書かれていた。

『この手帳が欲しければ取引をしようじゃないか。』

今日の0015(マルマルヒトゴ)

に

この病棟

の屋上に来てくれ

——院長』

(読まれていただと！？それに取引を持ちかけられるとは、完璧にやられた。)

自分の行動を読まれ、そして取引を持ち掛けられるなど家族以外初めてのことだった。

「く、くくくはははは。いいだろう行ってやろうじゃないか」

明神は踵を返し、院長室から出て屋上へ向かった

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0885j/>

神に力を与えられた少年

2011年5月3日13時19分発行